

捻くれ者と強すぎる艦娘。

ラバラペイン

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

何番煎じかわからない

俺ガイルと艦これのクロスオーバー。

やたら強い艦娘により運営される艦娘鎮守府。

元々艦娘を指揮していた元帥が隠居し、それにより新たな提督が必要となった。

そこで艦娘が要求した新しい提督の条件。

『艦娘のやり方に口を出さない』

『艦娘に手を出す様な人間じゃない』

『野心が無い』

『艦娘を他者に利用させない』

この条件を満たしてしまった八幡が、強すぎる艦娘と過ごしていくシリアス薄めのラブコメディです。深海棲艦は死ぬ。

## 目次

提督になるまで1	1
提督になるまで2	3
提督になったが、小町に会いたい	5
提督になったが艦娘が凄すぎて暇まである	8
提督とサブマリン1	11
提督とサブマリン2	14
提督になる時	17
提督になる時2	19
提督になる時3	22
提督になる時4	25
提督になる時5	29
提督になる時6	35
厳しい秘書艦とクス	42
提督の業務は色々あるよー的なアレ	47
作戦会議と、魚雷	55
艦娘のやる事は科学的に考えてはいけない。	62
うちの艦娘の戦闘力は53万です。	69
こうやってアホみたいに強くなっていくんだな(達観)	80
艦娘の活力とか勢いは凄い	90
我が鎮守府の自由度高すぎ問題	97
青葉ノートそのいち	106
青葉ノートその二	113
青葉のーと そのすりー	121
青葉ノート、そのふおーとなう	128

守るべくはサンマ2

守るべくはサンマ1

## 提督になるまで1

『人生、何が起こるか分からない』

この数年ほどこの言葉を実感した事は無いだろう。いやホントに。まずことの発端は3年前、大学受験に落ちた。俺が。由比ヶ浜じゃなく俺が。

一応点数には自信があったんだが、まあ俺より優秀だった奴がその年は特別多かったのだろう。しかしすぐにその現実を受け入れられる訳もなく、ふらふらとあてども無く歩き、気がいたら浜辺に居たのを覚えている。

別に自殺しようとかそういうのでは無く、単純に一人になりたかった。

夕日の見える浜辺に座り込み、何故か周囲に現れた小さな小人達と戯れながらぼんやりしていたら――

海軍に捕まりました。

いきなり軍服の人間が現れて「君ちよつと良いかな」と言われ海軍基地に連れ込まれた時には正直ちびるかと思っただが、どうやら悪いことをしたから捕まった訳ではなく、俺には特別な才能があるから是非海軍で役立てて欲しいということらしい。

なんでも浜辺で現れた小人は妖精というらしく、それが見える人間は非常に貴重らしい。受験に落ちた俺が現実逃避で幻視した幻覚じゃなかったのか。

しかも俺は特別好かれているらしい。人間には好かれないのにね！ あれ、前が霞んで見えねえ。

しかし、しかしだ。俺の将来の夢は専業主夫。そうやすやすと不労の夢は捨てられない。

という訳でそのこと含め色々脚色付けてダメ人間ぶりをアピールしてみたが、『軍人相手にそんなことを言える胆力が素晴らしい』『出会いならある』『仕事はそんなに難しくくない』『衣食住も保証される』などと一向に諦める気配を見せない。というか最後それ帰れないうってことじゃねえか。

難色を示す俺に痺れを切らしたのか、なんか偉いっぽい人が持ち出してきたのは一枚の紙。なんでも俺になつて欲しい役職である『提督』の最低給与その他が記されているらしい。提督って一定の地位が無きやなれないんじゃないかと思いつながら紙を見たのが運のつき。

気がついたら提督になると約束していた。

いや、毎月新車が軽く買えるレベルの額を提示されたらねえ。

まあ数日後軍学校に入れられ早くも後悔することになった。

うまい話には裏があるに決まっているのだから。

結論を言おう。それから色々あり3年後である現在、俺は提督をやっている。

太平洋にある絶海の孤島で——金がほとんど役に立たない——

やたら強い艦娘に囲まれ——出会いっというか多分嫌われてる——

楽な書類仕事をしつつ——書類仕事以外が死ぬほど面倒臭い——

衣食住を保証された生活——だが小町に会えない——  
を送っている。

自分が悪いんだけど、こう言わざるを得ない。

騙された！

## 提督になるまで2

そもそも、あれから3年だ。3年しか経っていない。

叩き込まれた軍学校は結局卒業せずに提督になってしまった。体裁とか大丈夫なのかと思っただが、艦娘自体あまり公になっていない存在だから今更ではあるか。

そう、艦娘。軍艦の記憶を持って生まれた少女。妖精により建造されたり、敵である深海棲艦を倒した時稀に現れたりする確かな人外。初めて見たときはそりゃ驚いた。俺を軍に入れた理由が艦娘を率いて貰うためだと聞いて更に驚いた。女の子の集団に俺を突っ込むとか正気か。材木座じゃないが死ぬぞ俺。

### 閑話休題。

軍学校で恐ろしい縦社会を嫌という程学び、体もある程度鍛えられてきた頃、なんでも元帥が年齢的に厳しいということで引退したらしい。

その元帥の率いていた艦娘というのが問題で、まず元帥以外の言うことを聞かない。それから他の艦娘と比べるとちよつとおかしい程に強い。具体的には駆逐艦が戦艦を昼戦で屠れる程だ。

そうなつてくると軍からしたら恐ろしい。いつ艦娘の気が変わりに国に反旗を翻すか気が気じゃないからな。実際あの艦隊なら数時間暴れるだけで東京は滅びそうである。やはり指揮する人間は必要だと考えた。

しかし何人が提督を当てがったものの、碌な人間がいなかったらしい。何を勘違いしたのか艦娘に手を出そうとする奴だったり、艦娘の強さを利用して軍を好き放題しようとする輩だったり、果ては艦娘を使って日本を滅ぼそうと企てた奴も居たっけか。

まあその悉くが優秀な艦娘に事前に察知され、其れ相応の報いを受けたりしいが。さて置き。

流石に艦娘もうんざりしてきたのか、軍に直接要望を出した。

『艦娘のやり方に口を出さない』

『艦娘に手を出すような人間でない』

『艦娘を他者に利用させない』

この三つだ。

それに追加で軍が、

『野心が無い』

を加えてから、新たな提督探しが始まった。

しかし当然ながら提督探しは難航した。

まず艦娘の提督になるには妖精が見えることが前提であり、見える人間も扱いづらすぎる艦娘の提督にはなりたくなかったのか辞退。野心のあるものはダメというのも足を引っ張った。

そこで白羽の矢が立ったのが俺である。

え、なんで？ と当然思ったが指名したのは3年前（指名当時からすれば2年前）、俺に給与明細を持ってきた偉いっぽい人物、というか中将だった。

元々俺は軍に入りたかった訳ではないから野心は無く、ぼっちだから艦娘に手を出すような度胸も無く、知識も無いから艦娘が勝手に指揮することに抵抗も無い、という詭えたような人間だった。また俺の観察眼もバレており、艦娘を利用しようと近づいてくるものはすぐに見抜けるだろうということも加点になった。

そこからはもうとんとん拍子である。あれやこれやと手続きが進み、孤島に送られた。

もう一度言おうか。

孤島に送られた。

しかも最前線。

何も悪いことしてないのに酷い島流しもあったもんだ。



提督になったが、小町に会いたい

目が覚める。ぼんやりと意識が覚醒して行く。枕元の時計を見る限りまだ6時前で、目覚ましが鳴った訳では無いのに目が覚めてしまふ辺り、この生活が習慣づけられてしまったようだ。高校の頃からは考えられない。

この提督になっておおよそ一年が経った。かと言って提督としての自覚が生まれるでもないのだが。なんならまだ顔と名前が一致していない艦娘すら居る。流石俺。も、もちろん覚えてるのも居るから。

予定よりも大幅に早く起きてしまったが、働きたくない。よし、目覚ましが鳴らなかつたことにしていつも通り二度寝を決め込むでしょう。早起き出来るようになったが二度寝しないともしやダメだ。無理矢理起こしに来るような小町は居ない。

……………。

ああああ、小町に会いたい。

比企谷八幡、21歳。絶讚ホームシック中です。

二度寝の気分じゃなくなったので起きることにする。はあ、小町い……………。

もしここにマツカンすら無ければ俺は死んでいたな、うん。定期便で欲しいものを聞かれた時にマツカンと答えておいて良かったぜ。

ホームシック故に妙にセンチな気分になりながら自室でマツカンを飲んでいると、けたたましい音と共に俺の部屋のドアが蹴り開けられた。ああ、蝶番が……………。

「クソ提督!! いつ迄寝てんのよ、仕事…………つ!? くつ、クソ提督が、起きてる…………!?!」

ドアをひと蹴りでお釈迦にしたこの少女は駆逐艦、曙。長い髪を花の髪留めでサイドテールにして纏めているのが特徴。あと口が悪い。「いや俺だって自分で起きる時くらいあるわ。何? 俺が早起きする

のはブリ??ちみたいな驚かれ方する程の事なの?」

「あんた目え離すと二度寝三度寝して出てこないじゃない! 仕事しなさいよ!」

馬鹿な、流石の俺もそこまで寝たことは……あるわ。しかも一昨日だ、めっちゃ最近だったわ。

「あー、せめて小町が起こしてくれれば起きるんだがなあ(起きるとは言ってるない)」

そんなことをボヤいたら曙が固まった。どしたの?

「こつ小町って、誰……? ま、ままままかさか、彼女? そのキモい目で? クソ提督に!」

なんか物凄い顔で戦おのかれた。

キモい目でって酷くない? いや事実だけでも。

「何テンパってんのか知らんが、小町は世界一可愛い俺の妹だ」

成長につれて可愛いだけでなく綺麗が追加され、綺麗で可愛くあざとい妹が完成してしまった。って何その陽乃さんと一色のハイブリッド、おねだり断れる気がしねえ。

「な、なんだ妹さんね、誰かクソ提督の毒牙に掛かってたのかと思って焦っちゃったじゃない!」

なんか雪ノ下みたいな事言ってる……。

「流石に理不尽じゃないすかね……。んで、作戦室でいいのか? あとドア直しとけよ」

大方近場に敵艦隊が現れたとかだろう。

「そうよ。鳳翔さんの飛ばしてた索敵機が発見したの。結構近いから早いとこ潰さないと面倒なことになりそう。……ド、ドアは直しく、ごめんなさい」

こいつらの事だからマジで『面倒なだけ』なんだろうなあ。今更何が来ても蹴散らす未来しか見えない。

それとめっちゃ小さい声でごめんなさいしてるが、残念だったな、俺は難聴系じゃないんだよ! まあ治すのは臍とかだろうけどな。こいつ不器用だし。

「というかやっぱ俺いらなくない? 作戦つつつても俺が考える訳

じゃないし。マツカン飲んでゴロゴロしていい？」  
「いい訳ないでしょクソ提督」  
尻を蹴られた。

提督になったが艦娘が凄すぎて暇まである

――作戦室――

雑魚狩りの作戦会議のはずが、いつの間にか海域拡大のブリーフィングになっていた。どうせそこまで行くならついでに海域確保してもよくない？ 的なノリらしい。ぶっちゃけ会議に俺要らないけど、何故か参加を強いられるのである。

「以上が、今作戦の概要です。提督、何か質問はありますか？」

そう聞いてきたのは日本を代表する戦艦と言っても過言では無い、大和。あまりこっちを見ないで頂きたい。美人すぎて緊張する。駆逐艦は相手しやすいんだけどなあ。

「いや、特に無い。つーか毎度思うが元帥の教えすげえな。無駄が全く無いというか、洗練されてるのが分かる。ほとんど素人の俺がそう思えるのはすげえことなんだろうな」

彼女らが要望に『艦娘のやり方に口を出さない』としたのは、前提督である元帥の教えに誇りを持っていたからだだった。最初こそ「口出しするなって作戦とかどうすんだ」と思っていたが、蓋を開けてみればやらぬ心配だったわけだ。そして実際その教えは実践的で無駄が無い。艦娘自体の能力が高いのも相まって、深海棲艦が頑張つて頑張つて漸く小破が一人二人出るくらいである。ここ最前線なのに。

あまりにサクッと勝つてくる、いや狩ってくるものだから他の鎮守府では苦戦を強いられるらしい姫級、鬼級の危険度が未だ実感出来ない。

「ふんっ、凄い凄いはっか言つても学ばなきや意味ないのよ。そこんとこ分かってんのクソ提督？」

やはりつつかかって来たのは曙だ。だが、

「にやけてんの隠せてねえぞぼのたん」

元帥の教えを褒められて嬉しいのが隠せていない。ほっぺたが緩々である。隠れお爺ちゃんっ子だったんだらうか。

「ぼっ、ぼのたん言うなこのっ、クソ提督!!」

そう言いながら足を蹴ってくる。痛い痛い。艀装を付けてないか

ら子供の脚力だけだな。逆に艤装つけてたら俺の足は消し飛んでる。そんなことしてたら大和に注意された。

「はいはいブリーフィング中ですよ。それで提督、何かありませんか？ 口を出さない様お願いはしましたが疑問点なんかは別に構いませんよ？ むしろ別の視点からも意見がある方が視野が広がりますから」

そう言われてもな。俺もまだ戦術は勉強中の身だし、今回の作戦に問題は見当たらない。だが……。

「そうだな、強いて言うなら疲れとか大丈夫なのか？ ここまで連戦しているが」

実はこの海域を広げる侵攻は、4連戦目になる。それぞれの作戦の間に休みは取って居るし、片道に何日もかかるのが海の世界だから毎日戦闘尽くしという訳ではないが、それでもいささかハイペース過ぎる気もする。疲れとか感じさせないから実際は分からないが。

「ふむ。まだまだ行ける、余裕だ、と言いたいところだがこれは戦艦基準だしな。駆逐艦辺りにはそろそろ休みを与えても良いかもしれない。疲労は見えない所に溜まるものだしな」

そう言ったのは大和と同じく日本を代表する戦艦の一隻、長門。正直あまり話したことがないからレスポンスが長門から来て少し焦った。

「その所、駆逐艦としてはどうだ？ 吹雪」

「え、ええっ!? 私ですか!? そ、そうですね、そういえば皆少し疲れてるように見えた、かもしれないです」

いきなり話を振られてテンパったのは、えーと、特型駆逐艦の吹雪。特型はやばい。まだほとんど見分けがつかない。

「そうか。では海域確保は少し遅らせても良いかもしれないな。一応前回までの侵攻で粗方この辺りは掃除出来たはずだろう？」

そう大和に確認する長門。

「ええ、元々次の作戦は可能であれば、と言うものですからね。ここまですぐに進撃出来ただけでも充分な成果かと。」

ーでは海域確保は行わず、当初の予定通り発見された敵艦隊の殲

滅のみを行い、すぐ帰投するということでもよろしいでしょうか？」

『異議なし！』

あ、そうだ。

「さっき言ってた雑魚狩りは川内辺りに任せたらどうだ？ いい加減夜がうるさい。夜戦して良いって言えば飛びつくだろう」

川内型軽巡洋艦、川内。通称夜戦バカと言われる程の夜戦好きである。夜戦が長いこと出来ないと夜中騒ぐのだ。子どもかっ。

あ、ところでこれって口出したことになるのだろうか。

『異議なし!!!』

……満場一致だから大丈夫か。

## 提督とサブマリナー

会議終了後、朝食を食べる為に食堂に来た俺。同じく会議をしていた他の艦娘達はまだ他にも仕事がある様だ。俺も朝食を食べたら執務室で書類仕事が待っている(嫌だが)。

間宮さん(実は艦娘らしい)にカレー定食を頼み、なるべく目立たないよう隅に座る。いや本当はね? ベストプレイス見つけて一人で食べようと思つてただけど、食器持ち出そうとしたら怒られた……。なので仕方なくここで準備ぼっち飯という訳だ(ちなみに真ぼっち飯があり、そちらは本当に独りで食べることを言う)。

カレーが出来るまで手持ち無沙汰なので、何となく食堂の中を見渡す。数人の駆逐艦他艦娘がちらほらいるくらいで、朝食のピークは過ぎていた様だ。緩やかに進む時間の中スマホを片手に時間を潰す。因みにこのスマホだが当然正規品ではなく、位置情報や送受信した内容を傍受されない様ダミーにすり替える特殊な加工がなされた一品である。その為ネットサーフィンくらいは出来るのだ(場所が場所だからクツソ重いが)。

まとめサイトをぼーつと読んでいると声を掛けられた。

「提督、またぼっちで飯でちか?」

「げっ」

カツ丼の乗ったお盆を手に持ちながら声を掛けてきたのは伊号型潜水艦、伊58。潜水艦は基本的にスク水セーラーの様な服装で、非常に目の毒である。いやマジでどこ見れば良いのか。

こいつはどういうわけか俺に絡んでくる艦娘の一人だ。いつもいつもという訳ではないが、偶にふらりと現れては軽く雑談をして帰って行く。何がしたいのかわからん。接点なんか無かった筈なんだが……。

今までのことを軽く想い出していると、失礼な反応でちね、とか言いながら俺の隣に座られた。

「いや、……なんで隣に座る?」

「ゴーヤも朝御飯でち」

そうじゃなくて。そうじゃなくてね？

「他に席いっぱい空いてんだからよそのテーブル行けよ。せめて前とかさ……」

スク水少女が横に座つてるとか今までしたことないタイプの緊張感なんだけど。

「あ、提督のご飯出来たみたいでちよ？ 早く取りに行くでち」

お願い、話を聞いて！

そんな想いを込めて睨んでも何処吹く風。釈然としないまま席を立ち、間宮さんからカレーを受け取った後、58の隣、には戻らずに向かいに座った。

「提督は照れ屋さんでちね！」

うるせい。

なんか恥ずかしいので黙っていると、何を勘違いしたのか一気に暗い表情になった。

「その、……本当に迷惑だったら向こうで食べるけど、ええと……」  
……………ああもう。

「少しでも迷惑だったら最初の時点で突き放してる。あんまり近づかれると困るけどな。お前は自分の恰好がどういいう物か自覚するべきだ」

「……！」

俺がそう言うのと途端に表情を明るくした。

「やっぱり提督は照れ屋さんでち！ ……でもこの恰好そんなに変わなあ？ 潜水艦は皆こんな感じだよ？」

変というか、こう、男の子は困っちゃうよね。本当誰だよこんな制服(？)考えた奴は。けしからん。ありがとうございます。あ、伊19、てめーはダメだ。あざとい。58もあざといが奴は桁が違う。

「いや、変なわけじゃない。むしろよく似合っ……ところで58は今日はおフなのか？」

つぶねー、もしこいつが一色だったら凄まじい振られ長文を頂く様なことを言うところだったわ。ギリギリ会話を変えることに成功、

「んんん？ 提督ー、今なんて言いかけたんでちか？ よく似合、なん



でちかあ？ ねえね提督ー！」

ダメでした。

「はいはい世界で二番目に可愛いよー」

「わぁ適当でち!?! しかも一番じゃない!?!」

「お前結構凶々しいな……そう簡単に一番の小町を超えられると思うなよ？ 千葉の兄妹舐めんな」

「しかもシスコンだあ!」

「バツカお前妹が大事で何が悪い。というか艦娘とか皆シスコンみたいなもんだろぅが」

「そうでちた」

## 提督とサブマリリン2

「ところで提督、今日はお仕事無いの？」

随分ゆっくりご飯食べてるけど」

俺がのんびりしたペースでカレーを食べていたら58がそんな事を聞いてきた。因みに58は既にカツ丼を食べ終わっている。普通に俺と会話してたよな……？ なんだその謎の技術。

「いや、あるぞ。飯食ったら書類仕事が待ってる。ああ働きたくない。ずっと寝てたい。……でも安くない給料貰ってるからな、本当に働かないわけにはいかん。とはいえやっぱ働きたくないから、少しでも食べてる時間を伸ばして時間稼ぎだ」

なまじ高い給料なものだからあまりサボり続けると罪悪感が半端じゃないんだよなあ。

「うわあしよっぱい抵抗……。今日の秘書艦、確か霞ちゃんだった気がするけど忘れてるのかなあ。でも面白そうだから黙っとくでち」  
「いいんだよ、なんだかんだ仕事終わらせるのが俺だから。そういうお前は今日仕事ないの？ さつき聞きそびれたけど」

「それ自分で言うんでちか……。今日、というか今週のゴーヤは完全オフでち。あ、でも艀装の使用許可は欲しいでち」

「んあ、なんで？ 折角オフなのに海に出るの？」

「暇だからオリヨクルしてくるでち」

カラーンツ。

俺は手に持っていたスプーンを皿に落とした。

「オ、オフなのに仕事するってお前マジ……!？」

オリヨクル。正式名称オリヨルクルージングと呼ばれる潜水艦御用達の物資調達任務の事である。燃費の少ない潜水艦を少数用いて、オリヨル方面にある物資を少しずつ集めることを言う。当然ながら道中に深海棲艦は出るし、途中怪我することだってあり得る。聞いた話だが他所の鎮守府ではこのオリヨクルを延々と回し続け、ノイローゼになりかかっている潜水艦がいる所もあると言う。そんな通常の潜水艦なら忌避するような海域に、暇だから行ってくるっておま

……。いやでも、本当にただクルージングするだけかも。

「あ、資材はキッチンと持ってくるから安心して欲しいでち！」

「いやそれだとガチでただの仕事じゃねえか！ 折角オフなんだぞ？ 休もうぜ？」

「そんなこと言われても暇なんでちい！ ここ娯楽が無さすぎでち！ 何も知らない敵戦艦をステルス撃沈させるくらいしかストレス解消出来ないでち！」

予想外すぎるストレス解消法だった。確かにこいつなら、というかこの艦娘なら単艦で、しかも無傷で帰還出来るからもはや暇潰しになってもおかしくは無いが……。

「い、一応居酒屋とかあるじゃん？」

「ゴーヤも少しは飲むけど隼鷹さんとかポーラさんみたいにお酒さえ有れば大丈夫ってタイプじゃないでち」

そりやそうだ……。ううむ、そう考えると思ったより皆溜め込んでんのかな……。思わぬ闇を見てしまった気分だ。

この鎮守府は、海域を確保した際に発見した孤島に大本営が作らせたもので、まだ築3年行くか行かないかの新築なのだ。よって施設は最小限。元帥がいた頃はちよくちよく本土に帰っていたみたいだから、そこまで不満も溜らなかったのだろう。本土なら娯楽いくらでもあるしな。

流星に可哀想だし、58だけの問題じゃ無さそうだ、……。なんとかしてやろうかね。今は諸事情あってうちの艦娘を本土に送れないし。「わ、わかった。次の定期便に何か暇つぶしになりそうな娯楽品を頼んどく。ゲームとか本とか」

本自体は少なく無いが、仮にも軍事施設だ、娯楽小説の様なものは殆どない。それこそラノベでも頼んどいたら案外評判良いかもな。

「ホントでちか!? やたー!! 提督ありがとうでち！ それじゃ58はウキウキ気分でオリヨクル行ってくるでち！」

オリヨールは行くんかい！ 戦艦撃沈させるのが暇つぶしなのはガチらしい。

「あ、それと提督、今日の秘書艦霞ちゃんだから急いだ方がいいでち

よ

「すいませんそれ死刑宣告です。いや秘書艦忘れてた俺が悪いんだけどな。日替わりだからしょうがない。」

去って行く58を尻目に俺は急いでカレーをかつこんだ。

## 提督になる時

――1年前――

軍学校に入れられ、中將の息のかかった先輩（というか実弟）に可愛がって貰いながら（とてもオブラートに包んだ表現）、上下関係縦社会を嫌という程学び、それでも挫けずになんとか、なんつつつとか2年間余りを乗り越えた頃。訓練の合間の休憩中に家から持つて来たマツカンを飲んでいると、唐突に現れた先輩に腕を掴まれ引きずられ、来賓用の応接間に連れてこられた。尚ここまで先輩は笑うばかりで一切の説明をしなかったことをここに記す。

「それで先輩？　なんだって俺はこんなところに連れてこられんですかね？　いい加減説明があっても良いんじゃないですか？」

いきなり連行されよく知らない部屋に連れて来られる。俺としては何だかデジヤブを感じる流れである。

「はっはっは、それはあの方が中で話す」

そう言いながら先輩は応接間の扉をコンコンコンとノックし（そこはあの先生と違った）、

「大將！　比企谷八幡を連れて参りました！」

「はっ!?　大將?!　ちよつと待つ」

「よし、入れ」

待つてくれないかあ……。

「失礼します！　ほらお前も入るんだ」

「え、ええ……。し、失礼します……」

戸惑いながらもそろそろと応接間の中に入る。

中で待ち受けていたのは、

「久しぶりだな、比企谷くん？」

「ちゅ、中將?!」

俺を極めて強引にスカウトした中將だった。え？　金に目が眩んだ？　アーキコエナイ。中將が俺に対し色々便宜を計ってくれているのは彼の弟である先輩から聞かされてはいたものの、実際に会う

のは久しぶりである。

「はっはっは、君がのんびりやっているうちに大将になってしまったよ」

「あんたはどこの国家錬金術師だ……」

「し、失礼しました大将。それで、なぜ俺は呼ばれたんでしょうか……？」

面倒ごとの匂いがプンプンするから、出来れば早く帰りたいな……つて……。連れてきた先輩に恨みの視線をぶつけようとしたら、先輩は既に居なかった。あれ？ 先輩!?

「ああ、彼は既に下がらせた」

大将は俺の顔から疑問を読み取りそれに答えた後、大仰に言い放つ。

「喜べ比企谷クン。君の才能が漸く役だつ時が来た！」

「妖精とコミュニケーションが取れるってやつですか」

現状ハーヴェエストごっこにしか役に立っていない才能。いや、妖精さんノリノリで遊んでくれるもんだからつい。

「そうだ。予想外にデカイポストが空いてな。丁度君しか適任がいなさそうだから私の権限でねじ込んだ」

何余計なことをしてくれてんだこの大将？ デカイポストとか嫌な予感しかしない。

俺は恐る恐る質問する。

「えっと、そのポストとは一体……？」

「聞いて驚け、そして誉れに思え。引退した元帥の指揮していた艦娘、その提督になつてもらう！」

## 提督になる時2

ほおん、提督ね……………。

!?

「は、はあああ!??!? げ、元帥!? 提督?! か、カンムスが何かはよく分かりませんが、元帥の持ち物を俺が引き継ぐって事ですか? まだ俺軍学校卒業すらしてないんですが!」

そう俺が大声を出してしまうのも無理からぬことだろう。元帥といえど海軍でも大将より上に位置する、実質最高位の階級である。

そんな人間からーカンムスが何かはわからないがー引き継いだらどうなるか、想像するだに胃が痛くなってくる。例えるなら料理を始めたばかりの人間にプロのシェフが一級品の調理道具一式を渡すような物だろうか。な? 重いだろ?

「それは勿論知っている。だがそもそも、軍学校に入れたのは君をキープする為でな。あの時既に何らかのポストが空いていたならすぐに入って貰ったくらいだ。軍に関する最低限の知識さえあれば、艦娘の提督は出来るからな」

そのぐらいの知識なら数ヶ月の座学でどうとでもなる、と笑いながら言う大将にぞっとした。俺2年間通っててまだ覚えてないこと沢山あるんだけど……。つとそれよりも。

「あの、話の腰を折って申し訳ないんですが、その……カンムスって何ですか?」

何であれ面倒ごとは断り早く帰る腹積もりだったので敢えて聞かなかったが、なんかもう断れる空気じゃないし、そうなら知っている前提で話されてもこれから困る。

俺が質問すると大将は今気づいたという顔をした。

「おお、そうだったな。まずはそこから説明せねば。折角の資料も無駄になる」

そう言いながら彼は自分の鞆を開き、中から資料らしきものを一部渡してきた。カラー印刷だ。タイトルはシンプルに『艦娘について』。

俺はそれを受け取り、パラパラと捲る。

「カムムス、艦娘ですか。なんか女の子がいっぱい載ってますが、軍人なんですか？」

「にしては随分幼く見える者も多い。軍艦を操作する少女だから艦娘、とかか？」

「いや、その少女達こそが艦娘であり、戦時下の軍艦の記憶を保有する、深海棲艦に対する唯一の対抗手段たる兵器そのものだ」

資料を流し見ながら何だ深海棲艦って、とか思っていたら丁度深海棲艦の説明をしているページを開いた。

……俺は言葉を失った。

そこには駆逐イ級と名付けられた、文字通りの化け物の写真が載っていた。

ええ……なんか怪獣映画の敵みたいなのが写ってるんですけど。え、何？ 今海にこんなの棲んでんの？

更にページを捲っていく。駆逐口級、ハ級、軽巡ホ級、ヘ級。写真を見れば腕や顔、脚など人のパーツが付いている物も多い、というか人パーツの割合が多い方が危険度は高いようだ。うわ、空母ヲ級なんか普通に人間にしか見えんぞ。その癖記述された危険度はかなり高い。商業船や漁船、海外の軍艦まで沈められたりしている。外見に騙されてはいけないようだ。

………ん？ 待って、艦娘自体が兵器なの？

「艦娘が兵器そのもの、って、どう見ても女の子なんです。彼女達が深海棲艦を倒すんですか？」

にわかには信じたいが……。

「そうだ。というよりも彼女達しか倒せない。どういうわけか我々人間が作った兵器では、深海棲艦に傷一つつける事が出来なかった。某国が核を利用して攻撃した事があったが、そこまでやって漸く駆逐が一体倒せた程度だ。敵一体につき最低1発なんて頻度で核を撃てば、海は死ぬ。そんな中唐突に現れたのが、艦娘、というより妖精だ」

俺はいつの間にか右肩に乗っていた妖精さんを見る。何故白鳥の湖を踊っているかは不明だ。

「そこに居るのか？ ……まあいい。現れた妖精は瞬く間に多数の艦



娘を『建造』し、戦線海域を押し上げた。その後は妖精を見る事が出来る者が艦娘を管理し、各方面の鎮守府に送り、また建造を行い増やしたりしながら日本の制海権は現在まで維持されてきたというわけだ」

「ここまでで何か質問は？　とこちらを見る大将。」

「んじゃ提督っていうのは……」

「お察しの通り、艦娘を指揮する提督だ。彼女達は兵器だが自我があり感情があり、誇りがある。その艦娘とどう接していくかは提督永遠の命題だ」

なるほどな。……いや、無理無理無理！　こんな女子の集団を指揮する提督になれとか、この人俺に噴死して欲しいの？

「いやいや、俺なんかより適した人間がいるでしょう。提督ってことは艦隊指揮とかあるんでしょう？　俺はそういうの全く覚えてないですよ！」

なんだつたら駆逐艦とか軽巡とか言われてもよくわからないレベル。ふーん、軽いのね、くらいの浅さ。

「その心配は最もだが、今回は本当に特殊なパターンでな。君は艦隊指揮をする必要はないぞ。書類仕事をしながら艦娘とコミュニケーションを取るだけ、……ではないが、まあ大体そんな仕事内容になるだろう」

えっと、それって提督って呼べるんですかね。

「ええと、どういうことですか？」

「では説明を続けよう。ここまでは世界の海の話。ここからは日本海軍の話だ。安心しろ、そこまで長い話じゃない」

### 提督になる時3

大将は一呼吸置いてから再び話し始める。

「先月の話だ。年齢的に厳しくなっていた前元帥が退役してな。色々引き継ぎを行ってから田舎に隠居した。その引き継いだ物の中には当然艦娘も含まれていた訳だが、そいつらが少々厄介でな……」

「厄介？」

「なんだろう。滅茶苦茶性格が悪いとかだろうか。いやまあ艦娘が実際どういうものかまだよく分かっていないが。」

「彼女達は長年優秀な元帥に付き従がっていたのもあってか、指示なしでも凄まじいまでの連携力と指揮力が備わっていてな。生半可な提督の指示には従うことは出来ないと言いつ出したのさ」

「え、それってありなんですか？」

ストライキみたいなんもんだろそれ。

「普通なら当然無しだ。だが先も言ったが、彼女達は指揮力連携力、更に練度が凄まじい。そんなことを言い出しても文句が言えない実績があるのさ。彼女達がもし居なければ日本が滅んでいるかもしれないくらいにはなる。」

「成る程、そんなに優秀ならクビにするには惜しいと思うのもわかる。」

「そこまで凄い奴らなら、別に提督居なくてもいいんじゃないですか？」

「そして出来ればこの話は無かったことに。艦娘の提督になるのは契約だから仕方ないが、元帥の引き継ぎは重すぎると思うの。」

「それがそうもいかん。妖精さん曰く『提督』が居ないと徐々に弱体化していくらしい」

私が直接聞いた訳じゃないがな、と言いながら大将は苦笑した。

「どうやら艦娘は戦う以外も色々人間離れしているらしい。」

「んじやあ普通に優秀な提督を当てれば……、いやそれは普通試しますよね。その上で何か問題でもあったんですか？」

「ああ。当時の海軍には新たに提督に出来る人材は4人居た」

少なっ。

「その中の一人が任命されたんだが……資料を見ればわかる通り、艦娘も見た目は年若い美少女だろう？ 提督の権限を利用して無理矢理襲おうとしたらしい」

何やってんだそいつ馬鹿なのか……。

「うわあ……。でも襲おうとした、つてことは未然に防げたんですよね？」

「その通りだ。愚かな提督は襲おうとした瞬間の映像データと共に定期便で簀巻き状態で送り返された。そいつは今や牢屋の中だ。これがまず一人目」

初犯なのに映像データまで残されるつて、艦娘優秀すぎない？

「……まず一人目、つてことはまさか……」

「ご想像の通り、4人中3人が外れだったよ。同じ軍人として情けないがな。ああ、全員が全員艦娘に襲いかかった訳じゃないぞ？ 2人目は艦娘を使って日本を滅茶苦茶にしようとしていたらしいし、3人目は軍を力で操ろうとしていた。どちらもあの艦娘達が素直に言うことを聞かぬなら不可能じゃない。まあ、両方艦娘によつて事前に察知され、阻止されたがな」

艦娘が優秀すぎて怖い。

「4人目は？」

「ああ、4人目は別に悪いことはしていない。ただ艦娘の提示する艦隊指揮の作戦が完璧すぎて、自信を無くしてしまつてな。自分はこの艦隊の提督に相応しくないとつて辞退してしまつた。今は艦隊指揮の猛勉強中だとさ」

本来自分の仕事である艦隊指揮を、艦娘が自分より完璧にこなしてしまつたら、自信も無くすか。

「短期間で何度も提督を入れ替えさせられた艦娘側も良い加減うんざりしたのか、大本営側に要望を出した。これこれこういう人が提督だと望ましい、つてな」

まあ、流石にそうなるよな。襲われかけた艦娘からしたらトラウマもんだらうし。

「その要望つてのが、『艦娘に手を出すような人間じゃない』『艦娘のやり方に口を出さない』『艦娘を他者に利用させない』。この三つを守れる人間を要求してきた訳だ。大本営側も流石にクズを3人も送り出した手前文句が言えなくてな。後は軍側から『野心がないこと』という条件を追加して、提督探しが始まった訳だ」

軍を操ろうとしていた提督が怖かったんですねわかります。

「はあ、成る程……。で、それがなんで俺が提督になるなんて話に繋がってるんです?」

「簡単だ。妖精が見える人間は居ても、さつき上げた4つの項目を満たせる人間がいなかったのさ。特に野心が無いの部分」

「まあ自分で努力して軍人になったなら当然出世欲くらいはあるでしょうしね」

「そういうことだ。その点、君には野心などないだろう? 給料については私が保証する約束だし、そもそも面倒なことは嫌いな質なはずだ」

確かに嫌いだ。嫌いすぎて働きたく無いほどに。

「いやほら、俺も男ですから、何か間違いを起こしてしまうかもしれないよ?」

いやしないけど。無駄だとわかってはいるが抵抗せずにはいられない。しかし俺の抵抗は一刀両断された。

「それは無いな」

「何故断言?!」

いやほんとなんで!?

余りにズバツと言うものだから思わず大声を出してしまった俺に  
対し大将は致命の一撃を打ち込んだ。

「何故も何も君はヘタレだろう」

「ぐっ……」

「なんだったら仮に彼女が出来ても3カ月は手を出せなさそうだ」

「ぐはっ……モウヤメテクダサイ」

俺、轟沈である。

## 提督になる時4

心へのダイレクトアタックをした大将は、俺が回復するのを特に待つことなく話を続ける。

「話を戻すが、まあつまり君は艦娘と軍の望む条件を全て満たしてしまったわけだ」

なんてことだ。

まあ確かに？ 艦隊指揮とか分からないから任せていいなら艦娘にお任せするし、出世にも興味が無いから野心とか皆無だし、ヘタ……げふん紳士だから艦娘には絶対に手を出さないだろうけども。紳士だから！

と、そういやもう一個要望あったな。

「えーと艦娘を他者に利用させないってのがよくわからないんですが」

「その項目に関しては艦娘もあくまで可能性を考慮しての追加だろうな。だが実際、表面上はいい顔をしながら悪意を持って近づいてくる他所の提督がいるかもしれん。それを口八丁手八丁で追い返してくればいいんだ。弟に聞いたぞ？ ぼっちは悪意に敏感らしいな」

あー、先輩とそんな話をした覚えあるわー、超あるわー。

先輩にドヤ顔でぼっち論を語ったあの時の俺をぶん殴りてえ。

しかも表面上はいい顔しながら近づいてくるってのが簡単に想像出来るあたりがすごく嫌だ。具体的には文化祭の時奉仕部に来た相模みたいな（あいつは誰が見ても悪意を隠せていなかったが）。

「まあそうですね。視線や悪意に気づけないと、後で取り返しのつかないことになるのがぼっちですし。とはいえ追い返せと言われても、俺にできることは少ないですから、何するか分かりませんよ」

土下座とか？ だが手段がそれしか無いなら俺はやる。

「君のやり方については話を聞いたぞ。君をスカウトした後、君について少し調べたからな」

スカウトした後ってことは、本当に突発的スカウトだったんだな……。

って話を聞いたって誰にだ。

「えつと、誰に聞いたんでしよう？」

親？ いやそれは無いか。

「君の卒業した総武高校の、確か平塚さんといったかな。その人に聞いたよ。色々、な」

平塚先生えええ!!!

よりにも寄ってあの人か！

全部知ってる人じゃねえか！ 赤裸々だよ！

「君は随分と手段を選ばないらしいな。まあ、それも何かを守る為だと、平塚さんは言っていたがな」

「……誰かの為じゃなく、いつだって自分の為ですよ」

いつだって俺は出来ることをしただけだ。やらなかったことで後悔したくないから。そう思い大将を睨もうと思つたら。

「おお……」

なぜか凄い感心した表情を浮かべていた。

「あの、どうしたんでしようか？」

上官に向かって生意気なことを言ったわけだから怒られると思つたのだが。

「ああいやすまん。平塚さんの予想がドンピシャだったものでな。私がか先のような事を言えば、捻くれた答えで返してくるだろうと言つていたのだ。いやはや、よく見ている先生だ」

平塚先生、俺のこと話しすぎです……。

こうなつては俺ももう赤面するしか無かつた。

「まあともあれ、君のその目で艦娘を悪意から守ってやってくれ。手札が足りんのなら私を頼つても良い。その為の強欲な壺にくらいはなつてやれるさ」

唐突にネタぶつ混んできた!?

「あ、ああ、はい。よろしくお願いします……」

なんでここまでしてくれるのか分からないのが凄い怖い。悪意は無いみたいだから良いけど。

「む？ 通じなかつたか……」

通じました！ 通じましたが上官の唐突な遊○王ネタに困惑しているだけです。さつきまでのちよつとシリアスな空気を返して！

いきなりこの手のネタ差し込んでくるとか、この人平塚先生と相性良いんじゃない？ まさかな。

そんなことを考えていたら大将は話は終わったとばかりに立ち上がる。

「まあいい、では行くか」

「はっ？ 行くってどこにでしょう？」

色々あるだろう手続きとかしに行くのかね？

「君のこれからの職場だ」

「えっ、今からですか？」

応接間を出る大将を追いながら問う。

「ああ。といつても私が行くのは途中までだが」

「いや、どこに行くか知らないですが色々と手続きとかあるんじゃない？」

「終わっている」

「えっ」

「最初の方に言ったはずだぞ？ 私の権限で『ねじ込んだ』と」

あーはいはい、言っていましたねそんなことを確かに。成る程ねー。

……………完全に事後承諾じゃねえか！

「さつきまでのやり取りは何だったんだ…………」

そう独り言を呟く。

主に俺の健気な抵抗とか無駄じゃん。

「ま、最後の面接といったところかな。良かったな、合格だよ」

そう言ってニツと笑う大将。う、嬉しくねえ……………！

……………はあ。

ま、仕方がないか。給料良いしな。この面倒な性格だ、艦娘と仲良くなれるとは思っていないが、最低限の接触でなんとか…………。

「あ、そうそう、艦娘と仲良くなれとは言わないがせめて嫌われないように。あそこで嫌われたら針の筵だぞ」

悪意を追い返すよりも高難度な指示が後から追加された件につい

て。畜生、だから働きたくなかったんだ！

「あの、俺の職場つてどこにあるんですか？　というか今どこに向かつて……」

「もう着くぞ」

そう言われ、大将が連れてきた所を見渡す。

そこは海軍兵学校の裏手にある小港で、その中でも殆ど使う者の居ないエリアだった。そして狭い停船場には一隻の小型クルーザーが停めてあり、その側にセーラー服を着て茶髪をアップに束ねた髪型の小柄な少女が一人立って居た。

その少女に対し大将が手を上げ、言う。

「電、待機ご苦勞。で、こいつが新しい提督だ」

大将に目線で挨拶しろと言われたので挨拶する。挨拶必要？　必要ですか……。

「ど、どうも。比企谷八幡です……」

やっぱり吃っちゃったよ。

「そして比企谷君、この子こそが前元帥の育てた艦娘の一人、電だ」  
「暁型駆逐艦四番艦、電です。どうか、よろしくお願いいたします」

戸塚のようなオーラを感じた。



## 提督になる時5

戸塚並みの天使オーラを受け、不覚にも固まってしまった。俺とした事が。

この娘が電という駆逐艦の艦娘らしいが、本当に兵器なのだろうか。人間にしか見えないし、むしろ戸塚のような、『ザ・人畜無害!』な雰囲気を感じてひしひしと感じる。あれ、むしろ戸塚が艦娘だった? いやいや戸塚は男だから違うか。……男だったよな? ……女の子の様な気がしてきた。やっぱり艦娘? いや男だってば(以下ループ)。頭の中でしょうもないことをグルグルと考えていたら、再び電が口を開いた。

「あの、新しい司令官さん、寝不足ですか? 目がすごいことになってるのです。お体は大事にしなきゃだめですよ?」

ぐはっ……。

何だこれ純粋な優しさが目に染みる!

なんだったら浄化してる気さえする。え、してない? ……そう。

「あ、ああ、この目はデフォルトだから、気にしないでくれ」

俺がそう言っていると電はわたわたと慌てた。

「そ、そうなのですか!?! はわわ、ごめんなさいなのです!」

許す。超許す。だって天使だもん。

「挨拶はもういいかな?」

「あっはい」

大将のことを忘れていた(迅速)。

「うむ、色々と心の準備は有ると思うが、このクルーザーに乗った瞬間から、君は正式に提督となる。階級は少佐。だが特例で提督になって貰った為、暫く昇格は無いと思ってくれ」

まあそれは仕方ないな。そもそも給料は大将が用意しているし、昇格とかして目立ちたくもないしな。そんなことよりもだ。

「なんか先程からはぐらかされてますが、結局俺はどこに向かうんです?」

これに尽きる。クルーザーということは少なくとも本土じゃないだろうが、一体どこに送られるというのか。大島？

「安心したまえ、あの艦娘達がいる限り、そこは世界一安全な場所だよ」

「はあ、そりや結構なことだ。……いやそうじゃなくてすね？」

勿論安全なのは嬉しいが、いい加減こう、ズバっと地名を教えて欲しい。

「場所は説明しにくい。元は太平洋のど真ん中の無人島だからな」

「……………は？」

……この人は、今なんと？

「片道普通の船なら7日掛かるが、艦娘に曳航して貰うからもう少し速く着くか。まあそんな所だから、正式な名称は未だない。みんな艦娘鎮守府とか呼んでるしな！」

そう言つてハツハツハと笑う大将。うわ笑い方先輩とそっくりだなー。

そんな現実逃避していたらいつの間にかクルーザーに乗っていた。あれ!?

どうやら呆然とした一瞬を突いて乗せられたらしい。上官の指示に体が勝手に動いたとも言おう。

「ちよつ、待つて下さい！ 聞いてないですよ!?! まさか年単位で帰れないとか言うんじゃないでしょうね!?!」

マグロ漁船みたいに!!

「安心しろ、最低3カ月に一回は報告に帰つてきて貰う」

思いの外多かった。

「や、ほらー！ 俺クルーザー運転出来ませんし!」

「さつきも言ったが電が曳航していくから君は中に居るだけでいい。ああ、食料はクルーザーに積んであるから心配はいらないぞ!」

心配ごとがズレてんだよなあ! ワザとか!?! ワザとなのか!?

……そういやこの人大将だった。ワザとだわこれ。

つまり、余計な心配をせずにさつきと行けということか。わかつてますよ。

「その他鎮守府に着いてからの注意事項はさつき渡した資料の後半に粗方書いてある、熟読するといい。電、準備はいいかね？」

「いつでもいけるのですー！」

声の出どころを見れば、電はクルーザーの前の海面に『両足で立って』おり、腕には砲塔、背中には機関部を背負っていた。いつ出したあれが艀装というやつだろうか。クルーザーの先頭からは太いワイヤーが伸びており、それを電が掴んでいた（あれで引っ張る気か）。

俺は貰った資料をちらりと見て、溜息をついた。もう覚悟を決めよう。結構帰って来れるみたいだし。

「……比企谷八幡、了解しました!!」

「うむ。頑張りたまえ！」

そう言った大将の気風の良い笑顔はどこぞの結婚出来ない先生と被って見えた。

「あ、最後に一つ」

俺は脳内でズツコケた。今いい感じに出発しそうだったじゃん！

「なんすか」

だから返事が雑になってしまった俺は悪くない。

「その資料に書いてある艦娘の情報は、一般的な艦娘を基準とした物でな、君の行く鎮守府では役に立たないと思ってくれ」

悲報、『艦娘について』の艦娘のページが役立たずになった模様。いや深海棲艦の情報とかあるけどさあ……。もうこれ艦娘についてじゃないじゃん。

「わかりました……」

「うむ。では電、出発してくれ。比企谷君、いや比企谷少佐を頼んだ！」

「お任せ下さいなのです！ 出発なのです！」

クルーザーが動き出す（すげえ）。俺が大将に敬礼をすると、大将も答礼で返してくれた。

そうして、俺を乗せたクルーザーは電に曳航されつつ本土を離れたのだった。

☒

クルーザーの上から双眼鏡で遠くを見渡すーちなみにこの双眼鏡はクルーザーの中にあつたものだーと、当然の様に360度海しか無いことが確認できる。

別に周囲の警戒のために見ているわけではない。  
やる事が無いのだ。

電がクルーザーを引いている時は位置関係的に会話しにくい為、必然的に会話が出来るのは船を止めて周囲を警戒している夜だけになる。そうなるとう然、頑張つて引つ張っている電には申し訳ないが朝昼は暇になる。そして今は本土を出発して3日目、いよいよ退屈も極まってきたとこだ。

ゴロゴロ。

ダラダラ。

クルーザー内に戻り簡易ベッドで限界までだらける。気分は太公望か双葉杏か川村ヒデオか。

こんな生活も悪く無い。幸い俺は船酔いとは無縁な身体だったし。そんな怠惰状態でいたら正午頃、急にクルーザーの動きが止まる。何事かと思ひ船の甲板に出る。

「どうしたー!? 何か有つたのか!？」

船の先頭ギリギリまで出ても電とはやや距離がある為、柄じゃないが声を張り上げ訊ねる。電も報告があるのかクルーザーに寄つてきた。

「1時の方向に敵艦なのです! 構成は軽巡ト級1隻のみで、ソナーにも反応が無いので潜水艦も居ないようです。はぐれなのです」

じよ、情報集めが早過ぎる……。言われた通り1時の方向を双眼鏡で見ると、確かに黒い異形の存在が確認出来た。資料で見た時に感じた大きさよりふた回りは大きく感じる。正直言つて怖い。

「このまま進むと鉢合わせしてしまうのです。敵は一体だけなので、ここで動かなければやり過ぎさせるかもしれないのです。司令官さん、どうしますか?」

まあ戦わなくて済むのならそうしたい。だが。

「いや、やり過ぎたい気持ちには山々だが、どうやらそうも行かなさそうだ。向こうもこっちに気付いたぞ」

双眼鏡の向こうで、軽巡ト級は明らかにこちらに気付き、俺たちの方向に向かつてきていた。今は射程外だが、直ぐにでも砲撃が開始されるだろう。

「ッ！ 戦闘に入るので！ 司令官さんはクルーザーの中に！ 並みの戦艦よりも頑丈に作ったらしいのです！」

マジかよこれそんな凄いのか。

だが戻る前に聞く事がある。

「お前一人で倒せるのか？ 正直言って強そうには見えない。無理そうなら、俺を置いて……」

逃げていい、と言おうとしたら電は急に笑い出した。

「ふふふつ。司令官さんを置いて逃げるなんて出来ないのです。……大丈夫です。これでも結構強いのですよ？」

そう冗談めかして言うその目には自信があつた。慢心や油断ではない、見ているだけで安心出来るような確固たる自信が。となると、俺の心配はむしろ失礼に当たる。

「そう、か。……よく知らないで変なこと言つて悪かつたな。まあ、その、なんだ。………頑張れ」

俺が慣れないセリフを途切れ途切れに言えば。

電は少し驚いた顔をした後、こちらが赤面する程の良い笑顔を見せて、言った。

「電の本気を、見るのです！」

戦闘は一瞬だった。

敵艦が行動を行う前に電が先制して砲撃を行なった訳だが、その砲撃は吸い込まれるように敵艦の魚雷発射管に命中し、誘爆を起こした。大ダメージを受けた軽巡ト級は、そのまま海底へと沈んでいった。電は「まぐれなのです」と言っていたが、はてさて。

敵を退けたことで俺たちは再び進行を開始し、その翌日の朝、目的

地である島に到着した。……大將は船で7日とか言っていた筈だが  
4日で着いてしまった。

クルーザーの速度計が70ノットとか叩き出しているのはバグ  
じゃ無かったらしい。

## 提督になる時6

さて、鎮守府の港でクルーザーを降りた俺を、一人の艦娘が迎えてくれた。陸に上がって艦装を解除した電もそれに気付いた様で、嬉しそうに駆け寄っていく。

「あ、能代さん！ ただいま帰投したのです！」

「電、お帰りなさい。この方が新しい提督ね？」

能代と呼ばれた少女がこちらを見る。

「はじめまして、阿賀野型軽巡の能代です！」

そう言っただけでお辞儀をする能代。

ああそんなことしたら溪谷が強調されるでしょうが！ 何故なら彼女の服装がヤバイ。セーラー服をノースリーブにして胸当てを外した様な外觀をしており、その上とても立派な物を持っていらっしやる為視線が万乳引力により引き寄せられそうになるのだ。頑張れ俺の理性。対由比ヶ浜で鍛えたチラ見力を今こそ活用する時だ！ つて見ちゃうのかよ。

「お、おう。比企谷八幡だ。階級は、えー少佐だ。よろしく頼む」

しどろもどろになりながらも何とか名乗り返す。視線は能代の顔に固定する。少しでも外すと下に落ちていくので俺も必死である。

「はい！ よろしくお願いします！ では早速ですが鎮守府に御案内しますね。あ、電は補給に行ってきたから食堂に来てね」

「了解なのです。司令官さん、またあとでお会いしましょう」  
「おう」

電を見送ってから能代の後ろをついて歩く。草木生い茂る自然の中簡易にコンクリートで舗装された道を歩いて行くと、程なくして島に不釣り合いな真新しい建物が見えてきた。

「あれが私達の、そして提督がこれから過ごすことになる鎮守府です！ 取り敢えず中の案内は後にして、皆を集めるので自己紹介をお願いします！」

え、マジで？

嘘だよなと想いながら能代を見るが、彼女はニコツと笑うだけだった。どうやら彼女にぼっち特有の苦悩は分からないようだ。当然すぎた。

鎮守府の食堂に連れてこられた。なんでも全員集まれる広さがあるのはここしか無いそうだ。

俺をここまで案内してくれた能代が館内放送で全員を呼び出す。

それから数分後。食堂に続々と艦娘がやってくる。色んな奴がいるが、海兵繋がりかセーラー服の奴は特に多いな。勿論電もいた。あと能代は割とまともな格好だった。何せそれ紐見えてるよとか、スカート履けよとか、お腹冷えるよとか、それもう水着じゃんとか。突っ込みどころが満載な奴が続々現れたのだ。

そうしてやって来た艦娘は、誰が特に何か言うでもなく整列している。彼女らに共通するのは、皆俺にいい意味も悪い意味も含めて興味津々といった視線を送ってくるよとか。

ああ、まずい。何故人を集めるかってそれは俺を紹介する為しかないわけで、つまり俺は多人数相手に自己紹介をしなきゃならない。ヤバイ。もう緊張してきた。こればかりはぼっちの性である。注目されたくないのだ（手遅れ）。

ある程度集まったからだろうか。能代が再び側に寄って来て、言う。

「今来られる艦娘は全員集まったみたいですよ。提督、こちらで挨拶をお願いします！」

ついにこの時が来てしまったか。ご丁寧に小さなお立ち台みたいな場所があり、そこに乗せられた。

少し位置の高くなった視線で見渡せば、ざつと5、60人は居るだろうか。多いのか少ないのか判断は付かないが。

仕方ない、さっさと終わらせよう。

「あー、こほん。ヒキッ」↑声が裏返った。

「ブッフオwww」

おい今笑ったピンクのツインテ顔覚えたからな。



「ん」んっ！ 比企谷八幡、少佐だ。今日からここの提督になる。よろしく」

よし、成し遂げたぜ。大怪我したけどな！ 俺がよろしくとか言うなんて成長しただろ？ だろ？

「ええっと、それだけですか？」

だが能代的に不十分だったらしい。

え、自己紹介ってこうじゃないの？

「おう」

「そ、そうですか……。こ、困ったわね。流石にもう少し自分のこと話してくれないと皆を集めた意味が……」

なんか能代がめっちゃ困った顔してる。ホント申し訳ない。ぼっちに語ることは極めて少ないんだ。

「あー、じゃあ質問いいか？」

「ん？」

俺が目を向けると手を上げていたのは、眼帯をつけ、セーラー服の上から黒いマントを羽織った艦娘だ。顔は美少女よりはイケメンと言いたくなる程凛々しい。塞がれていない片目からは俺に対する警戒心が見て取れる。3人クズを送られた後だから慎重になるのも当然か。……とところでこいつ見てるとなんか右手が疼くんだけど。くっ、鎮まれ……！

「重雷装巡洋艦、球磨型の木曾だ」

木曾はそう名乗ってから、質問を口にする。

「お前はどんな人間だ？」

「ぼっちだ」

あ、しまった。思ったことをついそのままポロっと言ってしまったが、絶対そういうことが聞きたいんじゃないよねこれ。お互いの間を気まづい空気が流れる。

「そ、そうか。なんか、悪いな」

ああほら、警戒心強めの視線だったのにもう可哀想なものを見る目になっちゃったよ。逆に辛いわ。

「いや、こっちこそ悪い。……つってもどういう人間かはお前ら自身

で勝手に判断して貰うしかないな。俺が説明しても嘘かもしれないだろ？ 自分はこういう人間です、って言う奴に限って言ったことと真逆の奴だったりするもんだ。就活の自己PRとか嘘ばっかだろ。俺就活してないけど」

尚判断出来るほど接触するとは言っていない。

「いや、そんなことは無いと思うが……。まあ変なやつだって事は分かった。質問は以上だ」

ふう、やつと終わー

「私は嫌よ！ こんなのが司令官なんて」  
って無かった。

俺を鋭い視線で睨みつけてくるのは、灰色の髪を青緑のリボンでサイドテールに纏めた吊りスカート？ の艦娘。

「おーそうか。お前は？」

軽く流す様な対応をしたからか更に鋭い目付きになった。

「駆逐艦、霞よ。あんたみたいに若い人間にマトモな艦隊指揮が出来るわけないじゃない！ グズはさっさと荷物まとめて帰りなさい！ 遊びじゃないのよ！」

おうおう、随分な言い様である。雪ノ下程じゃないがな。むしろ優しさを感じるまでである。しかしこいつの発言で一つ分かったことがある。

「あーすまん、なんか齟齬があるな。俺は艦隊指揮するつもり無いぞ」  
「「ええっ!?!」」

霞だけでなく他の艦娘まで驚いていた。

「なんで驚いてんだよ……。そもそも艦娘側が要求したんじゃないやねえか」

俺がそう言うのと、能代が更に驚いた様に声を上げる。

「ええっ!?! あの要求を満たした方だったんですか!?!」

「え、何？ ダメ元だったの？」

まるで要求が通ったこと自体意外だったかの様な反応である。

「それはそうですよ！ あくまで私達は艦娘で、兵器なんですから。考案した大和さんも大本営が聞き入れてくれるかは五分五分だと

「言っていましたし！」

「ほーん」

まあ艦娘の立場で考えてみれば、そう考えるのも分からなくはない、か？

「というか大和居んのここ。俺でも知ってる戦艦だぞ。」

「まあいいや。そういう訳で、俺は艦隊指揮とか全く分からないから、口出しはしない。お前らで勝手にやってくれ。雑用くらいならやらんでもない」

「高い給料貰ってるしな。ここじゃ殆ど使い道無いけど。」

「そう、じゃそれは理解したわ。でもあんた個人が信用出来ない」

「まあそうだろうな。霞がそういうのも理解できるし警戒心が高いのは良いことである。しかしどうしたもんか……。」

「……あ、そうだ。」

「俺が選ばれたのはお前らの要求を全部満たしていたのもあるが、妖精に好かれやすいのも理由の一つらしいな」

「選ばれたのは八幡でしたっけ。(目が)濁ってるし。あ、濁りじゃなくて腐りなのでダメですかそうですか。」

「あんたが妖精に好かれてるとは思えないんだけど……。」

「んじや証拠見せるわ」

訝しげな霞を尻目に俺は人差し指を立て、顔の前に掲げる。そして少しテンション高めに言う。

「妖精さん、集まれー！」

「……………」

「……………」

「……あれ？」

「ブハッwwwwあの目でっwwwwあの目で妖精さっwwww集まっwwwwゲホッゲホッ」

「笑い死にしているピンクのツインテは絶対許さない。」

しかし、よく考えたらこれ皆見てる。黒歴史確定じゃん死のう、とそう思った瞬間。

「ザワツと。」

俺の上半身が大量の妖精さんで埋め尽くされた。いや指に来いよ。  
「なっ」

これは霞の声。

「司令官さん、凄いです！」

おお、これは天使電の声だ！

「す、凄い。これなら提督の素質充分ですね」

これは能代か。艦隊指揮しないけどな。

「ここまで妖精に好かれてちゃ、流石に悪人つてことはないか。妖精は本質を見抜くからな」

この声は木曾だっけ？ てか妖精さん凄いな。

っといつ迄も声だけで判断してられん。俺は顔に引っ付いている妖精を引き剥がしっつ、霞に言う。

「とりあえずこんなもんだ。まあいきなり信用しろとか言わない。むしろ俺が無理だ。他人不信だからな。だがまあ、こんなでも判断の切っ掛けになればいいとは思う」

艦娘にとつて妖精さんは特別な存在らしいし。

「……分かったわ。あなたを司令官と認めます。その代わり雑用だけなんて許さない。きっちり仕事して貰うわよ！ 別に艦隊指揮以外にも仕事はたくさんあるんだから！」

ええー。

「言っとくけど、サボったら承知しないから」

霞から放たれる威圧感が一段階上がった。怖い。あと怖い。

「わ、わーっただわーっただ。……んで、質問は終わりか？」

俺がそう聞くと能代が答える。

「そうですね、ではそろそろいい時間なのでこのくらいにしておきましようか」

そう言うとき他の艦娘からブーイング。

「まだまだ聞きたいことあるっばい！」

「青葉ももつと色々聞きたいですねえ」

わいわいガヤガヤと。堰を切ったように騒ぎ出す艦娘。それを能代が手を叩いて静める。

「はい、残りの質問は秘書艦になってから聞いて下さい！」

「秘書艦？」

なんだそれ。

「あっはい、秘書艦は提督のお仕事をサポートする艦娘のことです！  
皆が仕事を覚えるようにうちでは日替わりで、今日は能代でした」  
なるほどね、だから能代が仕切ってたのか。

「では提督、この後は鎮守府内部をご案内します！」

「おう、頼む」

「はい！ あ、因みに明日の秘書艦は漣ですよ！」

誰だよ。まあ適当にやろう。

次の日メチャクチャ仕返しした。

## 厳しい秘書艦とクズ

提督になった時の事を走馬灯の様に思い出していた。いや走馬灯は言い過ぎか。

だがそれも仕方ないと思う。

なんせ俺は今死にそうなのだから。

「ねえクズ司令官、なんでこんなに遅れたの？ いつもあれ程口すっぱくしてサボるな、って言うてるわよね？ そもそも朝の会議には出てたじゃない、なんで遅れるのかわからないんだけど。ねえ？」

霞の背中から憤怒のオーラが見える様だ。

執務室に入った瞬間から土下座をしているが効果はない。じやあと顔を上げたら太ももを踏みつけられた。はい正座ですね。艤装も付けていないし靴を脱いでくれているのは温情なんだろうが、しかしそのせいで逆にいかがわしさが増している。パンツ見えそうですよ。

そう、(社会的に) 死にそうなのである。

この場面を誰かに見られたらやばい。

俺はロリコンじゃねえぞ！

「で、なんで遅れたの？」

「会議のあと、朝食を食べてました」

「へえ」

霞の声の温度が下がる。

「会議が終わったの、何時だっけ？」

「……8時半です」

「そうね。クズ司令官の業務開始時間は？」

「……9時半です」

「ふうん……」

また温度が下がる。空調何やってんの！

「で、……今何時だっけ？」

もはや霞の顔が怖くて見ていられない。

「じゆ、10時です」

俺がそう言うと、霞の堪忍袋の緒が切れた。

「ど、う、やつ、たらそんなに時間かけてご飯が食べられるのかしらねえ……!」

グリグリグリグリ。

霞の足が正座した太ももを踏み躪る。床板に膝と脛が押し付けられる痛い痛い。

ひとしきり踏んだ後、霞はため息をついた。

「はあ、八つ当たりしても仕事は減らないわね。もう正座はいいから、さっさと仕事するわよ。遅刻の罰としてクズの仕事量倍で」

霞から恐ろしいオーラが霧散する。でも仕事倍かよ……あ、何でもないです。

この時、俺たちにミスがあるとするならば。俺が部屋に入った瞬間土下座したせいで扉が開きっぱなしだったことと、霞が俺の太ももから足を退かすのが3秒遅かったことだろう。

コンコンコン

「司令官、遠征の報告を届けに……っ!」

扉が開いている為中を覗き込んだ朝潮が絶句した。彼女の位置からは、霞が正座した俺の下半身を足で責めている様に見えるのか。何かを察した様な、それでいてどこか悲しそうな表情を浮かべ、

「お、お取り込み中の様ですね、また後で伺います。失礼しました」  
パタンと。

扉を閉じた。

数秒開けて我に帰った霞が慌てて追いかける。

「あああ、朝潮姉さん!! ちよつと待ってももの凄い誤解してるでしょ!」

「大丈夫です。霞と司令官がどんな趣味を持っていても、朝潮は2人を見捨てませんから」

「そう言う割に目が死んでる!! だから違うってばあ!!」

大慌ての霞とか初めて見たわ。

因みに俺はと言えば、ゆつくりと立ち上がり、仕事の準備を進めていた。

ま、そのうち戻ってくるだろ。朝潮には後でそれとなく弁明しておくか。

程なくして、霞が戻ってきた。

「や、やっと誤解が解けた……あれ解けたのかしら……？　っていうかなんでクズは手伝ってくれなかったのよー！」

いつものことだからスルーしてるけど、司令官は付けよう。クズでもせめて司令官は付けよう。

「俺と一緒にいくと余計ややこしくなるだけだ。2人で弁明したら必死過ぎて逆に怪しまれかねん」

「それは、そうかもしれないけど」

「俺からも後でフォローしとくから、仕事するぞ」

「このまま仕事倍化も有耶無耶にしてしまおう！」

「ホント頼むわよ。……ん？　なんか忘れてるような」

「そ、そんなことないんじゃないか？」

「そうかしら……まあいいか。んじや、今日のぶんの仕事ね」

ドンと俺の机に置かれたのは何時もの4倍はあろうかという紙の束。

「あの、霞さん？」

倍って、2倍じゃないんですかね……。

「何か？」

「うわぁ超笑顔、超怖い。」

「何でもないです頑張りますー！」

逆らったら死ぬ。

「最初からそう言いなさい」

そうして、漸く業務が開始されるのであった。

カツカツカツカツと、紙の上をペンが滑る音が響く。

分かってはいたが、量が多い。

遠征記録に資材管理、開発報告に艦娘の体調管理に定期便の発注依頼、つとそうだ。娯楽品頼まなきやな、約束だし。取り敢えず各寮にイカゲーでも導入しておく。あとは本か。取り敢えず色んな需要に



応えられるように色々頼んどこう。SAO、とある、ロードス島戦記、封神演義、文スト、ジヨジヨ、俺物語、ハチクロ、のだめ。少女漫画はよく知らんが小町がよく読んでた奴なら外れは無い。あと真面目勢用に、文学も。……こんだけ用意すりやどっか好みに刺さるだろう。うん。足りなかつたら今度足そう、もうパツと思いつかん。

後はいつも定期便で頼んでる物を追加してと。

「ふう、こんなもんか」

「何が」

疑問符付けよう怖いから。

「定期便の発注依頼書だ」

「ん、見せて」

紙を渡す。

「は？　なんか色々書いてあるけど何これ」

は？　っておつかねえな。だが今回はちゃんとした理由があるから問題無いだろう。以前大量にマツカンを仕入れようとしたら怒られた。当然だった。

「おう、今日食堂で58が言ってたんだが、ここ娯楽が無いだろ？　休日にする事がないってボヤかれてな。これは58だけの問題じゃなさそうだし、ストレス溜まつてる艦娘とかのためにも娯楽品頼んで息抜きして貰おうと思った次第だ」

「ふうん、ゴーヤさんがね……。休日とか訓練してたからそういうことは気づかなかったわ」

「いや休めよ」

なんなの？　艦娘って動いてなきや死んじやうの？　あ、いやそれはないか。望月みたいなのもいるし。

「ま、そういう理由があるなら良いわ。でも本とか1部じゃ足りないでしょ、3部ずつ頼んどきなさい」

ああ、確かに人数多いとそうする必要があるか。ぼっちだからその発想はなかった。

「分かった」

そしてお互い再び無言になり、ペンを動かし始め……

「あ」

られなかった。

「な、なんだ、何があった？」

「いえ、クズは関係ないわ。ちよつと駆逐寮に行ってくる。2時間くらいで戻るから、あたしの仕事はそのまま置いて」

「2時間って昼過ぎちゃうぞ。お前昼飯どうすんの」

「適当に済ますわ。クズもお昼は食べなさいよね。あ、でもまたサボったら許さないから」

「流石に今日はもうサボらねえよ。なんにせよ了解」

俺がそう言うと、毎日サボるなクズ！ と言い残して去って行った。何があったのやら。俺は霞の置いて行った仕事軽く見やる。俺より少ないが、それでも結構量があるようだった。

さて、俺は業務に戻りますかね……。

## 提督の業務は色々あるよー的なアレ

書類仕事に戻って一時間半程。

俺は一向に減らない紙束に辟易しつつ、そろそろ昼飯かなと思いい旦のキリをつけるべく奮闘していた。

因みに大和曰く、俺の書類処理速度はなかなか早いらしい。理由を考えたが、間違いなく高校の頃一色の仕事を手伝わされまくったおかげである。絶対に感謝などしないが。

飯、飯、マツカン、マツカン、と念じながらハイスピードで作業をしていると、執務室の扉がノックされた。

誰だ……？ やけに丁寧なノックだった。

よし居留守使おう。大丈夫緊急だったらノックも無しに開ける艦娘ばつかだから。

ガチャリ。

「あ、なんだ。やっぱり居るんじゃない。提督」

別に緊急じゃなくても開ける艦娘ばつかだしな……。

こいつはRoma。イタリア生まれの戦艦だそう。この鎮守府に来て驚いたのは、日本以外の軍艦も多くいたことだ。『艦娘について』に載っていたのは日本の艦娘だけだったし。

「あ、いやほら仕事に集中して気づかなかったわ」

「ふーん。提督がそんなに仕事好きだったなんて、知らなかったわ」「ぐぬ」

表情を殆ど変えずにしれっと毒を混ぜてくるしぶりんみたいな艦娘である。え？ しぶりんを知らないって？ モグリかよ。

「ええと、なんだっけ、そう。なんの用だ？」

「演習をしたいから許可と、提督の随伴をお願いしにきたわ」

「お前らまだ強くなる気かよ……」

演習。通常は他鎮守府と合同で行うのが基本である。しかしこの艦娘鎮守府はそれに当て嵌まらない。何故か？ 相手になる鎮守府が存在しないからである。最悪相手艦娘の心をへし折りかねない。

なのでウチでは演習相手を募らず、鎮守府内でチームを分けて演習

を行っている。そしてアホみたいに強い艦娘同士で鎬を削り合い、更に強くなつていくのだ。インフレしすぎだぞ！

「私は後からここに来たから、まだそこまで強くないわ。先に来ていた姉さんに追いつく為にも、もつと強くならなきゃ」

「いやお前でも充分強いからな」

深海棲艦の艦載機を機銃で的確に撃ち落としながら砲撃で敵の顔面ストライクが出来る様になったのにまだ足りないのか。

「で、どうなの？ 来るの？ 来ないの？」

「行くよ。優先度はそつちのが高いし」

大将曰く、艦娘の強さが確認できる時はしつかり確認しておいて欲しいらしい。いやもう正直見てわかる領域じゃないんだが。

「そ、ならいいの。じゃあついて来て」

「あ、ちよつと待て。書き置き残しておくわ」

霞が戻って来た時に俺が居なくてサボリ扱いされると困るからな。執務室の隅に置かれていたホワイトボードを引っ張りだし、『比企谷演習付き添い』と書き残した。

R o m a に連れられて発着場に着く頃にはもう既に複数の艦娘が集まっていた。

鎮守府の裏手には艦娘の為に用意された発着場があり、そこで艀装を展開し沖に出れば演習場だ。最も俺が海に出てもしようがないので、発着場から双眼鏡などで様子を見ることになる。

「あー！ 提督さん遅いっばい！ 早く演習したいっばい!!」

見れば錚々たるメンバーである。

今声をかけて来た夕立を筆頭に、練度が高い奴が数多く集まっていた。

夕立、曙、島風、大井、木曾、足柄、龍驤、瑞鶴、加賀、I t a l i a、そして r o m a。  
うん。

何、これから世界でも滅ぼすの？

そんなアホな事を考えていると、後ろから気の抜けた声が聞こえて

きた。

「あー、遅くなりましたあー、望月でえーす」

そう言いながらも焦ることなく普通に歩いてやって来た。謝罪意欲0である。

「というか、なんでこいつここに居るの？」

「え、お前演習すんの？」

望月。飄々とした態度であり、遅刻サボりの常習犯。面倒なことは大嫌い。そこ、俺と一緒に言わない！

「するわけないじゃーん。今日は司令官の横でF作業しながら流れ弾の処理係だよお」

そして艦娘鎮守府においての最古参の1人であり、同時に『最も強い駆逐艦』である。

「ああ、今回は望月が流れ弾係か。つってもあいつら流れ弾とか寄越したと無いけどなあ」

俺に流れ弾が来たらマズイので一応用意される流れ弾係だが、あいつらは戦闘しながら遠方であるここに気を配れるのだ。

「まあねえ。でも万が一ってやつがあるからね。みんなも気をつけてねえ、ここで砲撃撃ったら魚逃げちゃうからー」

って気にする所そこかよ。呆れを通り越して清々しい。艦娘達も苦笑いである。

そんな中、元気に突っかかってくる艦娘がいた。そう、ぼのたんである。

「クソ提督！ ちゃんと見てなさいよ？ 私たちが何が得意で何が苦手なのか、そういうのも提督は把握してなきやならないんだから！」

曙は真面目だなー。

「おう。今日は潜水艦居ないから楽勝だろ？」

曙は艦だった頃の記憶もあり潜水艦が苦手なのである。とは言え、一般的な艦娘と比べるべくもないが。

「えっ!? ふ、ふん、勿論よ!!」

まあ本当に楽勝かはチーム分け次第だろうがな。

「チーム分けはどうする？ 人数で半々に分けるか？」

まさにその事を考えていた時に木曾が俺に質問してきた。答えたのは望月だった。

「んーとお、曙、夕立、木曾、加賀でチームA、それ以外でチームBね」とんでもない編成を言いやがる。

ほら、曙がえっ?! て顔してるぞ。

「4対7かよ。いやでもメンバー見る限り、実力は拮抗してるのかわれ。加賀と木曾も古参組だし」

俺がそう言うも望月が否定する。

「んーん、流石にチームBの方がちよつと有利だよ。でもまあ、勝負にはなるんじゃないかなあ」

それでもちよつとしか差が無いらしい。

やはり最古参達の強さは特におかしいようだ。そしてそんな艦娘達を目標に頑張るものだから周りの艦娘もメキメキ強くなるという。レベルの上限どこに落として来たんですか？

チームBを見れば『お前らは7隻がかりで4隻を相手にしろ』と言われたにも関わらず、怒ったりせず、むしろやる気に燃えている。特に瑞鶴。

「今日こそ一航戦をぶっ潰す!!」

瑞鶴ちゃん、言葉遣いが悪いわよ。

「……やってみなさい、五航戦」

加賀さん、目が怖いわよ。

あの2人は放っておこう。パツと見たら仲が良い様には見えないし演習でもガチで潰し合うが、実戦だと屈指の連携力を持つ2人だったりする。喧嘩する程仲が良いとはこの2人の為にあるような言葉だろう。ぼつちには眩しいね、全く。

「提督、お昼はもう食べたかしら。カツサンド食べる？」

そう言つて側に来たのは足柄だ。近い近い。見るとその腕にはバスケツトを抱えている。中にカツサンドが詰まっているのだろう。

「め、飯はまだだが、俺は養われても施しは受けないと決めている」

「そう？ じゃあ勝利のゲンを担ぐのに協力してくれないかしら？」

「いや俺は片方だけ応援する気は無いんだが」

「いいのいいの、こういうのは気持ちが大変なんだから！」

むしろ両方応援しなさい、と言ってカツサンドを渡してくる足柄。むう、俺の捻くれを鮮やかに躲すとは、これが大人の余裕って奴か。俺も大人の筈なんだがなあ。なお艦娘の年齢について深く考えると頭がおかしくなつて死ぬ。

「あ、あたしもカツサンド食べたい。足柄あ、くれー」

カツサンドを受け取ると、横で俺と足柄のやり取りを見ていた望月がねだる。

「勿論みんなの分持つて来たわ！ はい、望月！」

望月は受け取った直後にかぶりついた。

「うあー、うめー」

望月さん自由すぎませんかね。

「じゃあ他のみんなにも配つてくるわね！」

これ食べて勝つわよー！ と艦娘達の中に戻っていく足柄。なんとなく見送っている。今度は大井と木曾が寄つて来た。あ、いや大井はそこまで近寄つてこないわ。良いことだ。

逆に木曾は凄く近い、つて肩組んで来た!? マジで近い近い柔らかい良い匂い！

馴れ馴れしい！ この娘凄く馴れ馴れしい！ 男みたいな気安さの癖に凄く良いモノ持つてる自覚が無いのが困る！ 困りすぎる！

「あによ木曾さん？ ちちち近くないですかね」

引き剥がそうと抵抗するも全く上手くいかない。あれ、肩を組むつてのは何かの技だったっけ？

「なんだあ？ 遠慮するな、俺とお前の仲じゃないか」

どんな仲だよ！

「お、俺はお前とそこまで仲良くなった覚えは無いぞ」

「ははっ、釣れないねえ！ ま、直接的にはそうかもな。だが少なくとも俺はお前のことをそれなりに認めているぞ。お前は分かりにくい艦娘のことをよく見ている。じやなきや駆逐艦からは慕われねえよ」

慕われてんのかねえ？ 俺踏まれて来たばっかなんだけど。あと

離せ。柔らかいってば。

俺が無駄な抵抗を続けていると、大井が話しかけて来た。

「そんなことより提督、北上さんはいつ来るのかしら」

来ねえよ。つてかうちに北上居ねえよ。

そう言おうと思ったが大井の目を見たらストレートに告げる勇氣なんか吹き飛んだ。これがハイライトの無い目って奴か……。

「ええと、うちには北上さんは居ないです、はい」

「知ってます。だから早く建造しなさい」

あ、そこは知ってたか、良かった。幻覚見えてたらどうしようかと。  
「け、建造は今許可が下りてなくてな？」

一応建造システムはうちの鎮守府にもあるらしいが使ったことは無い。

「そもそもなんで建造するのは妖精さんなのに大本営の許可がいるのよ全く……。許可が降り次第すぐお願いしますね!!」

「お、おう」

建造許可がなかなか下りないのはお前らが強すぎるからだけだな。

「なんか、姉さんが悪いな……」

あまりの必死さに木曾もドン引きだった。

「司令官、観戦の準備せんでええんかー？」

そう龍驤に言われて思いだす。すっかり忘れてたわ。

「おー、忘れてた。すぐ取って来るわ」

「あ、司令官釣り竿もよろしくー」

俺は小走りである所に向かう。と言っても発着場の側にある物置だからすぐ着くが。つてか望月しれつと人をパシリやがった。

物置の中は広くない。中には望月が言っていた釣り竿と、そして演習を観戦するのに必須となつているカメラ付きドローンと、その映像をリアルタイムで写すためのモニタが複数置いてある。俺は釣り竿とドローン、それからモニタを持ってから足早に戻った。

望月に釣り竿を渡すと彼女はいそいそと釣りの準備を始めた。やる気満々つすね。



俺もドローンとモニタのセッティングをさつと終わらせ、これでいよいよ準備が整った。

「提督、早く始めようよー、おっそーい！」

「ん、悪いな。すぐ始めていいぞ」

俺は声の方を見ないようにしながら謝る。島風の服装は目に毒だ。おい飛び跳ねるな、スカート捲れてるから！

鉄の意志で視線を逸らした先にはRomaとItaliaが居た。合流したあと居なくなっただと思っただら姉妹で会話していたようだ。

「姉さん、今日の演習は共闘のようね」

「ええ、楽しみね！一緒に頑張りましょう！」

平和な会話で何よりである。

それから程なくして、発着場の海上に皆艤装を付けてチームごとに向かい合うように立つ。

Aチーム

木曾改二

夕立改二

曙改

加賀改

Bチーム

大井改二

Italia

Roma改

足柄改二

島風改

龍驤改二

瑞鶴改二甲

うーん、こうして見るとAチームいじめにしか見えないが、実際はそこまで両チームに差が無いってのが恐ろしい。特に木曾と加賀は競馬で言うなら6馬身くらい突き抜けてるからな。何それブツチギリ。どう動くか楽しみだ。

「じゃあこれより演習を開始する」

「さあ、ステキなパーティー、始めましょう?」

その言葉を合図に、双方とも初期位置に向かう。

しかしいいところ持ってたなあ夕立。いや良いけど。

## 作戦会議と、魚雷

カツサンドを齧りながらドローンを飛ばし、両チームの準備が完了しているか確認しに行く。

まずはAチーム。木曾を旗艦とした4隻はそれぞれの艦の速度差がほぼ無いからか、特に問題無く指定地点に到着していた。

対してBチーム。こちらは指定地点までの距離がややある為、少し遅れそう。まあ島風は先に着いていたが。いっちはーん、とか言ってるんだろうな。

今俺が操作しているドローンだが、カメラ操作は妖精さん頼みだったりする。本体に妖精さんが乗っており移動は俺、カメラは妖精さんという具合だ。まあ戦闘が始まって両チームが見える位置まで来たら丁度中間くらいを陣取る様動かすだけになるけど。

程なくしてBチームも全員到着。こちらには戦艦、重巡などあまり速度の出ない艦娘もいる為、チーム全体で動く時の速度はそれ程でもない（まあ例によつて一般的艦娘よりは圧倒的に速いが）。

そして気付く。無線機を忘れた。あいつらの声が聞こえないからどう作戦立ててんのかわかんねーわ。取り敢えず最初はAチームから観戦するべく、再びAチームに向けてドローンを移動させる。

さて映像はこれで良いとして音声どうするかと考えていると、釣りポイントを探していた望月に声を掛けられた。

「しれーかーん、ちよつとこっちい」

望月はすでに釣りポイントを見つけたのか発着場の淵に座って釣竿を構えており、その体勢でちよいちよいと手を振っている。尚流れ弾に即座に対応する為、艀装装着状態である。

「どした？」

お前が来いやと思わないでもないがそこは望月だから仕方ない。モニタ（片手で持てるくらい的小型サイズだ）とドローンのリモコンを持って望月の近くまで歩み寄る。

「いひひっ、司令官無線機忘れたでしょ。しよーがないからあたしが半分貸してあげるよお」

そう言つてイヤホンを片耳だけ外してこちらにフリフリと向ける望月。

えっ。

それ受け取るのもしかして片耳イヤホンって奴になるんじゃないですかね？

リア充御用達の。

「い、いや遠慮する。別に音声聞こえなくても問題ないし、なにより恥ずかしくすぎるだろ」

噛んじやつたよ。

そんな俺を見て望月はケラケラと笑う。

「うはあ司令官キョドリすぎ。いい加減慣ればあ？ これ終わった後とか大破した娘とか来るんだからさあ」

そ、そうなんだよなあ。

いやマジで気が重い。

もう空しか見られなくなるからな。

「それに聞こえてませんでしたー、とかバレたら曙とか怒るんじゃない？ 知らないけど」

それを言われると辛い。

『はあ？ なんて無線機忘れてんのこのクソ提督！』と言われるのが容易に想像できる。容易過ぎて未来予知と錯覚するレベル。

……だがなあ。

奉仕部での経験から人を不必要に遠ざけることはしなくなったが、だからといって近づくこと近付かれることに慣れたわけじゃ無いんだぞ……。

勿論片耳イヤホンの光景を見て馬鹿にする様な奴は艦娘には居ないから、本土でするような心配はいらないが、……絵面酷くない？

俺だぞ？

と、俺がまごついていると、望月がなにやら妙な表情で唸りだした。

「んー……、あー……、……よし」

それから何か決めたような顔になった望月は俺にすつと近づく。

「なんか面倒だから無理矢理やるねえ」

え、ちよつ待つて。

そう止めるも俺の腰のベルトを片手で掴み、一瞬俺自身を持ち上げてから自分の左隣に座らせた。艤装をつけているからこそ繊細な力加減が光る鮮やかな動き。なおこの動作の時も、釣竿は手放していなかった。

「それからー、ほいつ」

「んぐつ」

そして俺の右耳にイヤホンを突っ込んだ。意外にコードが長く、お互いがピッタリくつつくようなことは無かったが、やはり少々恥ずかしい。

「司令官は色々考えすぎなんだよ。もつと気楽にいこうぜえ？」

いやお前は色々雑すぎるけどね？

「……善処する」

「あ、それやらないやつ」

バレテェラ。流石望月。

幸い望月は外見的に幼いので、横に座つても過剰にドキドキするとは無さそう。俺はシスコンであつてロリコンではないのである。というわけで片耳から聞こえる音声に集中する。

今聞こえてくるのは、……Aチームの音声か。それに合わせモニタの映像もAチームをズームした。妖精さんナイス。

『ー作戦を纏めるぞ。まず砲撃戦の最中に夕立が先行、それを曙が援護しながら相手に近づき、敵を攪乱する。何をしても良い』

この声は木曾だな。作戦ももう纏めに入っている。危なかった、聞き逃すところだった。

『その隙に俺が接近して魚雷。加賀は相手空母の艦載機を抑える。こちらの空母は加賀1人だから大変だと思ふが、なんとか頑張つてくれ』

空母的には加賀vs瑞鶴&龍驤だからな。

『そうね、五航戦の子も最近はやるようになってきたから、鎧袖一触とはいかないかもしれないわね。龍驤もいるし、気を引き締めるわ』

さつきはあんなに睨み合っていたのに何だかんだ認めているんだよな。

『加賀さん、それ本人に言っただけなら良いっばい!』  
『嫌よ』

この即答である。

『……それから相手戦艦や重巡を倒す決定打がこちらには魚雷しかない。だが戦艦を潰せば先がグツと楽になるからな、気張るぞ!』

『ふん、任せなさい!』

『ワクワクしてきたわね! 頑張るっばい!』

『それから言うまでも無いが向こうの姉さん、じゃない雷巡には気をつけるよ。んで他はいつも通りだ! ……それじゃ、行くぞ!』

『『はい! (ぽい!)』』

カメラが引き、進行を開始したAチームを映し出す。

取り敢えず一言。

相変わらず加賀さんは本人の居ないところでデレてんのかと。

さて次はBチームか。この調子だと作戦会議は終わってそうだな。そう考えながらドローンを移動させる。

カメラにBチームが映る頃には案の定進行を開始しており、瑞鶴と龍驤を囲む輪形陣で海上を進んでいた。

『望月』

『んー』

俺が名前を呼ぶと望月は無線のチャンネルをBチームに切り替えた。釣りしながら。

『ー作戦が上手くいってもいなくても、まずは木曾を落とすわよ!』

お、これは足柄だな。声からやる気が伝わってくる。あ、カツサンドあざーす(もぐもぐ)。

そんな足柄の言葉に反応したのは瑞鶴だ。

『ええ、加賀はなんとか私達で抑えるから頑張っ!』

さつきはぶつ潰すとまで言っていたのに随分と弱気な発言、……ではない。彼我の実力差を明確に理解しているだけである。それに口

では抑えると言いつつもその表情は隙あらば倒すという気概に満ちていた。

『うちが軽空母とはいえ、二人掛かりじゃなきや抑えられんって、相変わらず無茶苦茶なやつちやなー加賀は』

樂しげに言う龍驤だが彼女も軽空母ではかなり強い部類だ。

『カガーもキソーも確かに強いけど、戦艦としては、駆逐艦の2人も怖いわ』

そう声を漏らしたのはRomaだ。まあ戦艦はそうだろうな。やたら速くて弾が当たりにくいのに接近してきて魚雷だけ当てて去っていくのがうちの駆逐艦だからな。ニュータイプかよ。

そんなRomaの言葉にItaliaが反応する。

『アケボノーとユウダーチね。接近してきた時に上手く捕まえられれば良いんだけど……』

艦娘鎮守府の駆逐艦に戦艦が取れる策は一つ。相手が接近してきた時にこちらも近づき、掴む。そこまで至近距離になったら魚雷は撃てないし、接近戦で駆逐艦は絶対に戦艦に勝てない。あとは煮るなり焼くなりである。勿論そう簡単にはいかないが。

ところでユウダーチってなんかサウダージみたいだな。

『あんまり気圧わなくていいんですよ。失敗してもフォローしますし。それにItaliaさんやRomaさんは射程が凄く長いのですから、多少距離があっても相手空母を直接狙えるじゃないですか！』

大井が不安がるイタリア組を励ます。

実際Aチームの加賀を落とすことが出来るとすれば、空母組かこのRoma達だ。重巡や雷巡、駆逐艦はまあ、木曾に抑えられるだろう。

『そう……そうね。よし、カガーを落とす気で行くわよ、姉さん』

『そうね！』

大井のフォローもあつてか士気が上がった様だ。

『作戦的に木曾をなんとかしてからでお願いね！』

軽く釘を刺す足柄。

Bチームの作戦は聞きそびれたんだよなあ。

まあ正直、うちの艦娘同士の演習の場合、まず最初の作戦通りにこ

とは運ばないけどな。お互いピーキーすぎて。

『島風の速さ、頼りにしてるわよ!』

今回の作戦は島風が鍵なのかな？

足柄も鼓舞が上手いな。

『につひひ、今日も島風が一番速いところ、見せちゃうんだから!』

ふむ。島風が演習に参加している回は今までも何度か見ているが、凄まじい速さで落とされたり、活躍している時タイミング悪く別の艦を見ていたりして島風がどう戦ってるのが見れたこと無いな。

よし、今回は島風がキーらしいからな。服装はおかしくともしつかり見てやるぞ。『今日もく見せちゃうんだから』というセリフが無線で見ているであろう俺に向けてじゃない事を祈る。今日から見るから許せ。

それから少しして、足柄が声をあげた。

『……来た! 観測機が相手を捉えたわ! 12時の方向、複縦陣!』

『真正面!?! 随分大回りしてきたなあ。予想じゃ9時10時くらいの方からかと思つとつたけど』

『なんでもいいけど早く構えて! 攻撃隊、発艦始め!』

矢筒から矢を束ねて掴み、一気に撃ち放つ瑞鶴。お前はライディーンかと突つ込みたいが、艦娘では常識らしい。解せぬ。

矢は途中で艦載機に変化し飛んで行った。

『おっと、せやったな! 攻撃隊、発進!』

龍驤は指先に勅令と書かれた光を灯し、それを開いた巻物状の甲板に滑らせる。すると式紙が現れ、これもまたすぐに艦載機に変化しつつ飛んで行く。

瑞鶴と龍驤が艦載機を飛ばしたわけだが、機種は見ただけでは分からない。まあ艦攻3割残り艦戦とかかな。

『向こうからも来たよ!!』

島風が叫ぶ。妖精さんがカメラの向きを変えると、確かに加賀が飛ばした艦攻が飛んで来ていた。だが数が少ない。瑞鶴と龍驤の艦戦がある程度は落としたり追い返したりしたのだろう。勿論瑞鶴達の艦載機も減らされているはずだが。



『ごめん！ 全部は引き止められなかった！』

『堪忍な！』

『謝る必要は無いわ！ むしろ大分数が減ってるし大手柄よ！ 皆！  
対空射撃用意！』

謝る空母組をむしろ褒める足柄。そして対空射撃の指示をする。

この時の為の輪形陣と言っても過言ではない。

『ついでに魚雷、撃っておきますね』

機銃を空に向けつつ魚雷を海に投げ込む大井。その数10本。セ  
オリー通り扇状に撃っているが、まあ当たらないだろう。大井として  
も分かった上で牽制用として撃ったようだ。

因みにこの鎮守府において、開幕魚雷を普通に撃つ事は少ない。

魚雷とは、海に撃つてよし放り投げてよし直接ぶつけてよしの万能  
兵器なんだそうだ。

それで良いのか酸素魚雷。

艦娘のやる事は科学的に考えてはいけない。

Bチームが一斉に空に向けて機銃を放つ。その命中精度はここら近海の深海棲艦が制空権を最初から諦める程の物である。

しかしそこは加賀の艦載機、これを躲す躲す。ファンネルみたいな動きしやがる。

艦娘がトンデモなら艦載機もトンデモだな。機銃の弾避けるってなによ。弾道予測線でも見えてんの？

しかし足柄達も避けられて当然と思っているからか動揺は見えない。

『ここまででは予想通り……！ 大井！』

お、作戦の開始か？ 内容は知らんけど。

足柄が大井に指示を飛ばす。見れば彼女は魚雷を1本その手に持っており、

『はいっ！』

それを海には投げず、天高く放り投げた！

魚雷はぐんぐんと飛距離を伸ばし、加賀の艦載機達に迫る。……あ、まさか。

傍観者の俺が気付いた事に当事者の加賀が気付かない筈がない。慌てたように艦載機達はその場を離脱しようとするが、

『遅いっ！』

足柄の機銃が魚雷を捉える方が早かったようだ。

閃光、そして轟音が鳴り響く。

加賀の艦載機を巻き込ませる様に魚雷を爆発させたのだ。

衝撃波に煽られドローンからの映像が激しく揺れる。結構離れてたはずなんだがな。というか空中で爆破するとあんなに範囲広いのかよ魚雷って。まあよく考えるとたった一本で戦艦を真っ二つに出来たりするもんな。

フラついていたドローンをしっかりと配置し直すと、映像には爆煙しか写っていないかった。何も見えねえ。

そして焦らす様にゆつくりと煙が晴れていく。

煙が晴れた時、映像に艦載機らしき影は無い。

お、これはやったか？

『やったの!?!』

瑞鶴、それ言っちゃダメなやつだぞ。

え、俺？ 俺は思っただけで言っていないからセーフ。

『姉さん、どう?』

Romaが姉に尋ねる。

なんか前に聞いたがItaliaは特に目が良いらしい。艦にそういう逸話があるのかと思ったがそれでも無かったので何故かは知らん。

『ううん、ほとんど落とせたけど2、3機撤退していったわね』

マジカー、あのタイミングで避けるのかよ。

あ、でも撤退したつてことは制空権守れたんじゃないか？ 少なくとも一方的な展開にはならなさそうだ。

そしてそれを聞いていた足柄が指示を出す。

『つまり今がチャンス！ 島風、行って良いわよ!』

『やつとしまかぜの出番ですね！ 私の速さ、見せちゃうんだから!』

そう言った直後、周囲の連装砲と共にド派手な水飛沫だけを残して島風が映像から消えた。

消えた？

え、どこいった!?

慌ててドローンをグリグリ操作すると、彼女は既にかかなり遠方まで移動していた。速すぎる。

『島風に続いて私たちも全速前進！ 援護しつつ作戦準備!』

その言葉を合図にBチーム全体の速度が跳ね上がった。

さて、足柄達を見るのは後にして一旦島風を追おう。ドローンの速度で追いつけない為、妖精さんのカメラワーク頼りではあるが。

この妖精謹製ドローン時速200キロ出るんだけどなあ……。

画面に映る島風は最大ズーム状態にもかかわらずどんどん小さくなって行く。や、速い速い。

「なあ、これ速さどんなもん?」

俺は隣に座る奴に聞いてみた。

釣りをしていた望月がモニタを見る。因みに釣果は0だ。

「んあ？ あ、島風だ。うっひゃー速いねえ。で速度？ んー、180ノットくらいかな。時速330キロ前後」

「さっ……!?!」

何じゃそりゃあ。開いた口が塞がらないとはこのことか。あいつ島風じゃなくて暴風じゃねえの？

補足すると艦娘鎮守府における駆逐艦の平均最高速度は110ノット程だ。

速さ自慢は伊達じゃないわけか。

見れば島風は、速過ぎてもはや「航行」してるとは言い難い。波の隆起を使つて海上を水切りの様に跳ねていたり、波の弱い所では膝を上手く使つて衝撃を逃がしたりと、さながらスキーマーのモーグルを見ているようだ。

さて実際の軍艦と艦娘の違いで最も大きな所は、俺は浸水量だと思ふ。つまりサイズだ。大きな軍艦だった頃は当然それなりの体積を水中に沈めなければならず、それにより自分から生まれる波の抵抗が原因で速度には限界があった。

が、艦娘となつた今は違う。艦種にもよるが艦娘は靴底に当たる部分だけが接水しており抵抗なんて殆ど無いに等しい。故に島風は、水の抵抗という柵を捨て去り、極めて暴風的な速力で目標へと向かう。

この速度ならもう間もなく接敵するだろう。

お、噂をすれば。

『曙ちゃんと夕立ちちゃん、見つけ!!』

言いつつ島風は連装砲で先手を打つように砲撃を開始した。

ドドドドドドツ!! という連続した砲撃音が鳴り響き、曙達に砲弾の嵐をお見舞いする。

はいここでうちの艦娘の非常識ポイント。

ー砲撃を連射できる。

機銃じゃないぞ、主砲での砲撃だ。実際の艦なら砲塔のサイズにもよるが装填20秒旋回10秒とかかるあの主砲だ。それをウチの艦

娘達はまるで拳銃のように気軽に撃ちやがるのだ。

移動速度がやたら速いとか、命中精度が凄いとかならまだ練度で済むかもしれないが、連射速度が変わるってどういうことなの。艦装に干渉してないかそれ。流石に戦艦は連射とまではいかないが、それでも敵である深海棲艦よりは圧倒的に速い。流石は殻を破った艦娘か。さてそんな砲撃を放った島風なわけだが、当然のごとく相対する曙達も同じことが出来るわけで。

同じく連射し、迫り来る命中弾を自らの撃った弾で撃ち弾き、それにより島風と曙達の間で激しい火花が飛び散る。

飛んでくる弾を撃ち抜くってお前ら……。

島風は島風で当たらないことは分かりきっていたのか速度を落とすことなく更に2人に近づいて行く。このままだと激突する様な勢いである。

もちろんそんなヘマをやらかす艦娘はウチには居ない。

180ノットという速度の中では最早目前に感じるであろう曙と夕立を視界に納めた島風は、砲弾を撃ち弾き、時に躲しながら、ついに2人の艦娘の間を通過した。

二本の魚雷という置き土産を残して。

『りっ、離脱ー!!!?』

すれ違いざま、島風のマイクが曙と夕立の叫びを一瞬拾う。ドップラー効果付きで。

直後、連装砲が海面に着水した瞬間の魚雷を撃ち抜いた。

ドゴボム!! と少しくぐもった様な爆発音が鳴り響き、敢えて着水させたこと、魚雷が二本であったことが合わかり、想像以上にド派手な水柱が上がった。

因みにこの時、島風は進行方向しか見ていない。本人は違う方向を見ていても正確に射ぬけるのが自立砲塔の長所だな。

さて離脱した曙と夕立がどうなったか気になるところだが、今は島風だ。

爆発に気を取られている隙にかなり遠くまで行ってんだろうなと思っていたが、意外や意外。島風は少し離れた程度の場所で再び戦闘

に入っていた。

相手は勿論、木曾である。

☒ 「……………お、……………きたね、きた来た！ いやいしよつと」

横に座る望月の釣竿に何かヒットしたらしく、力が入っているとは思えない気の抜けるセリフと共に何かを釣り上げた。片手で。

少し離れた所の海面から決して小さくない水柱が上がり、時間差でドサツと、俺たちの背後に何かが叩きつけられる音がした。

恐る恐る後ろを見やると、カジキだった。

いやいやいやそんなほっそい釣竿とほっそい腕でどうやってカジキ釣ったんだよ。そもそも望月の体重じゃこいつの方が海に引きずり込まれるだろ！ ……と思ったがちやっかかり錨を降ろしてやがった。そういえば艀装出しましたね。カジキも片手で釣れる訳だよ。

しかし望月的にも流石に予想外だったようで、

「う、うおー、カジキ釣れちゃったよ。見て見て司令官、カジキだよカジキ！」

そう言つて俺の袖を掴んでブンブン振ってくるのである。見てる、見てるから。普段だからだらしてやるやつがそういうことするとやたら可愛いから止めろ。

「お前これどうすんの…………？」

未だ背後でビチビチしているカジキから目を逸らしつつ訊く。

「そりゃもちろん食べるでしょ。鳳翔さんならきつと捌ける！」

鳳翔さんにかかる期待重すぎない？

などと思っていると望月は糸を引っ張ることでカジキを手繰り寄せ、その口から針を手際よく外した。

マジでカジキの口って尖ってたんだな、これもう武器じゃん。

「うん、カジキ釣ったし今日のF作業終わりでいーや。……………んー、帰って寝たいな」

俺も俺も。

つてそうじゃねえ。

「お前帰ったら誰が流れ弾処理するんだよ……………いや今まで飛んで来た

ことねえけどな？」

距離もあるし、うちの艦娘優秀だし。

「わかってんよー……。つくあー……。ふ」

言ってから欠伸をしつつ艦装に寄りかかるようにダラけ始める望月。視線は海に向けているようだが……。

ところで何故俺がこんなにも悠長に望月と話していられるかと言え、島風と木曾の戦闘が膠着状態に入ったからである。

そう、膠着状態。

島風と木曾の戦闘はまさにそう表現出来る光景だった。

実力では木曾の方が圧倒的に上、それは間違いないはずだ。しかし島風は持ち前の速力を駆使し、

躲す。

躲す。

躲す。

その小さな体を捻り、魚雷をばら撒き、砲弾を絶え間なく撃ち、速度を落とさず、木曾の移動を制限し、その場に押し留めることに心血を注ぐ。それは必ずしも倒すことを目的としていない動きだ。つまり、時間稼ぎ。

その為木曾も木曾で攻めあぐねている。たまにあらぬ方向に砲撃を放ったり不可解な動きをすることがあるため裏がありそうではあるが。無傷だし。

対する島風は、押し留めることには成功しているものの少しダメーヂを受けている様に見える。小破、ないし小破未満といったところだろうか。あの速度で動き回る島風に掠っただけとはいえ命中させているんだから、木曾の命中精度半端ないな。

え？ 音速を超える砲弾を撃ち抜けるんだから180ノットくらいなら当たって当然だつて？ 俺もそう思ってたんだが、『一度撃たれたら軌道の変化しない砲弾』と『砲撃のフラッシュを見てから回避できる艦娘』じゃ後者の方が当たりにくくて当然、だとき。何なのお前らみんなウメハラなの？ 見てから回避余裕なの？ ってあれはデマだっけか。

ともあれ島風は恐らく作戦だったであろう木曾の足止め成功しているため映像に動きが無いのだ。いや動いてはいるけど。

んー、この2人はまだしばらく大きな変化は無さそうだし、曙達の様子を見ようかね。結局あの後どうなったのか気になるし。

俺はドローンを操作し曙達の元に向けて飛ばす。離脱した2人が島風を追わなかったと言うことはBチーム本隊に攻撃を仕掛けに行ったはずだ。

そして辿りつき映し出された映像を見て、俺は非常に困惑することとなった。

夕立、小破。

曙、中破。

足柄、小破。

R o m a、大破。

I t a l i a、中破。

瑞鶴、中破。

龍驤、小破。

やべえ展開進みすぎててコメントできねえ。

俺が望月の釣ったカジキに気を取られている間に一体何があったんだよ……。



うちの艦娘の戦闘力は53万です。

あられもない。皆姿があられもないよ。

ねえちよつと妖精さん？　ズームしすぎですわよ。色々見えちゃうからね？　あと画質良すぎ。ってしつかり見てる俺がいる……。

お、おほん！　しかしあの短時間でここまでお互いにボロボロになるなんて流石に予想していなかった。無傷なのは大井だけじゃないか。

一体何があったんだ。出来ることなら誰か詳しく説明して欲しい。まあそう都合よくはー

「知りたいですかあ？　青葉にお任せ下さいー！」  
んあ!?

「青葉!?　い、いつからそこに……?」

いつの間にか俺の左斜め後ろすぐ側に立っていたのは重巡洋艦、青葉。多くの艦娘と同じくセーラー服ベースの服装だが下は艦娘的に珍しいキュロットである。

「どもー　司令官！　いつからと言われますとついさつきですが、そんなことよりも！　Bチームの動向が分からなくて困っていたでしょう。『何があったんだー』って顔してましたよお？　いやー、凄く読みやすい表情ですね！　目は口ほどに物を言うとは言いますけど、司令官の場合、顔がもう口ですね！」

顔が口!?　何そのサトラレ宣告!?

「初めて言われたわそんなこと！　俺ってポーカーフェイスじゃないのかったのか……?」

かなりショックなんですけど……。

「青葉からしたら司令官がポーカーフェイスとかちやんちやおかしいですが、一般的に見たらそうなんじゃないですかね(適当)。まあこの鎮守府で司令官の顔を一番見ていたと言っても過言ではない青葉だからこそわかるのかもしれない!」

凄くひどいことを言われている気がする。

「ちやんちやおかしいとか言うなよ……。てかお前とはまあまあ顔

合わせるけど、一番って程じゃないだろ。現に久しぶりに会う感じするし」

こうして普通に会話するのは一月ぶりくらいな気がする。

「あつ、あーそうでしたっけ!? そうでしたね! 青葉うっかりです! つととそんなことより!(2回目) BチームですよBチーム!」  
え、『あつ』って何? 超怖いんだけど実はストーカーでもしてたの? な、無いか。ー気付かなかった事にしよう。

「お、おう? そうだな。……で、なんでBチームの様子を青葉が知ってるんだ?」

「ああ、暇だったので観測機を使って観戦してたんですよ!」

また暇人が1人………ごめんね! 娯楽品もう少し待ってね!

「勿論加賀さん達空母には、万が一とぼつちりで落とされても文句を言わないと伝えてあります!」

あー、味方のじゃない艦載機が飛んでたら攻撃されてもおかしくないしな。正直あんな速さで飛び交う艦載機達の敵味方を見分けるとか正気の沙汰じゃない。

「なるほどな。んじや是非戦況を教えてくださいと助かる」

「ええー、タダですかー? どうしよっかなー♪」

うわーイラつとしたわ。なのに結局何だかんだ可愛いんだから艦娘ってのはズルい。

「う、うぜえ……。まあとはいえ早くしないとまた戦局が進んじまうな……。しょうがねえ、間宮券一枚でどうぞだ」

伝家の宝刀間宮券。

画面の中ではすでにドンパチやっているし、いつ戦況がひっくり返ってもおかしくはない。ここはさっさと買収するに限る。

「うーんそれも魅力的ですがあ……あそうだ! 後で写真撮らせて下さいよ写真! ありとあらゆる角度から! 沢山!」

いつもカメラを携える青葉らしい提案ではある。あるが……、

「は? 写真? 誰の……。俺の?」

「はー!」

いやいいお返事だけでも。

「ええ……、そんな需要無いもん撮ってどうすんだよ……？」

「そりゃ勿論売、……じゃなかった、写真を綺麗に撮る練習ですよ、練習！」

なんか不穏な単語が聞こえた気がしたが、俺の写真が売れる訳ないし流石に気のせいだろう。

「ほーん、別に俺である必要性を全く感じないが、まあそんなんでいいなら手伝うわ」

立ってりやいいんだろ。

「あーりがとうございますう！　じゃ交渉成立ということで、戦況をお話します！」

「手短かにな」

「はい！　では曙さんと夕立さんがBチームに近付いた所から！　島風さんの魚雷をギリギリ無傷で回避した2人はそのままBチームへと侵攻しました」

へえ、あの魚雷結構危ない距離だと思ってたが無傷だったのか。すげえな。

「距離が近付きお互いが有効射程範囲に入ったので砲撃戦に。しかしここで曙さんに魚雷が命中しました」

「有効射程範囲に入った瞬間に魚雷？　魚雷の速度的にまだ届かないだろ、……ってまさか」

「はい！　大井さんの魚雷です！　対空射撃をする前に放っていたアレです！」

マジかよ、あの魚雷伏線だったの？

た、たしかに魚雷は遅いからタイミング的にはおかしくないが……。

「いやいやいや幾ら何でもただ直進してくる魚雷にはお前らは当たらないだろ」

砲弾避けちゃうんだから。

「そこは足柄さんとRomaさんが砲撃で進路を塞いだり気を逸らしたりりしつっ動きを誘導していました。その時波が高くて雷跡が見えにくかったのもあるでしょうね。戦艦級の砲撃は駆逐艦には弾き

にくいので回避に専念した方が楽ですから、そこを突かれたというのもあるでしょう」

動きを誘導って簡単に言うけどとんでもない技術だからね？

それと弾きにくい……弾けないとは言っていないのが未恐ろしい。

「魚雷により中破した曙さんでしたが、そうなるっても曙さんは止まりませんでした。むしろ夕立さんと一緒に戦意が倍増したようで、2人の砲撃は激しさを増していましたねえ」

あー、確かに曙は中破程度で戦意喪失するタマじゃないしなあ。むしろよくもやったわね！ となるタイプだ。夕立は夕立で味方がやられてスイッチが入ったか。

「その後の2人の働きはまさに快進撃と言って良いでしょう。動きの機敏さは更に加速し、曙さんがItaliaさんを中破に、夕立さんがRomaさんを中破、足柄さんを小破にしました」

「おお、調子いいな」

駆逐艦が重巡や戦艦を容易く破損させることに今更疑問は湧かない。あいつら機関部の壊れやすい所狙う術を知ってるし、魚雷投げるし。

とかさつきから望月の反応が無いんだが……。そう思って望月をチラツと見れば、

あ、寝てやがる。

そこには機関部を背凭れにしながらスヤスヤと寝息を立てる少女が居た。流れ弾は!? さては青葉が来たから大丈夫とか判断しやがったな!

……まあいい、話終わって青葉がどっか行ったら叩き起こそう。

あ、これは借りておこう。俺は望月の手から無線機本体を引っこ抜いた。

「ところで空母達はどうしたんだ？」

避けに徹しているし、艦載機を操作している風でもないし……。そういうえば空に艦載機が見当たらないな。少し前まではブンブン飛んでたのに。

「おや、いいところに気付きましたね！ 今回の瑞鶴さんと龍驤さん

は青葉的にMVPをあげたいですよ！ なんせほぼ相打ちとはいえ加賀さんの艦載機をついに落とすきつたのですから！」

「マジか!? やるなあ!」

思わず声を上げてしまったが、実際これはかなりの快挙である。加賀の艦載機の熟練度を考えれば、瑞鶴と龍驤だけでは正直劣勢と言わざるをえない。というか加賀が強すぎるのだが……。それを覆し、相打ちとはいえ落とすきつたのだから、青葉の評価も納得というものだ。

しかしなるほど、2人の艦載機はもう残っていないから今は回避に専念してる訳か。

「話を戻しますね？ 夕立さんがRomaさんを中破にした辺りから戦いは接近戦になります。……この頃からBチームに不可解なことが起こり始めました」

青葉は急に声のトーンを落とした。

え、何、ホラーなの？

「不可解なこと？」

「はい。曙さんも夕立さんも狙っていないのに負傷する艦が出始めたのです!」

お、おお、割とガチでホラーっぽいな。

「不可解な現象は龍驤さんを小破、瑞鶴さんを中破に、そしてRomaさんに至っては大破に追いやり、まるでAチームの援護をしているかの様でした……!」

んんん？ あ、なんか読めたぞこれ。

「流石にもうお気づきかと思いますが、そう！ 木曾さんが超長距離砲撃で援護していたのでっす!」

な、なんだってー!?! (予定調和)

しかも島風の相手をしながらである。化け物め(褒め言葉)。

木曾の奴なんか変な方向に砲撃をしてんなと思っただらさういうことだったのか。いやそれで納得出来ねえよ!?! 命中精度おかしいよ!

「ど、どんな腕してんだよ。あいつ確か中距離兵装しか積んでなかつ

たはずだぞ……。ちなみに聞くけど、青葉。お前同じこと出来る？」

俺がそう聞くと、青葉は両腕でバツテンを作り、

「無理ですー！」

と叫んだ。もしアニメなら目もバツテンだろう。ニヤツキかな？

そんな青葉をじっくり観察していると、彼女はハッと顔を赤くし、誤魔化す様に咳払い。

「こほん！ とにかく、木曾さんの援護によりAチーム有利に戦局が進むと思われました！」

「思われました」

つまり状況は変わったわけだな？

「今の戦場を見てください。ここでクイズです。木曾さんの援護砲撃が止んでます、さて何故でしょうか？」

唐突だな。でもまあ真面目に考えてやるとするか。

映像では夕立が攻めきれないからカイヤイラしながらも突破口を探しており、曙は冷静に足柄や空母達をチクチク砲撃している。

足柄はその曙からRomaを庇うように移動しつつ夕立に攻撃を行い、大井は大量の魚雷を水中空中両方にばら撒き煙幕、牽制、攻撃を同時にこなしている様だ。

Romaは大破故に撤退し始めているが無事な砲塔で砲撃はしつかりと行っていた。これを<sup>おこな</sup>見る限り夕立はかなり警戒と対策がされていると気付く。まあ暴走するとおっかないしな、マジで。

龍驤と瑞鶴はもう艦載機がない為攻撃は行えないが、敢えて狙いやすい位置に陣取ることと曙と夕立の砲撃を誘っている。龍驤なんか砲撃を回避しながら公開無線で『あれー？ 無防備な空母も落とせへんの？ ぬー？』とか煽ってるし。集中の阻害が目的だろう。曙を見る、なんてぐぬぬ顔が似合うんだ。

……ん？

「あれ、Italiaどこ行った？ ……いや、そうか」

そう、どこに行ったかなんて一つしかない。

最初Bチームは何と言っていた？

”何がなんでも木曾を落とす”と、そう言っていなかったか。

「司令官、ご明察です。Italiaさんは単騎で島風さんの応援に向かいました！」

「よく曙達に気づかれなかったな」

「気付いていたと思いますよ？ ただ追えなかったのでしょう。Italiaさんに意識を向けられないように足柄さん、大井さん、Romaさんが頑張っていましたから！」

Romaもか。大破ながら働くなあ。

「なるほどな。んじゃちよつと木曾方面にカメラ移動させるか」

言いつつドローンを操作する。とはいえ移動しながら戦うのが船である。もうそこまで距離は開いていない。数分で追いつく距離だ。

「Bチームは青葉が見てるのでご心配なく」

「おお、オフなのに悪いな」

こんな俺の仕事の手伝いみたいなもんじゃん。

「いえいえ、皆のことは見るのは趣味みたいなものですから！」

こいつは仲間が大好きなんだな……（ピュアっピュアな感想）。

さてItaliaと木曾、島風はどうなったかね……。

——ふむ。

Italiaは変わらず中破、島風も中破、木曾も中破……いやギリギリ小破か？ それから木曾の後方、かなり距離はあるが加賀の存在も確認できた。ぶつちやけると被害状況とか見ただけじゃ大体しか分からないんだよなあ。あんまりジロジロ見るのも悪いし。色々はだけてるからね！

島風とか、なんだアレ。全裸とは言わんがもう七分の五裸くらいじゃん。

「しかし思った以上に島風粘ったなこれ」

島風がやったのか、はたまた応援に入ったItaliaがやったのかは分からないが木曾をほぼ中破に出来たのはBチームにとつてかなりのプラスだろう。

「そうですね！ 木曾さん相手にここまで粘るとは、青葉も予想外です！ いやー今日の演習は見どころが多いですねえ」

本当にな。いつもはもう少しごぎつぱりした演習になるんだがな。

お互いが閾値を超えた強さがあるから、戦局が傾くと一気に勝負が付くんだよ。あ、演習の勝利条件は過半数を大破させることな。って誰に言ってるんだろうか。

「あつ、夕立さんの砲撃で大井さんが中破、返しの魚雷で曙さんが大破しました！」

お、ここまで無傷だった大井が中破か。だが曙を大破させたことで夕立が孤立したことになるな。音声では『あーもう！ 曙、離脱します！』と悔しがっている様子が聞こえてくる。ちなみに公開音声である。

つとこつちでも動きが。島風の投げた魚雷をItaliaが撃ち抜いたのだ。木曾と島風の間地点で大爆発が起こる。

更にそれを目くらましに島風が最高速で離脱した。はつや。木曾は島風を追おうとするが、煙幕が濃くて断念。Italiaに目を向けた。

そこからはもう凄まじいの一言だった。

木曾とItaliaの一騎打ち。

一对一の場合先に集中力を切らした方の負けである。

木曾が撃つ。

Italiaが弾く。

Italiaが撃つ。

木曾が避ける。

撃つ。避ける。撃つ。弾く。

撃つ。撃つ。撃つ！

嘘みたいだろ？ これ曲芸じゃなくて戦闘なんだぜ。

撃つって単語一つに砲弾何発も飛んでるからね？

しかし、木曾は見た目通りの戦闘好きだな。めっちゃ楽しそうじゃねえか。超好戦的な笑顔だよ。

Italiaは逆に極めて冷静で、基本に忠実（※艦娘鎮守府の基本です）を体現している感じだ。

……多分。

いやこの辺になってくると高速戦闘すぎて俺の目が追いつかない



んだよ！

「お、夕立さんが今、1人になりながらも大井さんを大破させました！  
足柄さんからも狙われているのに凄いですねえ！」

流石夕立、逆境にやたら強いな。まあ木曾が”戦闘好き”なら夕立はまさしく”戦闘狂”だからなあ。ぽいぽい言ってる普段からは想像もつかんが……。

ええっと、大破はこれでAチームが曙、Bチームが大井とRomaか。どっちも勝利まで後2隻だが、そろそろ勝負がつきそうだな。

因みに大破した艦娘は慎重に後退しつつ戦線を離脱する。離脱中の砲撃は可能ならば行って良い。また、無事な他の味方艦は離脱の援護を極力行うのがうちの演習のルールだ。実際の戦闘で負傷艦を守る癖をつけるためだな。まあ曙の撤退時とかは近くに夕立しか居なかったから援護出来なかったっぽいが、夕立自身も狙われていたし、今回はAチーム4人しか居ないから仕方ないわな。逆にRomaの撤退時は足柄がカバーしていたはずだ。

画面を見ると、木曾とItaliaが戦っているより後方で爆発が発生したのが見てとれた。

「島風は加賀の所に行っていたのか……!」

そう、爆発の正体は島風の魚雷。

彼女はItaliaとの連携で離脱した後、加賀を倒しに向かっていたのだ。

ドローンを島風対加賀と、Italia対木曾の中間辺りに移動させ、どちらも見られる様にする。両方気になるじゃん？

島風は中破にも関わらず機動力に衰えは見えない。ただ砲撃よりも魚雷メインで戦っているあたり砲塔の多くが木曾に壊されてしまっているのだろう。

対する加賀は投げつけられた魚雷を空中で掴んで投げ返したり、海中から迫る魚雷に当てて直撃を避けたりと、なかなか危険な対処をしている。ただ無傷とはいかないらしく、加賀は小破となっていた。

「これはさすがに加賀が不利か……?」

艦載機も無いのもあるが、島風が魚雷を主とした攻撃方法なのが大

きい。砲撃メインなら避けちゃうだろうし。

「いやーどうでしょう。加賀さんの目はまだ諦めてはいないようですよ?」

青葉の視線の先、俺の持つモニタに映る加賀の目を見る。確かにまだ何かありそうな目をしているが、実際問題何も出来ることが無いしなあ……。

「ーあつ、夕立さんが足柄さんに大破させられました!」

青葉の報告と同時に『うー悔しいっばい!!』との音声が聞こえてきた。いや充分頑張りすぎだからね? Bチームの半分くらい夕立の攻撃による被害だから。マジソロモン。

「お、Bチームリーチだな。どうなることやら」

Italia 対木曾の方にカメラを向ける。

その瞬間、木曾の”斬撃”が袈裟斬りに命中し、Italiaは大破となった。集中力が切れたように『はふうー、やられてしまいました。離脱します』と言ってからItaliaは撤退を開始した。それを見てから木曾はすぐさま加賀の加勢に向かう。

が、俺はそれどころじゃなかった。

「……今、俺の目がおかしくなければ木曾の奴軍刀でトドメ刺さなかった?」

「そのようですねえ」

青葉はのんびりと返答する。

あの砲撃の嵐の中あそこまで接近したのも凄いが……。

「あの軍刀ってちゃんと武器として使えたんだ……」

そこが気になって仕方がない俺だった。いつも下げてるけど飾りだと思ってたわ。

「あ、そこですか」

その後の勝負は流石にすぐ決まった。

加賀を狙う島風だったが、横合いから至近に砲撃を受け、木曾に意識が向いた瞬間加賀に蹴り飛ばされ、『おうっ!?!』とバランスを崩した所を木曾に再び撃ち抜かれ大破となった。

いや加賀さん、いくら武器が無いからとはいえ蹴りつて……。

最後の最後で最強の二人に挟撃された島風が不憫でならない。俺はお前が頑張ったの（今日は）見てたからな！

Aチーム

加賀、小破。

木曾、中破。

曙、大破。

夕立、大破。

Bチーム

足柄、中破。

大井、大破。

Roma、大破。

Italia、大破。

瑞鶴、中破。

龍驤、小破。

島風、大破。

Bチームの過半数が大破したので、Aチームの勝利である。

こうやってアホみたいになつていくんだな（達観）

望月の無線機を使い演習終了を告げると、艦娘達が戻ってきた。

艦装を解除して陸に上がった艦娘達。

わかつてはいたが死屍累々である。

見ちゃいけないと思いつつ目に入ってきてしまう、肌色。

……俺は空を仰ぎ見る。いやあいい天気だなあ。

「いやいや、どこ見てんだよこっち見ろよ」

俺が必死に見ないようにしていると呆れた様な表情をした木曾が声をかけてくる。

「自分の格好見てから言ってくれませんかねえ……」

お前中破してるからね？ 色々見えてるんだよ！

セーラー服は胸元破れて形のいい胸部装甲が見え隠れしているしスカートは縦にバツクリ裂けてるし！

「ん？ おう！ 島風とItaliaにはしてやられたからなあ！」

味方が強くなって嬉しそうですねえ。

違うんだ。お前随分やられたなーハハハって言いたいワケじゃないんだ！

「そうじゃねえよ隠せてんだ。恥じらいとかどこいった。曙を見ろ」

そう言つて俺が視線を向ければ、

「こっこんこっこんちみ見んなクソ提督!!」

ニワトリ？ 良ーい反応が帰ってきた。

因みに曙は大破しているため木曾よりもボロボロである。つまりほぼ下着姿。早いところ反省会終わらせて入渠させてやらねば。

てちよ、ワカメ投げんな。

「ーと、あれが正しい反応だ」

「いやあれもあれでどうなんだ……？」

言いながら俺の肩に引っかけたワカメを取ってくれる。良い人

か。

取りつつ木曾は言葉を続ける。

「まあ露骨にジロジロ見られたら流石にオレでも少し恥ずかしいがな、ザツと見て損傷チェックする為なら怒らないぞ?」

というかい加減慣れる、と苦笑しながら言われてしまった。

さつき望月にも言われたばかりである。

「んぐ、努力はしてるんだがな」

本音を言えば俺だって男だし見たくないと言ったら嘘になる。だが彼女達は真剣に戦って負傷した結果こうなっている訳で。だからこそ邪な気持ちで見ってしまうことは失礼だとわかっているし、申し訳ない気持ちにさえなる。じゃあそもそもそういう気持ちで見れないんじゃないかと思うかもしれないが……そう簡単なら苦労はしない。目の前でポヨンポヨンしてたら目が追ってしまるのが悲しい男の性である。その後全力で逸らすが。

「はーい、そんなじゃ反省会するよおー」

詮無いことを考えていたら、いつの間にか起きたのか望月が仕切っていた。起きたとは言っても座ったままだが。

「おお、起きたのか。……あれ、そういえばカジキは?」

気付けばあの巨体がいつの間にかやら消えていた。誰かが運んだのか?

「え、司令官気付いてなかったの? ほつとくと傷んじやうからだいぶ前に妖精さん達に運んでもらったよお。青葉が来る直前くらいかな」

マジで? カジキを運ぶ妖精さんを想像するとちよつとシユールなんだけど。重ちーを運ぶハーヴェストみたいな感じかね?

「青葉が来た時はすでに何も有りませんでしたねえ。というかカジキ釣ったんですか!?!」

俺と望月の会話を聞いていた青葉が驚いた声を上げる。ああ、やっぱり艦娘でもカジキを釣るのは凄いのね。まあいくら臂力があっても技術は別物だしなあ。

「いえすカジキイ。今頃鳳翔さんが今日の夕飯の一品に加えてるは

ず」

などと言いつつサムズアップする望月。

「望月さんの釣りがF作業の域を超え始めていますねえ……」

それは確かに。釣りというよりもはや漁と言いたくなってくる。いや、厳密な区分は知らないよ？

「まあカジキはいいよ、反省会反省会。みんな今日はどうだったー？」  
反省会といっても、後で旗艦に報告書を書いてもらう決まりなので、これはほぼ雑談みたいなものである（気楽）。

今は全員が見やすく横並びになったところで望月が呼びかけたのだ。俺や望月、青葉から見て左から木曾、曙、夕立、加賀、龍驤、瑞鶴、島風、Roma、Italia、足柄、大井の順で並んでいる。

もちろん大破してる奴らの服装が果てしなくやばいので俺の目は泳ぎまくっている。泳ぎすぎてちょー気持ちいいとか言いそう。つてダメだ、この場でちょー気持ちいいはマズい。何も言えねえにしとこう。

俺が目をバツシャバシャ泳がせていると木曾から今回の演習の反省、というか感想を言い始めた。

「んじゃオレから。案外超距離砲撃も当たるもんだな！次からは実戦で使えそうだ。それから島風とItaliaは強くなったな！」

そんな砲撃普通は出来ないからな。ましてやウチの艦娘に当てるとか……。マジどうやって当ててるんだよ。後やっぱり後進が育つて嬉しそう。

んで次は曙だ。

「悔しいけど……今回わたしはあまり役に立ってない。……次は生き残ってみせるからー！」

曙はそう言っただけで悔しそうにしている。確かに撃破数のような明確な戦果で見ればあまり活躍は無いように見えるが……。

「そうか？ 撃破こそしていないが夕立とのコンビネーションはかなりの物だったかな」

「です。曙さんの援護能力はかなり高水準だと思いますよ？」

俺や青葉がそう言うのと曙はまるで変なものを見たような目で俺を

見てきた。いや、俺がフォローするのがそんなにおかしいかよ？  
……おかしいね。

「提督達の言う通りっぽい！ 曙ちゃんのおかげで夕立は好き放題出来たっぽい！ 逆に曙ちゃんが居なかったら夕立はすぐにやられてたかも。曙ちゃん、ありがとうっぽい!!」

どこまでも真っ直ぐな夕立の感謝。それに狼狽える曙。

「ううえっ!? そ、そんなの知らないし！ 何か勘違いしてない？ あんたが自分で頑張っただけじゃないの!?!」

曙ちゃん、若干ツン失敗してますよ、それ。

そんな曙に対し夕立はもはや言葉はいらぬと抱きついた。ゆるゆるゆるゆる。大破してさえなければじっくり見たものをつ……! 夕立って結構大きいんですね。

こほん。

さ、さあて次は、と隣を見る。

「で、加賀よ、お前小破じゃなかったか？ なんで中破になってんの？」

そう、明らかに被害が大きくなっているのだ。演習終了直前までは服が軽く裂けている程度だったが、今や黒い胸当ては何処かへと消え去り、スカートもだいたい千切れて無くなっていた。

「予想外ね」

「いや予想外じゃなくて」

「今回、生まれて初めて艦載機を全て落とされたわ」

「いやったー!!」

唐突に語り出す加賀。そして視界の端で瑞鶴と龍驤がハイタッチ。生まれて初めてって、それはそれで凄いな。今まで敵なしだったってことだぞそれ。加賀も結構古参のはずだが。

「その状態で島風との戦闘、さすがに気分が高揚しました」

なんでだよ。DMか。

「……そ、それで?」

「攻撃手段を考えて、咄嗟に蹴りを採用したのだけど……」  
「けど……っ?」

「やっぱり船底で攻撃するのはダメだったみたいです」

「ですよええ！」

船底ってかなり重要部位だもんな！ こいつ真面目な顔して実は結構アホなんじゃないか。

「うっはは、加賀って割とアグレッシブだよなー」

望月が苦笑する程か。というかアグレッシブで済むのか。

「それで沈んだら笑い話にもならねえしなあ、もうやんなよ？」

瑞鶴とか絶対泣くぞ。

「心配をお掛けして申し訳ありません。ですが提督」

「ん？」

「初めて攻撃手段を失って気付かされました。私は近接に対処する方法を身につける必要があると。なのでむしろ、膝や肘など艤装のない部位で戦う訓練をする許可をください。それなら損傷しないはずなので」

近接に対処する空母って何さ……。そう思うも加賀の目は真剣そのもの。この技術はいつか必ず役に立つと確信している目だ。こういう強さへの貪欲さが今の加賀を作っているのかねえ。因みに肘や膝で攻撃すれば良いというのは、俺にも心当たりがある。いつだったか川内が駆逐イ級を膝蹴りで撃破したという報告を貰ったことを思い出す。その時の川内は特に損傷していなかった筈。

「……まあ演習ってそういう自分の弱点を見つけることも目的の一つだしなあ。実戦で慌てるよりは良かったと言えるか……。わかった。その訓練で少しでも沈む確率が下がるなら良い。つか、俺の許可なんかいらんだろ。名ばかり提督なんだし」

俺がそう言くと、加賀は何故か薄く微笑み、

「少なくとも、私にとって提督は提督だと思っていますから」

「なんだよそれ……」

その表情を見ているとなぜか気恥ずかくなり、目を合わせずらくなったので視線をスライドさせた。少数だとは思うが評価が妙に高い艦娘がいるのは何なのか。木曾にも同じようなこと言われたし。

「司令官、照れてますねえ？」



「うるさいよ」

青葉がニヤニヤしながら聞いてくるのが非常に鬱陶しい。つていうか望月や木曾もニヤニヤしてる。止めろオ！俺をそんな目で見るな！

「次、はい次龍驤、はよー！」

話を逸らすべく次を急かす。

まあすぐそこに居るのだが。

「はいはい、目の前におるで照れー官」

こ、こいつごみいちゃんみたいな造語を……。

「うちは瑞鶴と一緒にでええやろ。大体同じことしとったし」

龍驤の言葉に瑞鶴が続ける。

「そうね。見てただろうし大体わかってると思うけど、加賀の艦載機を二人で全部落としてやったわ！まあ相打ちだからその後何も出来なくなっただけど……」

そう言っただけ口を尖らせる瑞鶴に龍驤も苦笑する。

「せやなー、しゃーないから曙煽って遊んどったわ」

「あれ遊びだったの!？」

驚愕の事実就叫ぶ曙。遊びだったのかよ……。まあ深海棲艦に言葉で煽っても効かなそうではあるし、そりゃそうか。

「やめてやれよ……」

そう俺が（一応）苦言を呈すも、

「いやーでもええ表情するんよ！うちSのつもりは無いんやけどなあ」

悪びれない龍驤。

そこで曙を見る。ぐぬぬ顔である。

「わかる」

「わかるなクソ提督！」

ワカメが飛んできた。しまった、うっかり本音が。もう少し龍驤を注意するつもりだったのに。

「ま、まあ程々にな。はい次島風」

ワカメが無くなった為攻撃手段が手や髪の水飛沫になり始めた曙

をスルーしつつ（濡れる濡れる）、五分の四裸ガール島風に訊ねる。島風はこちらにずいといと近寄る。いかん見える見える！

「はい！ 島風頑張りましたよ！」

「おう、（今回は）観てたぞ。一人でよく頑張ったな」

もし島風が木曾を真つ先に抑えていかなかったらどうなるか。

木曾を抑えず曙と夕立の相手をしていたとしよう。そうすると二人を相手にしている隙を突かれて木曾に落とされる。その後曙と夕立は木曾のバックアップをもらいながら悠々とBチームに攻め入り余裕を持ってAチームを壊滅させていただろう。それほど木曾の存在はでかい。ただ島風的には戦果よりも速さを重視してほしいらしい。

「えへへー、今日も速かったでしょ？」

褒められてはにかむ島風は褒め言葉のおかわりをこそ所望のようだ。まあ180ノットとか実際速すぎるし素直に褒める。

「速かった速かった。いやマジで速かった。すごいすごい」

「やったあー！」

「司令官適當すぎひんか……」

龍驤から呆れた様に突っ込まれるが知らーん。喜んでるからいいんだよ。

「んで次はRomaか。どうだった？」

「今回駆逐艦達がほとんど近寄って来なかったから凄く戦い辛かったわ。一番最初に大破してしまっただし……」

表情にはあまり出ないが明らかに意気消沈しているRoma。まさにしよんぼりと言った様子である。

確かRomaが大破した理由は木曾の狙撃だったか。

「いやあれは仕方ないだろ、他の艦の相手してる最中に狙撃なんて避けられるかよ」

俺がフォローすると同じく狙撃を受けた瑞鶴も、

「そうよ。回避に専念してた私や龍驤も当たっちゃうのよ？ 意識の隙を突く砲撃っていうか……。あれは来るって分かってないと避けられないでしょ」

と慰める。

実際狙撃にいち早く気づいたItaliaが木曾を止めに行かなければ、それだけで壊滅していたかもな。

「Romaさんは大破した後撤退しつつもしつかり砲撃してましたし、艦隊での貢献度は高いと思いますよ?。」

実際に見ていた青葉が言うのだからそうなのだろう。俺はその時島風見てたからなんとも言えんが……。

「確かに、Romaさんの砲撃が無ければItaliaさんを止められたかもしれないっぽい! ちよつと掠って驚いたもん」

「ほーん、やっぱ役に立ってんじゃん」

夕立の話を受けて俺がそう言うのと、Romaは恐縮したように、

「そ、そう。なら、良かったのだけど」

と顔を赤くして縮こまった。なんだこいつ可愛いな。

というかこうして話を聴くところいつらの連携入り組みすぎだろ……。まだ3人残ってるんだぞ? 今日初めて組んだ即興パーティーでこれである。凄いしか言えないと曙に怒られるが、凄いといしか言えん。

「んで次はItaliaか。木曾を止めに行つたんだよな?。」

Italiaの胸元の繊維は完全に無くなっており腕で要所を隠している状態だ。というか下着(上)はどうした! 巨乳の艦娘ほどブラ付けない風潮なんなんだよ! と、言える筈もないので視線を顔に固定した。

「はい。狙撃に早めに気づけて良かったですねー。キソーは私が見た時には既に中破してたので、そのまま大破させるつもりだったんですが、逆にやられちゃいましたあ。強いですねえキソーは」

おおうItaliaの喋り方聞いているとなんかホワホワしてくるな……。俺の知り合いに居ないタイプだ。え? そもそも知り合いが少ないだろ、ってやかましいわ!

「いや正直危なかったぜ? 弾薬の残りも怪しかったし、上手いこと懐に潜り込めなかったら、やられてたのはオレだった」

木曾も感心したようにItaliaを見る。あんだだけバカスカ

撃ってるから弾薬が無限に見えるが、一応上限はあるんだな。

「そう言ってくれると頑張った甲斐がありますねー。次は撃破を目標にしちゃおうかしら？」

「お、言うねー！ 楽しみにしてるぜ！」

木曾がイケメン過ぎる件について。こいつ女子校とか通ったら絶対モテるだろ、女子に。

「でー、次は足柄か？ あ、カツサンド美味かったぞ」

俺が礼を言えば望月も思い出した様に言う。

「あ、あたしも美味かったよー。さすがだねえ」

「ありがとー！ カツサンド、また作るわねー！ で感想だけど、旗艦って難しいわねえ。私は前線に出てドンパチやるのが性に合ってるし。なんとたつて飢えた狼ですもの！」

確かに旗艦はあまり最前線で戦うもんじゃねえな。むしろ庇われる側だし。

ところで関係ないけど足柄さん、隠さないんすね。俺を恥ずか死させる気ですか。何に飢えてるのか分からなくなっちゃうー！

「でもいい経験になったのは確かね。後何回か経験してみてもいいかもー！」

「そ、そうか。もしかしたらまた任せるかもな……」

「この艦娘は向上心の塊ばつかなの？ だからモリモリ強くなつていくんですね、知ってた。」

「楽しみにしてるわね！」

「お、おう。で次が最後、大井だな」

言いつつ目を向けた大井の損傷は大破ながらこちらの目に優しい。あまり服が破れていないのだ。主な破損が砲塔や魚雷発射管に集中した為、装甲はあまり傷付かなかったのだらうと勝手に予想してみる。

「正直最初の魚雷をしっかりと活用するとは思わなかったぞ」

俺がそう言うも、

「活用したのは足柄さんやRomaさんですから私はなんとも。あくまで使える道具を配置しただけです」

とやんわり否定される。謙遜しているのではなく、本当にそう思っているようだ。

「まあそうなのかもしれんが、命中したと聞いた時は正直鳥肌立ったぞ。あくまで牽制だと思ってたからな」

「使えるものは全力で使うべきですから。私としてはもつと自分でも撃破したかったのですが、今回はうまくいきませんでした」

そう言う大井だが、あまり落ち込んでいる様子はない。ウチの大井は、強いし働くがあまりやる気というか、気力が無い。北上が居ないからだろうか。というかそれしか理由が思い浮かばない。

こりやーさっさと北上を建造したいとこだ。上をちよつと突いてみるかねえ。あー無理ゲー……。……。

## 艦娘の活力とか勢いは凄い

反省会も終わったので次はMVP決めである。各チーム一人ずつ選び出す。

今回の演習はどちらのチームもかなり見所が多く、それはつまり活躍した艦娘が多いということでもある。なので当然選出は難航するー

ーなんてことは無く。普通にサクツと木曾と島風に決まった。

木曾は島風を相手取りながらBチームを狙撃し、かつ戦艦と真つ向から戦って勝つ戦闘力、そして長期の撃ち合いを二度続けて行ったにも関わらず中破止まりの生存性能。これでダメなら一体どんな化け物がMVPを取れるのかという話になるので即決定。

島風はまだ木曾や加賀の領域に達していないのに一人で木曾を抑えてみせた。砲撃を止められていないと思うかもしれないがそもそも木曾の前に長時間立っていられるだけで凄いのに、あろうことか中破にまで持つていった。ということで島風に決定。

青葉が推していた空母二人は、

「そのMVPは余力を残して加賀の艦載機を落とすきれん様になった時まで取っておくわ！」

と大変男前な台詞を発していた瑞鶴と、

「うちは実戦の方でいつもMVP貰つとるから別にいらんよー」

と大変身も蓋もない台詞の龍驤の対比が印象的だった。

まあそんな訳でMVP決めも終わったので。

「はい、じゃ解散。さっさと入渠してこい。あ、旗艦は報告書を忘れるなよ？」

はーいと返事をしながらぞろぞろと入渠施設に向かう艦娘達。あれだけ騒がしかった発着場は鳴りを潜め、しんとした空間に残っているのは俺と青葉、それから望月だけとなった。ん？　なんで帰らないのん？

「おら、お前らも散った散った」

そう言って手をしっしっ振る俺に対して、何言っただこいつみ

たいな顔をする二人。

「えー」

「司令官。さっきの約束、もうお忘れですかあ？」

え？ ……あつ。

「いやすまん青葉、素で忘れてたわ」

写真撮らせるって言ったんだったな。 ……面倒くせえけど。

「まあ青葉は分かった。望月はなんで残ってんの？」

視線を向ければ、未だ艦装を背凭れにだらけきった少女がいる。

「あー、歩いて帰るのめんどくせーから司令官に負ぶって貰おうかと」

「ふざけんな」

いやもうホントに。

「望月さんすみませんねえ。青葉が先約なので、今日の所は歩いて帰って下さいー！」

「うへえ、まじかよお、めんどー……」

いやそんなうげえって顔しなくても。言っちゃうけどそんな距離ないからな？ 五分もかからないからな？ だがこうなると望月は動かない。どうしたものか……。

「まあまあ望月さん。 ……ごによごによごによりん……」

どうするか考えていると何やら耳打ちを始めた青葉。何話してんだ？

話の内容はさっぱりだが、望月は怪訝な表情の後驚いた顔となり、その後何故か赤面し、そして最後には、

「しよ、しよーがねえなー。しよーがねえから今日は歩いて帰る。青

葉、約束忘れんなよー！」

そう青葉に念を押してから本当に歩いて帰っていった。バカな ……！

「ああなった望月が素直に帰る、だと……!?!」

あいつが秘書艦になった時にもあんな風に梃子でも動かなくなつて、一日鎮守府の機能が停止したことがある位なんだぞ!? 俺も一緒になつてサボっていたのはさて置いて。さて置いて!!

尚後日二人とも大和にこつてり絞られ、望月は秘書艦出禁になつた。

「ふふん！ 青葉の交渉術の賜物ですっ！ ささっ、司令官、着いてきて下さい！ 写真を撮る場所は決めてあるのです！」

一体どうやって望月を説得したのか非常に気になるが、青葉が俺の手を引っ張り始めたのでそれどころじゃなくなった。手を掴まれた事がまず恥ずかしいし、この歳（21歳）になって手を繋いだ程度で恥ずかしかつている事実がまた恥ずかしいという負の連鎖。ダサイ。

俺が童貞力を発揮して思考回路をバグらせていると、いつの間にか目的地に到着していたようで青葉の手がスルリと離れていった。

どこだよここ、と辺りを見渡す。

移動したとはいえここも変わらず海岸で、先程と違うのは人の手が入っておらず一面がゴツゴツとした岩場であること。要はグラビアアイドルがイメージビデオの撮影に使いそうなロケーションだという事だ。おい、撮られるの俺だぞ。

手を離れた青葉は更にスイスイぴよんぴよん岩の上を移動し、ある程度まで進んだ所でこちらに向き直る。

「あれ？ 司令官！ こっちはです！ ここですよ！」

どうやらあの場所が青葉の目的地らしい。俺が着いて来ていない事を不審に思ったのか手をブンブン振ってアツピルする青葉。なるほど、岩場の中でもより海沿いで撮るわけか。大丈夫？ 踏み外すと結構深そうだよそこ。

とはいえ行かないことには始まらない。こんな面倒なことはさつさと終わらせるに限るのだ。書類の山残ってるし……。

俺もスイスイぴよーあつぶね！ 足挫くところだったわ！ 無茶せず慎重に行こう……。ところどころ屁っ放り腰になりながらも青葉の側に向かう。

青葉の前に辿り着くと、見渡す限りの海が視界に広がった。この海が深海棲艦に脅かされているとはな。まあウチの艦娘のおかげでここらは安全だが。

「では司令官、早速撮っていきましょう。時間は有限です！」



そう言つてカメラを構える青葉。カメラに詳しくはないから何とも言えないが、中々値が張りそうな見た目をしている。少なくとも安いデジカメではないようだ。

「つっても俺に出来ることなんて立ってることぐらいだ。ポーズとか要求されても困るぞ」

「だいじょーぶです！ 撮影の練習なのですから、それこそ腕の見せ所です！ さ、そこで普通に立ってみて下さい！」

青葉の勢いが凄い。その勢いに乗せられて撮影が始まった。なかなか長い撮影だったのでその様子をダイジェストでお送りしよう。

【五分経過】

ものっそい撮られてるんだけど。シャッター音が鳴り止まない。青葉も撮りながらも常にポジションを変えていて、『ありとあらゆる角度から沢山』と言っていたのは誇張でもなんでもないことを態度で示している。

「いいですねー、司令官つて意外と写真映り良いんですね！」

「マジで？ そんなこと言われた事ないんだけど」

「いやあ、良い練習になります！」

【十五分経過】

「しつ、司令官！ この角度！ この角度やばいです！ 凄くカッコいいですー！」

「は？ いやお世辞とかいいから」

「青葉は写真でお世辞は言いません！」

クワツと目を見開き怒るように言う青葉。

「お、おう、すまん？」

むしろそう言い切るお前がカッコいいな。

「凄いですよこれは大発見ですよ！ ちよつと腰に手を当ててみてくださいませんか？」

青葉のテンションに押されるように腰に手を当てる俺。まあ他は変わらず直立だが。

「はうわっ！ 殺人的です！」

何が？

【三十分経過】

「いいです良いです、凄く良いです！　ちよつとその岩に片脚を乗せて、そうです！　クール！」

「そ、そうか？」

アオリで撮るためにローアングルに構える青葉。

「あつ、顔は動かさず視線だけください！」

「あーつと、……こうか？」

「痺れるう！　カツコ良いですよー！」

さつきからどストレートに褒めてくるのでだんだんと頭がぼーつとしてくる。褒められ慣れてなさ過ぎて辛い。

というかこんなに撮ってフィルム切れを起こさないのかと不審に思っていたが、妖精さんがちゃっかり運んで来ていた。青葉がフィルムを交換するタイミングでサツと妖精さんから渡される新しいフィルム。連携がバツチリすぎる。

というか、あつちにいる妖精さん、いつの間にかレフ板持っていない？

【一時間経過】

「こんなポーズとかどうだ」

「その発想は無かったです！　天才ですね司令官！」

なんか俺も変なテンションになってポーズを取り始めていた。

良い時間になってきたことにより太陽は海に沈み始め、空の色は橙色に染まり、それがまた青葉のテンションを上げる。明るさによって撮影の仕方も変わるんだそうだ。

「ひゅうー！　司令官、サイコーー！」

「ふっ、やめろ照れる」

ーそして。

「なんで俺はあんなにノリノリでポーズ取っちゃってるんだ……」

撮影終了後、俺は頭を抱えていた。あんなにノリノリな俺は俺じゃない。

「というか青葉の乗せ方が上手すぎる。え？ お前が乗せられやすいだけだろって？ 分かってるよチクシヨウ黒歴史確定だよ。妖精さん、後で思いつきり悶えたいから俺の部屋防音にしてくんない？ ダメ？ そう……。」

対して青葉はツヤツヤした笑顔で、

「司令官、今日は有意義な時間をありがとう御座いました！ ……いやー、凄い収穫でした。これは、売れますよお」

と後半何を言っているのか聞き取れなかったが、まあ非常に喜んでいることは分かった。

「そ、そうか。喜んでくれたなら何よりだ」

この疲労感の甲斐があったなら、良しとする。したい。

「はい！ では青葉には現像の作業がありますので、これにて失礼しますう。長らく引き止めてしまいすみませんでした！ でわっ！」  
よほど早く現像したいのか、足早に去って行く青葉を見送る。

まあ後で冷静になってなんで俺なんか撮ったんだと後悔しないことを祈ろう。

さて、俺も帰って仕事しよ。もう日が沈んじまったよ。

そう思って歩き出そうとした瞬間、背後の海からバシヤア！ と何かが飛び出してきた様な音。続けてビシヤつとすぐ後ろに着地した気配。そして、

「海の中からこんにちはー！」

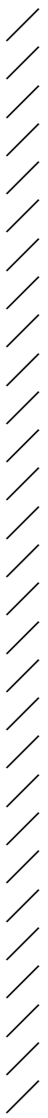
初めて会った時も聞いた、この特徴的なセリフ。

「お、お前は、5——」

「——なのねー！」

「19かよー！」

姉妹艦のセリフ盗るんじゃないやありません。





【望月と青葉】

「まあまあ望月さん、……これから青葉は司令官を撮影するのです。今引いてくれたらその時のベストショットをタダで進呈しましょう」

「なっ!? あ、あたしは別に写真とか、いや……うー、欲しい」

「では契約成立ですつ。いやー、司令官愛されてますねえ」

「愛とかじゃねえし!」

※……まで八幡には聞こえない高度な小声。

## 我が鎮守府の自由度高すぎ問題

伊19。潜水艦。史実において正規空母ワスプを魚雷で仕留めたり、(偶然ではあれど)超遠距離に居る戦艦と駆逐艦にも損害を与えたりと、海のスナイパーを自称するだけの戦歴を持つ。

無論、当艦娘鎮守府においてもその実力は折り紙付きであり、史実に引つ張られた上でこの鎮守府で超強化された結果、ちよつとよくわからない程の魚雷命中精度を誇る。曰く、「大体この辺りに敵艦が来る予感がするのね」で本当に当ててしまいうやべー奴だ。

すごいなあ。ウチの艦娘流石だなあ。

だが。

オフのこいつ、いや。陸のこいつは別の意味でやべー奴だったのである。

陸に上がり艤装を解除した19はベシヤベシヤとスク水から海水を滴り落としながら、俺の首に飛びつく様に後ろから抱きついた。更に肩の上に顎を寄せ、ぐつと密着してくる。つてああああ濡れるだろう軍服が！ 磯くせえ！ 柔つけえ！ あと柔つけえ！

「提督、こんばんはなのね！ ……あれ、青葉はもう帰っちゃったの？ 残念なのね。青葉は何気に大きいから揉みがいがあるのに……」

まあもはやこのセリフで何がやばいか大体察せられるというものである。

「ええい離れろ!! つーかお前そんなだから他の艦娘に避けられるんだよ……」

畏怖を持って避けられるんだよ。

「だって大好きだからしょうがないのね!」

感動的だな。セリフだけだが。

「胸が、だろうが……」

「はいなのね!」

「そこ元気に返事するところじゃねーよ」

そう、こいつは。

男の俺から見ても度し難いレベルの『胸部装甲ソムリエ』だった。その星人レベルの高さは半端ではなく、この艦娘鎮守府に、こいつに胸を揉まれたことがない奴は居ない（凄い文だ）。俺すら揉まれたというのとはや一種の恐れすら感じるまでである。なんなの？ 師匠とお呼びすれば良いの？ わきわきわんだほーなの？ 揉み放題で羨ましいとか思っていないんだからね!!

「くっ、この、離れなさいはしたない!」

19を引き剥がそうと四苦八苦するが、吸盤でも付いてるかのごとく離れる気配がない。むしろ両足を腰に回してくる有様で、背中に19自身の胸部装甲がこれでもかと押し付けられる。掴んで引きずり下ろそうにもスク水しか着ていない為掴み所がない。掴んで良い所が無い。乙女の柔肌を驚掴む勇氣は無いのだ。

俺の抵抗むなしく抱きつき心地の良いポジションを見つけてしまったのか、猫の様に目を細める。

「んふー、提督は何をしても怒らないから好きなの!」

「いや怒ってますけど!」

おかげ様で背中びっしょびしょだよ?

あとすっごい柔らかいものが当たりっぱなしだからね?

「提督も背中でイクのを味わってればいいの」

「なっ、ばっ、このビッチいい!!」

確信犯かよ! (最近の意味で)

「照れないの照れないの。ほらほら提督、このまま鎮守府に帰るのね」

「なんの拷問だよそれ!」

「拷問だなんて、嬉しいくせになの」

絵面が犯罪的すぎるわ!

その後も俺は必死に体を振ったり身を振ったりするものややはり離れそうにない。というか、端から見たら背中中の感触を楽しんでるみたいになってないか。違うからね?

……いやいや落ち着け。クールな八幡君を思い出すんだ。座右の銘は押してダメなら諦める。よし、諦めよう。クール八幡だ(あれ、何故かポンコツ臭が)。

「はあ、しょうがないからこのまま帰るが、いつ降りても良いからな。すぐでも良いぞ」

むしろ推奨だ。

「お構いなくなのね」

構え。

……ふう、19にしてみれば良いタクシーGETつて感じなのかねえ。いやでも俺太もとか搦んでないから、19が自分で腕と足を使っただけで、おんぶになってないんだぞこれ。寧ろ疲れるだろ……。俺は俺で背中が気になって仕方ないし。あー柔い柔い、じゃなかった。怠い怠い。

心頭滅却しながら鎮守府に向かって歩いていると、背中で脱力した19が口を開く。

「そういうえば、昼頃能代に会ったのね」

「ほーん」

能代といえ、初めて鎮守府に着任した時に会ってから今までずっと、真面目に仕事をしてくれてかつ優しい貴重な常識人である。俺の中での評価が地味に高い艦娘だ。

「相変わらず阿賀野型は凄いのね！ 軽巡とは思えないポリウム、いつまで触つても飽きさせない柔らかさと程よい重量感、安心感を齎す究極の神秘なのね」

そして当然のように揉んできたんかい。表現だけ聴くとなんか寝具みたいだな。

「耳元で食レポならぬ乳レポをするな。次能代に会った時気まずいだろうが。ってかこれ聞いたこと自体バレたら俺消されちゃうんじゃないの？」

霞とか曙に。

「イクが守るのね！」

「二人揃って瞬殺される未来しか見えねえ……」

そうになったら俺は完全にとぼちりである。

「大体、提督は男のくせにこの手の話題のノリが悪すぎるのね。ドーンと構えてればいいのに」

「そう言って話に乗るとセクハラ扱いでドン引きされるんだろ？ 騙されねえぞ」

「あまりの警戒心の高さに提督の闇を見た気分になったのね……。もう、そんな酷いことしないの！ そもそもこんだけ艦娘に囲まれててぼつちとか往生際が悪すぎるのね！」

「いやほら艦娘は仕事仲間であって友達じゃないし……」

「そこで部下って言わないあたり提督らしいのね。……まあいいの。次は昨日会った大井の感触なんだけども」

「唐突に乳レポに戻るな。ってか大井だと？ やめてくれよ、聞いたことがバレたらマジで危ない人選じゃねえか」

ウチには北上っていうストッパーも居ないんだから！

「提督は心配性なのね。大丈夫？ おっぱい揉む？」

「いきなり直接的なことを言うな！ 揉まねえよ！」

「冗談なのね♪」

なんだ冗談かよ。あいや別に残念とかじゃないからな？ 本当だよ？

「ところで提督はどこに向かっているの？」

「あ？ 普通に執務室だよ。……ああ勿論、お前は適当なところで降ろすが」

なんなら適当な艦娘捕まえて引き剥がしてもらおう。

「じゃあ食堂がいいの！ もういい時間なのね」

マジでタクシー扱いじゃねえか。食堂は執務室までの道中にあるから良いけどよ。

「あー、夕飯ね。了解、食堂前に捨ててくわ」

「その表現やーなのね」

「じゃあ放棄」

「意味変わんないのね！」

「我儘だな。じゃあ設置」

「イクは罨か何かなの!？」

「……あながち間違いでもねえな」

対艦娘用セクハラトラップ。最近は軽巡がお気に入り。



「失礼なのね！　ぷんぷんなのね！」

「うわああざとい」

「言ってから自分でもちよつとどうかと思ったのね。んー、反省します！　なーのねっ♪」

「あざとさを重ねてきた！」

反省してないじゃん。

ちよつと可愛いと思っちゃったんだけど。

「そもそもなんで置いてこうとするの？　一緒に夕飯食べれば良いのね」

「俺まだ腹減ってないし」

昼に食べた足柄謹製カツサンドの腹持ちが凄い。

「ええー！　一緒に食ーべーるーのーねー！」

駄々をこねるように肩を掴んでガクガク揺すってくる。

「ええい止めろ、揺するな。いやだからって首を絞めるな。……誠に残念ながら、書類仕事はまだあっぷり残ってたんだよ。手伝ってくれるなら歓迎するぞ」

戻った時の霞さんが怖くて仕方ないです。

「お仕事頑張って！　応援してるのね♪」

手のひらクルリンだな……。19は事務作業とか苦手っぽいから無理もないが。見た印象通りである。

「はいはい……」

それからは19の話（大和とか初風とか曙とか長波とかzaraとか、の乳レポ）を必死に聞き流しながら鎮守府に向けて歩を進めた。途中神通を見かけた時に春日部の5歳児並の速さで揉みに行ったことには、もはや尊敬すら覚えたものだ（直後アイアンクローで折檻を受けていたが、本人は満足そうだった）。その隙にこっそり置いて行くと思つて先に帰ろうとしたが、すぐバレて背中にへばり付かれてしまった。子泣き爺かな？

そして。

「おら、着いたぞ、降りろ」

食堂前に着いたので背中に話しかける。夕飯時である食堂はガヤ

ガヤとした騒がしい空気であり、入り口の前にいる俺たちにもその雰囲気は伝わってくる。

「っしょつと……。ここまでありがたいのね！ ……本当に一緒に食べないの？」

「おう。早く戻らないと本格的にやばい。明日の朝日見られるかなあ……」

「切羽詰まりすぎなのね!? そこまで言うなら急ぐのね!」

「おう。じゃな」

言ってから立ち去ろうとする。が、袖を掴まれた。

振り向くと、上目遣いの19が、

「お仕事お、頑張ってるのね♪」

キャピルン♪ と聞こえそうなポーズまで取っていた。

「……あざとい」

後ろから聞こえる楽しい笑い声聞きながら、俺は今度こそ立ち去った。

多分、顔は赤い。

☒

気がつけば走っていた。

霞さん！ 許してください！ 全部青葉って奴が悪いんです！

心の中で責任転嫁しながら廊下を走る。正直今から数分程度急いだところでどうだって話なんだが、朝怒られたばかりでこれは流石に申し訳なさすぎる。

故に走る。廊下を走ると言う教師などおらず、なんなら島風なんかは歩いているところを見たことが無い。なんなんだあいつ。

さてもう少しで執務室だ、という所で俺は足を止めた。止めざるを得なかった。

道中である廊下に、後20メートルで執務室という場所に、人が倒れていた。艦娘が倒れていた。大事そうにワインボトルを抱えながら、幸せそうに眠っていた。

全裸で。

………おーけーおーけー、冷静になろう。ただのP o l aだ。よし。いやよくねえよ。

正直こうなっているのを見るのは初めてじゃない。なんならこいつに限り見慣れ過ぎてもはや興奮すらしないまでである。その為対処は簡単だ。俺は溜め息を吐いてから上着をP o l aに掛けようとして、止めた。19のせいでビッショビッショである。こんなん掛けたらいくら艦娘でも風邪引くかもな……。仕方なしに放置して放送室に向かった。

放送室に入った俺はすぐさま館内放送で呼びかける。

『えー、Z a r a。至急放送室まで来るように。またアホが廊下で寝ている、持って帰れ。繰り返す——』

放送が終わって数分後、ドドドドと言う足音の後に放送室の扉が開かれた。

「すみません提督！ P o l aが本当にすみません！」

大変慌てた様子で胸を揺らしながら入ってきたZ a r a。つていかん、19のせいで意識が胸に。

「いやZ a r aは悪くないけどな。執務室前の廊下で寝てるから、早く部屋に連れて帰ってやれ。風邪引くぞ」

そもそも艦娘って風邪引くの？ つて話ではあるんだが。

「G r a z i e。そうします。……提督はP o l aにお酒止めろつて言わないですよね」

「まああそこまで好きな物を止めるのは気がひけるし。人間と違って急性アルコール中毒は無いらしいから、まあいいんじゃないの？」

俺もマツ缶禁止されたら死んじゃうし。死んじゃうし。

「個人的には酒より脱ぎ癖をなんとかして欲しいとこだ」

俺が見慣れる程脱ぐって相当だからな？

「それは本つ当にすみません！ よく言っておきますので！ 今度お詫びにP a s t a、ご馳走します！」

「あー、そこまで気にしなくていいんだがな」

「気にします！ 絶対食べてくださいね！」

絶対に。Z a r aの Pastaは美味しいからいいけども。

「そんな言うなら、まあ食うけど。つてか早く行つてやれ」

「そうでした！ では提督、また今度！」

もうP o l a ったらああ！ と叫びながら出ていくZ a r a を見送る。よし、俺も今度こそ執務室に行こう。そう思い、放送室を出た。

「あら司令官、お疲れ様」

「おう、お疲れさ……ま……」

声を掛けてきた相手を見る。につこり笑顔がとつてもキュートな霞さんでした。でも不思議！ 超怖い！ そりや放送したら来るよね！

「あ、えーとだな、別にサボっていた訳じゃなくてだな」

いや無理だよこれ言い訳しても無駄だよ絶対！

俺が絶望感を露わにしていると、何故かフツと怒気を引つ込める霞。

「はあ、わかってるわよ。青葉さんが撮影に付き合わせちゃいましたってわざわざ言いに来たから」

青葉ああああ!! 俺にはお前が女神に見える!!

「そ、そうなんだよ。まあ安請け合いた俺も悪いし、仕事はこれから続きやるから安心してくれ」

信じられるか、これ俺のセリフなんだぜ。

「なら良いわよ。私も4、5時間開けちゃったからまだ仕事残ってるし、最後まで付き合うわ」

「あん？ 用事は2時間くらいって言ってなかったか？」

霞がそういう宣言を破るとは珍しい。

「用事はそうだけど、荒潮が風邪引いて熱出しちゃってね、朝潮型総出で看病してたのよ」

総出って、艦娘は相変わらず姉妹仲が良いなおい。俺が風邪引いた時とか小町にすら割と放つて置かれるぞ。

「なるほどな。荒潮は大丈夫なのか？ つてか艦娘って風邪引くの？」

俺の疑問に霞はふんと鼻を鳴らす。

「引くわよ。人間と比べればごく稀だし、原因も人間とは別だけど」

差し詰め艦娘風邪ってとこだな（そのまんま）。

「それに偶然荒潮がかかっちゃった訳か」

なんとも不運なことだ。

「そういうこと。今は容態も落ち着いたから、朝潮姉さんが診てるとこよ」

流石に長女、こういう時頼りになるんだな。

「そうか、大事無いなら良いんだが……」

明日見舞いに行った方がいだろうか。いや荒潮とは何回か秘書艦やつて貰ったくらいしか接点無いしなあ。なんで来たの？ つて思われて終わりだろう。まあ適当に見舞い品を渡して終わりでもいいだろう。そんなことをぼんやり考えていると、突然霞が声を上げた。

「ちよつとクズ、何その上着!? ビチヨビチヨじゃない！ 早く脱ぎなさい。シミにもなっちゃやし、人間は艦娘より遥かに脆いんだから、それこそ司令官が風邪引いちゃうでしょうが！ そういう体調管理くらいちゃんとしなさいこのクズ！」

クズで始めてクズで締めるなよ……。

俺のそんな非難の視線もどこ吹く風、テキパキと俺から上着を剥ぎ取る霞。あと上着は19のせいだ。

「クズ司令官は一旦自室に戻って着替えてきなさい。下に着てるTシャツまで濡れてるわよ」

「うお、マジだ。しゃーない、ちよつと着替えてくる」

しかし霞、なかなかオカン力が高い。見た目はこんなちっこいの

に。  
「今何か失礼なこと考えなかった？」

この勘の鋭さ！

「ひゃ、別に」

「……早く着替えてきなさい」

「うす」

ひゅー、あつぶねえ。

## 青葉ノートそのいち

〈1年前〉

ども、青葉です！

新しい司令官が着任して約一月が経ちました。今日まで秘書艦をやった艦娘に色々聞いてみましたが、どうやら相当な捻くれ者なようです。

曰く、

会話が発生しなくて辛い。(吹雪談)

新しいご主人様根に持つタイプですよ！(漣談)

案外悪い人じゃないかも(秋津洲談)

腹立つ奴よ。(曙談)

まだ良くわかりません。馬鹿ではないと思います。(加賀談)

意外と胸板がっしりしてたのね！(伊19談)

有り難いことに書類仕事は早いです。(能代談)

仕事はできるようです。ですが何故か警戒されているような……。

(大和談)

などなど。証言から分かるのは、最低限のコミュニケーションだけ取る気にいる、ということでしょうか？ そうだったらなんだか寂しいですが……。ただ19さん秋津洲さんのように押せ押せな艦娘からの評価は悪くないので、強く迫られると拒めないタイプなのかもしれない。強く押さないと反応してくれないとか、非常ベルか何かですかね？

それはともかく。

青葉にもついにこの日がやってきたわけですよ。そう、青葉が秘書艦の日です！ 今日秘書艦の立場を最大限に活用して新しい司令官のことを根掘り葉掘り、隅から隅まで徹底的に、調べ尽くしてみせますよお！。そして不安がる艦娘達を安心させるのが青葉のミッションです(何かあれば送り返す準備も必要ですし)。

というわけで現在朝四時、青葉は司令官の部屋の前に居ます。

寝起きドツキリです！

嘘です！

今から家捜しを行うのですから起きてもらっては困りますよねえ。

「では、お邪魔しまあす……」

音を立てないよう細心の注意を払いながらドアを開きます。あらかじめマスターキーを用意してありましたが……不用心ですねえ、鍵はかかっていますでした。

司令官の住む部屋は普通のトイレお風呂付きの1Kです。玄関を通り、まだ歯ブラシセットくらいしか置いてないキッチンを抜けると、司令官が部屋の中央に布団を敷いて寝ているのがわかります。でも今用があるのは司令官本人ではありません。いえ、一応寝顔をパシヤリ。……ふむ、綺麗なお顔をしていますね。前に見た時はもつとこう、どんよりしていた気がするんですが……とりあえずパシヤパシヤパシヤと。

……おつとと家捜し家捜し！　と言つても、物が無いですからねー。部屋に入った瞬間から分かつていたことですが、ダンボールが二つしかありません。一応先週あたりに本土から取り寄せた私物が届いたはずなんですが。まあとりあえず中身を確認してみましよう。

えー、一つめのダンボールは……服と、本ですかね。服に関しては基本的には軍服で過ごすので持ってきたのは下着と部屋着だけのようです。それから本は、……これはたしかライトノベルと呼ばれる物でしたっけ。可愛い女の子が表紙で、それが数冊。ウチには在籍していませんが秋雲さんあたりと話が合いそうですねえ。

あとは、写真立てが2つ入っていました。一つは学校の制服姿と思われる司令官と、可愛い女の子のツーショット。目以外よく似ているので妹さんですかね？　そしてもう一つは、——おやおや、こちらも女の子との写真です。しかもこっちは学び舎と思しき建物の中で女の子2人に囲まれるよう写っています！　意外とおモテになったのでしょうか？　司令官も隅に置けませんねえ！　女の子は2人とも幸せそうな表情をしています。司令官も恥ずかしそうですが満更ではなさそうですねえ。どんなご関係なん——

はっ!?

ここで青葉に電流が走ります。  
もしやこの女性のうちどちらかが――

――司令官の妻なのでは!?

なるほどそれなら確かに、『艦娘に手を出さない』の要素に信憑性が生まれます!

……いやいや少し待ちましょう流石に早計ですよ青葉。もしかしたら――

――2人とも妻かもしれませんよ!!?

やーん司令官のスケコマシ♪ その魅力で艦娘も手籠めにする気ですね!?

……なんてまあ、それは無いでしょうが。もしそんな人ならもっと上手く自己紹介できるはずです(失礼)! というか艦娘に手を出すタイプならもっとコミュニケーションを取るでしょう。前に送り返したアレも話術だけは巧みでした。それと比べるのは失礼ですがこの司令官、今日までにまともに会話したことがあるの秘書艦になった艦娘だけですよ!?! 流石にもうちよつと絡みましようよ!

さて、邪推はこの辺にしておいて(手遅れ)、他には何がありますかねー……。

ん、これは、湯呑みですかね。なんとも独特なデザインのパンダが描かれた湯呑みです。まあこれは土産物か何かでしょう。

ふむ、今のでもう一箱目を見終わってしまいました。次の箱に移ります!

一箱目をどけて、下にある二箱目を開けた青葉ですが、絶句です。マックスコーヒーと印刷された段ボールが3箱、中型段ボールの中にぴっちり収まっていました。……あの、生活用品は? というかどうだけこの飲み物が好きなんですか! もう半分くらい空なんですけど!?! そんなに美味しいものかと一本手に取り内容物を確認しま



す。ええと原材料、加糖練乳、砂糖、コーヒー……。これコーヒーじゃなくてコーヒー味の練乳ですね。これをこのペースで飲んでたら病気になるますよ？ 司令官が起きたら注意しなくては。艦娘は大体甘党ですが司令官も大概のようです。

まあこの乳飲料の話は置いておきましょう。

問題は早くも見る所が無くなってしまったということです。予定ではもつとこう、『うわあ、何ですかこのえっちな本は!』とか、『これは日記ですね。青葉はいい子なので読んでりしませんよ！（ペラペラ）』とか、『ま、まさか司令官にこんな秘密が……！』みたいな展開を期待していたんですが。これでは紙面の一画しか埋まらないです！

仕方がないので起きるのを待つとしますかねえ。青葉は司令官の布団のそばに座ります。この人の実態は、お仕事をしつつ確認していくかなさそうです。青葉はまだ、おっかしいネタを諦めませんよ！

……………  
早く来すぎたせいで起きるまで暇ですね。

〔約2時間後〕

時刻はそろそろ午前6時になるうかというところ。青葉は脳内で新聞のネタをまとめながら司令官が起きるのを待っています。そろそろ起きるんじゃないでしょうか？ 枕元に置いてある目覚まし時計は午前6時にセットしてあり、鳴るまでもはや秒読みです。

〈ピピピピピピ!!〉  
〈ガッ〉

鳴った瞬間にタオルケットから腕が現れ、素早くアラームを止めました。そしてそのまま目覚まし時計を掴み、寝ぼけ眼で時間を確認する司令官。

「……………」  
そして再び目覚ましをセットし、二度寝に、ってちよいちよいちよ  
い!!

「司令官!! 朝です! おはようございます!」

青葉に気づきもせず二度寝なんかさせません!

「……………あぁ?」

思わず声を上げた青葉の方にのっそりと顔を向ける司令官。まだ寝ぼけているのか動作が緩慢です。しかし少しずつその意識は覚醒し、現状を認識してきたようです。

「……………あー、……………え誰?」

悲報です、青葉知られてませんでした。

確かにマイナーな艦ではありますが…………。

いえ落ち込んでる場合じゃありません。まずは自己紹介です。

「重巡洋艦、青葉です。今日は青葉が秘書艦なので、起こしにきましたよ!」

「ああどうも、こりやご丁寧に。…………いや待てそうじゃ無い。なんで部屋に…………鍵は?」

戸惑うようにそう聞いてくる司令官ですが、それに関して青葉に非はありません。

「え? 開いてましたよ?」

しれっと青葉がそう言うのと愕然とする司令官。

まあよしんば開いてなくても開けて入りましたがそれはそれ、黙っておきます。

「うわマジか、やらかしたなー…………部屋とか漁ってないだろうな?」

ギックウ!?

「あささあさあさつ、漁ってませんよ!? 司令官に2人の妻が居るとか、見てませんから!!」

「滅茶苦茶漁ってる奴の反応じゃねえか。って妻!? 何の話だ!」

「しらばっくれても無駄ですよ! 2人の女性に囲まれてる写真があつたじゃないですか!」

こうなったらもう堂々としてやりますよ!

「こいつ開き直りやがったな…………。てかあの写真か。あいつらはそんなじゃない。ただの、その、なんだ、と、友達だ!」

ただ友達と言うだけで何をそんなに照れながら吃っているの

しょう。怪しいです！

「ぼつちじゃないじゃないですか」

青葉がそう突っ込むと、司令官は何故か居心地が悪そうにしながら話します。

「あー、まあ、な。あいつらは高校の頃に出来た友達でな。高校卒業後の軍学校じゃ、やっぱぼつちだったぞ。今じゃこんなところ住んでるからあいつらとほとんど連絡も取れねーし……。ってなんでこんな事初対面のお前に話してんだ俺」

むむ、いい感じに話を聞けそうだったのに我に返ってしまいました。

「いえいえ、お気になさらず続きをどうぞー！」

青葉が続きを促すも、司令官はもう話す気は無いようで。

「いや続けねーよ。ほら、とにかく帰った帰った。仕事の時間には間に合わせるから、二度寝させろ」

司令官なかなか手強いです。というか二度寝させろって……。

ですが事前情報で押しに弱いのは知っています。

青葉、押します！

「まーまー！。せっかく早く起きたんですから、間宮食堂で朝ごはんでも食べましょうよ！。今ならちようど皆居ますから！」

「いやそれ聞いて行く気無くなったんだけど……。俺飯は静かに食べたいタイプだから」

ありや、不知火さんや早霜さんタイプでしたかー。

では方向転換です。

「むむむ、そうですか。じゃあ鳳翔さんのところはどうでしょう？

夜居酒屋なのはご存知の通りですが、実は朝もやってるんですよ。間宮券が使えないので朝は空いていますし、この時間でも軽い食事くらいなら用意してくれると思います。多分」

「ほーん（居酒屋なんてあったのか）。まあ行かないけど」

くうこのぼつち！。でも青葉諦めません！

「なんでですか！。せっかく青葉が秘書艦なんですからお話ししましょうよー！」

もうヤケです。司令官の腕を掴んでぶんぶん振ります。頷くまで離しません！

「わ、わかった、わかった行くから離れてくれ。頼むから」  
よわっ！

押しに弱すぎませんか!?

もう少し粘ると思っていたのに拍子抜けです。いえ押しに弱いというかボディタッチに弱いのもかもしれませんね。それなら19さんから高評価なものも領けます。

「本当ですか？ 良かったです！ じゃあ早速向かいましょうか。おっと、司令官はまだパジャマでしたね！ 部屋の前でお待ちしますので、準備してきてくださいね！ 二度寝しちや嫌ですよ？」

司令官の気が変わらない内にそそくさと部屋を出ます。

背後から「なんなんだあいつ……」と聞こえてきましたがスルーですよ。

さて、これで当初の予定が達成出来そうです。

鳳翔さんのお店でご飯を食べながら、尋もゲフンゲフン、質問コーナーです。

最低でもこれからこの艦娘をどうするかぐらいは聞き出しますよ！

それが青葉の、今回のお仕事ですから。

## 青葉ノートその二につ

所変わってここは食事処鳳翔。朝は騒がしいのが苦手な艦娘が、夜は飲兵衛な艦娘が集まる軽空母鳳翔さんの営む軽食屋兼居酒屋です。まさに和風といった店構えであり、木製の横開きの扉やそこに掛かった暖簾といった外観だけを見ると、まるで回らないお寿司屋さんのようです。

とはいえ実際はそんな格式張ったお店ではなく、店主が鳳翔さんなだけあってとても優しい雰囲気のお店となっています。

「おお……、なんか凄いいお店だな……」

店構えに萎縮してしまったのか司令官が二の足を踏んでいます。へタレっぽいムーブです。

「入り口の雰囲気だけ見るとそうですが中に入ると印象が変わりますよ？ 早く入りましょう！」

「あつ、お、おい」

司令官の手を掴んで店の中に入ります。

因みにまだ開店はしてませんが、食べ物が無くても居心地が良いので割と皆出入りしていたりします。ほら、座敷席で望月さんが寝ていますね。

「すみませーん、鳳翔さん居ますかあ？」

店の奥に向けて声をかけると、

「はい、少し待って下さいね」

厨房からそんな声が聞こえて来ます。

それから少しするとパタパタと可愛らしい足音を立てて奥から小走りで鳳翔さんがやってきました。

「あら、青葉さん。提督も！ おはようございます。今日はお早いですね」

青葉はともかく司令官が来たことに驚いた様子です。

「はい！ それで、申し訳ないんですがテーブル一つ使っても良いですかね？」

出来れば朝食も、と頼む青葉でしたが、

「それは勿論大丈夫です。けどごめんなさい。まだお米が炊けてなくて、すぐ用意出来るものがあまりないんです」

さき、流石に早く来すぎましたか。青葉失敗です！

「あーいや、別に朝一回くらい抜いても良いんだが」

あつ司令官、そんなこと言ったら……。

「駄目です！ 朝ご飯はちゃんと食べないと力が出ませんよ。すぐ何か用意しますから、ちゃんと食べて下さいね？」

鳳翔さんの世話焼き心に火をつけてしまったようです。さつきまでと打って変わって子どもを叱るような表情になった鳳翔さんに司令官もたじろぎ、

「あ、はい……」

その返事を聞いて満足そうに厨房に戻って行く鳳翔さん。それを見送りながら司令官がポツリと。

「なんか、俺の母ちゃんより母ちゃんしてるんだけど……」

「そう思うのも無理は無いです。鳳翔さんは全ての空母の母と呼ばれる艦娘ですよ？ 加賀さんだつて頭が上がりません！」

「かが、……加賀……ああ、あの青いの」

「いや司令官青いのつて……。いや青いですけど。袴スカート青いですけど」

というか一回秘書艦してましたよね？ それでそんな臃げな感じですか……。

「いや俺人の顔覚えるの苦手だし。でも加賀は覚えてる方だぞ？ あれだ、感情表現が苦手そうなのに妙に感情が伝わってくる奴だ」

「あー、なんとなく言いたいことは分かりますが」

加賀さん表情はあまり変わらないですが言いたいことは割と言いますし。更に言えば表情も”あまり”変わらないだけで、よく見ればかなり正直な反応をするんですねえ。

しかし司令官は人の顔を覚えるのが苦手、と。まあ皆個性強いですし嫌でも覚えるでしょう！

「それじゃ司令官、お座敷に座りましようか。えつとあそこは望月さんが寝てるので……あつちですね！」

司令官はチラと望月さんの方を見て、

「羨ましい……俺も寝てたい……」

などと呟いていました。この2人合わせたら面白、ゲフンまずいことになるのでは……？ まあ今は置いておきましょう。

「ささっ司令官、こちらへどうぞー」

司令官をお座敷に促してから青葉も座布団に座ります。

2人とも座ったことで漸く一息ついたのか、司令官は深くため息をつきました。

「……ふう、この座布団座り心地やべえな……」

「あー、わかりますわかります。なんでも鳳翔さんの手作りらしいですよ？」

「まじかよスゲーな……。なんか恐れ多くなってきたぞ」

「気にせず素直に使った方が鳳翔さんも喜ぶかと。……さて」

そう雰囲気を変えるべく区切る様に言えば、先読むように、

「本題か？」

と司令官が聞いてきました。やはりこの司令官、頭は悪くないようです。

「やっぱりわかつちやいますか？ ただの雑談ではないと」

「そりやまあ。今までわざわざこんなことする艦娘は居なかったからな。雑談なら別に執務しながら出来るし」

そう言う司令官に青葉も苦笑しつつ返します。

「それはそうなんです、そんなこと言ったら真面目な艦娘に怒られちやいますよ？ まあそんなわけで、軽くインタビューさせて下さい！」

青葉が意気込むように迫ると、司令官も面倒くさそうにはありませんが了承してくれました。

「正直嫌だけど、店の奥からいい匂い漂ってきてるしな。今店出たら鳳翔さんに申し訳ないから仕方ない。何聞かれるか検討つかないから怖いけど」

ほんとに正直ですね!?

いえ、この調子でインタビューも正直に答えて頂きたいものです。

「質問の回答如何によつては、司令官を送り返さないといけないかも知れませんかねえ♪」

そう冗談めかして言う青葉に（まあ冗談ではないのですが）、司令官も軽い調子で返します。

「マジかよこつわ。軍学校卒業しないで着任したせいで最終学歴高卒だからそれはヤバイ。これでクビになったら小町からゴミいちやんじゃなくておニートちゃんって呼ばれちゃう」

まあ妖精さんが見える時点で軍は絶対に司令官を手放さないでしょうが。

「小町さんとは？」

「ああ、可愛い妹だ」

それでゴミいちやんと。つてなかなか酷い文字り方ですね!?

「なるほど！ あ、もう一つの写真立ての子ですか？」

「……………お前結構がつつり部屋漁ってんのな…………。そうだよ」

「司令官によく似ていらっしやい「そうだろ!」た…………」

普段からは考えられない速度で被せて来ましたね…………。司令官はシスコン、と。

「いやーなかなか理解して貰えなくてな。うん、俺と小町はちゃんと似てるんだよ。目以外」

「ああ、司令官の目って確かに独特の淀みがありますよね！」

「淀みって…………。腐つてるとは言われた事があるけど淀みはなかなか無いんじゃないか？」

いや知りませんが。

「司令官の顔がまあまあ整っていること、目が変なことは分かります！」

「真つ正面から笑顔で目が変って言われると、結構刺さるな…………」  
おっと、傷つける意図は無いのです。

「大丈夫ですよー、艦娘は人間を外見で判断したりしませんから！」

そもそも人間の容姿の良し悪しとか大雑把にしか分かりませんか。言ってしまうえば我々軍艦ですし。軍艦の女の子なのです。好きになれるかは中身で決まります。



「……これと言ってるのがそこらの人間の女だったら、『はっ、そんなこと言っても最後は顔だろ』とか鼻で笑つてるところだが……、実際に俺の目を見てドン引きした艦娘って居ないんだよなあ。逆に俺が困惑してるくらいだ」

電にはむしろ体調を心配されたしな、と司令官。

「ええ……、人間から見たらその目ってそんなにおかしいんですか？

青葉にはよくわかりませんが……」

変とは言ったものの嫌うほどじゃないですよ？

「まあ目を見たやつが悲鳴を上げたり、うわってキモがられたりはしょっちゅうだったな」

そ、そこまでですか。

「うーん、青葉にはそれほどの物には見えませんがねえ。なんだかだんだん味があるように見えて来ましたし。艦娘から見て問題ないなら今はいいんじゃないですか？」

我々艦娘だって千差万別ですからね。

「いやそもそもそこまで気にしてないしな。嫌われるのも避けられるのも慣れてるし。むしろ避けない艦娘に戸惑うわ」

どうしましょう、司令官の闇が深いです。

「ま、まあそれは置いておきましょう！　じゃあまずは軽い質問からいきますね？　今日で大体着任してから一月になりましたが、お仕事は慣れましたか？」

そろそろ鳳翔さんの料理も届きそうなので、まずは軽く行きましようか。軽くと言っても、青葉はメモ帳を取り出して記者モードです！「なにこれ二者面談？　ま、まあいいや。……仕事は何だかんだ慣れてはきたか。というか書類がな、俺の所に届く時点で大分まとめられてるから仕事がしやすいんだよ。文書も見やすいし」

あー、それは大淀さんの功績ですね。大淀さんの存在は秘匿情報で名簿にも無いので司令官は知らないでしょうし、まだ教えることも出来ませんが。

「書類仕事に慣れてる艦娘が居ますからね！」

「ほー、ありがたい話だな」

なるほど、ここでそれは誰だ？ と聞いてこないのがこの司令官ですか。基本的に自分からは干渉してこない、と。

「だからまあ、仕事に関しては意外にも楽といえば楽だな。偶にアホみたいな量の書類がくるから油断

出来んが……。ま、そういう時は程よくサボる」

「ダメですよサボっちゃ!」

「いや、そもそも俺本質的には仕事嫌いだし。働きたくない」

とんでもないことを言う司令官にツツコミを入れようとするそれよりも早く、

「今あたしは新しい司令官を全力で支持することを決めたあ!」

顔だけ起こした望月さんからの熱いエールが届きました。聞いていたんですね……。

「えっ、な、誰？ ちくわ大明神？ あ、また寝た。畜生羨ましいな」

そして言いたいことだけ言って再び眠る望月さんに、司令官も戸惑い（と羨望）を隠せていません。

「ところでちくわ大明神ってなんですかね？」

「こ、こほん。まあとにかくそんな感じだ」

「締めが雑! 雑ですよ司令官!」

「何もとにかくじゃないです!」

「い、いいんだよ。そもそも俺がこんなに長く会話すること自体がレアなんだぞ? 感謝してほしいくらいだ」

えっ、司令官が起きてから30分経ってないですが、ここまででもう長い扱いなんですか!?

「まだインタビュー始まったばかりですよお!」

司令官、ほんとに手強いですね!?

……や、今のは割と望月さんのせいですが。

「お、料理来たみたいだぞ?」

あああ……。タイミングが……。

もう、仕方ないですね。青葉もお腹空いてきましたし。

「と、とりあえず一旦休憩にしましょうか……」

まだ何も始まってませんが……。

食器の鳴る音の方へ視線を向けると、鳳翔さんが料理の乗ったお盆を二つ持ってこの卓までやって来ました。

「お待たせしました。こんな物しか用意出来なくて申し訳ないですが……」

そう謙遜する鳳翔さんですが、お盆に乗った料理はとても美味しそうです。

「スクランブルエッグにトーストとサラダ……。ありきたりな筈なのに滅茶苦茶美味そうだな……。まさかこの和風店でこういう物が出てくるとは思わなかったが」

確かにこの純和風な店内で食べると違和感がすごい料理です。

「鳳翔さんは料理の腕前がもう神様レベルなので、作れるものは和食に限らないらしいです」

この間ピザ焼いてるのを見ました。

「そんな、神様だなんて……。青葉さん、大袈裟ですよ？」

大袈裟じゃないんですが……。鳳翔さんは謙虚ですねえ。

「お飲み物は何にしますか？ 麦茶と紅茶とコーヒーくらいしかありませんが……」

「あ、青葉は紅茶をお願いします！」

「はい、青葉さんは紅茶ですね。提督はどうしますか？」

「あー……。じゃあ、コーヒーを」

「はい。お砂糖はどうなさいます？」

はっ、そういえば司令官超甘党だった気が。

「あ、砂糖は10本で」

うわあ。司令官、うわあ。

「はい？」

ほ、鳳翔さんの笑顔が固まっています！

「10本で」

「提督？」

ダメな子を叱るような声色に流石の司令官も気づいた様子。

「……………5……さ、3本でお願いします」

「はい。提督は甘いのが好きなんですね。でもほどほどにしないと

お体を悪くしますよ」

鳳翔さんの真剣に氣遣う態度に司令官も素直に謝ります。

「うす、すんません」

この僅かな時間で随分と力関係がはつきりしましたねえ……。

つと、冷めちやいますね。

飲み物が届くのを待つてから、切り出します。

「じゃまあ、頂いちゃいましょうか」

「おう」

両手を合わせて、

「頂きます」

## 青葉のーと そのすりー

いやー、流石は鳳翔さん。食後の満足度が凄まじいです。

「俺が今まで食ってたスクランブルエッグはただの崩れた卵焼きだった……。絶対鳳翔さん艦娘じゃないでしょ、料理マンガのラスボス張れるよ……」

司令官も鳳翔さんの腕前に戦慄している様子。

「じゃあお腹もくちくなった所で、インタビューの続きと参りましょうか！」

青葉が切り出すと、司令官はげんなりとした顔を隠そうともしません。

「あー、まだ続いてたのかそれ……。もう今度にしようぜ？」

いやそこまで嫌ですかね!? 今度とか言って、絶対無かったことにする気満々なやつですよこれ!

「までも何も一つしか質問してませんよ! そんなこと言うなら今夜食堂で、他の艦娘に囲まれた状態でやりますか?」

仕方ないので脅し文句を——こんなのが脅しというのもおかしな話ですが——チラつかせます。静かなのが好きな司令官にはお辛いでしよう。

「さあ何が聞きたいんだ? 答えられる範囲で答えるぞ!」

ニツと爽やかにおぞましい笑顔を浮かべながら促す司令官。……司令官は作り笑顔が苦手、と。

「……その答えを期待していたとはいえどんだけコミュニケーション苦手なんですか。もっと色んな艦娘とお話しても良いのでは?」

思わずジトつとした視線を送ってしまいますが司令官は気にした風もありません。

「それが出来たらぼっちなんてやってないんだよ」

むしろ誇らしげにそんなことを言うのです。青葉とは普通に受け答え出来てるので大丈夫だと思っうんですがねー。ともあれ答える体勢に入ったつぽいので、質問に入ります。

「ではそうですね、二つ目の質問はまだ軽めで行きましようか。——

司令官は艦娘をその目で見て、どう思いました？」

少し問いがふんわりし過ぎたかもしれない。案の定質問された司令官はやや困った様な表情になり、

「え、これ軽め？ 重くない……？ ——どう思うも何も、まだ艦娘自体何かよくわかってないんだがな。大体たった一月で何が分かるんだって話だ。聞くのが半年は早い。だからこの質問はパス」

いきなり出鼻をくじいてきました。

「そ、そんなあ！ 今の印象で良いですからあ！」

流石にこれは答えて欲しいので青葉は必死にお願いします。

「だからその印象がすぐ変わるかもって言って………わかった、わかった言うからそんな目で見んなよ」

青葉渾身の涙目は通用したようで何よりです。勿論演技ですよ？ 決してさつきから話の腰を折られすぎているせいで実は心が挫けかけてたとかではないです。ないですって！

司令官はしやあねえなど言いながらテーブルの上で両手を組み、頭の中を整理する様に目を瞑りました。青葉も話しかけたりせず、考えが纏まるのを待ちます。

1分か、2分くらいでしょうか。少しの沈黙が続いた後、彼は口を開きました。

「……艦娘、艦娘ねえ。俺は他所にいる普通の艦娘をまだ直接見たことが無いから、あくまでここにいる艦娘だけの印象になるが」

「構いません」

むしろそれが聞きたいのです。一月とはいえ実際に艦娘を、それもココの艦娘を見た感想が。

続きを促すと、司令官は青葉の目を見て言いました。

「バカみだいに真っ直ぐで気持ち悪いくらいに純粋な奴ら、だな」

司令官の答えは意外にも内面についてのものでした。

「き、気持ち悪いですか……」

青葉が思わずそう溢すと慌てたように、

「ああいやすまん、言葉が悪かったな。……なんっーの？ 人間じゃあり得ないくらい素直なんだよ。お前ら艦娘は」

口下手なのでしよう。視線をあちらこちらに移しつつも、言葉を選びながら続けていきます。

「それは思ったことを正直に口にするって意味の素直じゃなくて……、お前らの互いの対等さ、つつーのかね。誰も無理をしていない。穿たず、素直に信頼し合っているように見える。それが俺にはその、なんだ……本物に見えた」

今のところはな、とあくまで今後印象が変わる可能性を念頭に置きせる司令官。

本物、ですか。口調からそれが司令官にとって特別な意味を持つことが感じ取れます。青葉達艦娘が、司令官の言う本物の関係を築けているように見えたなら、それはとても嬉しいことです。

とはいえたった一月でそこまで分かるものですか……!?

「よ、よく見てますねえ。名前は覚えていない様ですが」

青葉が動揺を隠す様にチクリと皮肉を刺せば、

「見てるだけだからな。むしろそれしかしてないまである。なんならそこら辺は遠征の編成を色々変えて帰って来た時の反応を見たりしてたし。どんな組み合わせでも仲がいいのは本当に驚いたわ」

さらりと流しつつ逆に信じられない物を見るような目で見られてしまいました。

「艦娘からしたら普通なんです……」

皆個性強いですが悪い子は居ませんし。

「ま、だから凄いつて話なんだがな。人間じゃまず無理だぞ。ここまでの人数がいて、性格や性能で明確に差があつて、しかも全員女？」

そんな普通派閥戦争起こるわ」

淀んだ目を更にどんよりさせながら司令官は吐き捨てらように言います。

「そ、それは流石に大袈裟なのは……。それに、司令官が見落としてるだけで、もしかしたら性格が悪いことを隠しているだけかもしれないよ?」

「あー、それは無いな」

まさかの断言に少し嬉しくなります。でも何故そう思ったので

しょうか。

「どうして断言出来るんですか？」

何かそう思わせるエピソードでもあったのでしょうか。

「そりゃ簡単だ。俺が一月経った今、まだ提督をやれているからだ」

んん？

「んん？ どういうことでしょう」

よくわからないので思ったままの声が出てしまいます。

「俺みたいな目をしてる奴は、キモがられなかったとしても相当警戒はされていたはずだ。そもそも俺の前にもたった一月で4回提督が入れ替わってるらしいし、ここの艦娘は情報収集において極めて優秀なことがわかる。俺程度の情報がどこまで手に入れられるかはわからんが、それでももし性格が悪かったり悪意があったなら、今頃俺は弱みで脅されたり提督をクビになってるだろうな」

語られた理由は予想外にネガティブなものでした！

……実際送り返した元司令官ズは、大淀さんが平均2日で弱みを握っていました、それはさて置き。

「司令官には聞かれて困る弱みがあるんですか？」

無ければその理論は破綻しているのですが……。

「いやそれ本人に聞いちゃうのかよ……。まあ犯罪に手を出したことはないしヤバイ弱みは無い、と思う。ただ何が弱みになるかなんて本人は気付けなかったりするもんだし、枕に顔を埋めて叫びたくなるような恥ずかしい黒歴史ならあるし……」

確かに本人の気付かない弱みというのはありますね。が、青葉はそれよりも面白そうなネタに食いつきました。

「黒歴史？ ほほうそれは一体どんな歴史でしょうか!？」

思わず訊ねた青葉の目が、興味津々に輝いていることが自分でも分かります。恥ずかしい黒歴史、青葉気になります！

「いや言わねえよ!! 恥ずかしいつつつてんじゃん」  
にべもないです。

しかし司令官、なかなか鋭いですね。

確かに大淀さん（諜報の鬼）の功績によって、司令官の情報はおよ



そ入手してあります。が、司令官がつい最近(2年前)まで一般人だった為大した情報は無かつたらしく、個人の動向については遡つても中学が限界だったそうです。故に手元にあるのは、少し調べれば出てくる程度の個人情報のみでした。

「まあ明確な弱みが無いというのはいいことです。見かけによらず真つさらで汚点の無い司令官ということですからね。願わくば、このまま清い司令官でいて下さいね!」

「因みに恩師曰く、俺はリスクリターンの計算に長けた小悪党だそう  
だ」

「なんで今それを言いました!?!」

小悪党つて! そのまま清い司令官の印象で居させて欲しかった  
です!

「バツカお前、俺が清いとか真つさらで汚点が無いとか、流石に早計す  
ぎるだろ。まだ提督として何もしてないんだから」

「えー褒めてるんですよ?」

弱みや汚点が無いことがどれだけ軍部でメリットがあるか理解し  
ていないのでしょうか。たった一月でも、汚点がある人はあるん  
です  
から。

「見当違いの方向に褒められてもな。それならこの腐った目に言及さ  
れた方が安心できるまでである。これは俺のアイデンティティだから  
な」

「司令官めんどくさいですね」

DMなんでしょうか。

「ほつとけ、これが俺だ」

ふうむ、どうも司令官は自分を低く見て貰いたがるきらいがあるよ  
うです。自虐を言う時は妙に饒舌になりますし。

そういえば司令官は大将にスカウトされたのでしたっけ。だから  
精神が軍部に染まっていけないのでしょう。青葉も始めて見るタイプ  
の人間です。送り返した3人とも、前司令官(元帥)とも違います。気  
難しいと言うより、捻くれていますね。この性格だと、人によって合  
う合わないが激しそうです。

閑話休題。

「ええと話を戻しますと、司令官から見て艦娘に悪い娘はいないと  
思って頂けた、ということの良いのでしょうか？」

「あくまで現状はだぞ、現状は。まだ一ヶ月だ、秘書艦が日替わりとは  
いえ半分も見れてないだろ。つてか全部で何人居たっけ？」

「72人ですよー」

大淀さんを除く。

「えっ、そんなにいたの？ まだ見たことない奴もざらにいそうだな  
……。まあとにかく、今後見る艦娘しだいだな」

そうは言いつつも、もうそれほど警戒しているようには見えません  
「ご安心下さい、悪い娘はいませんから！ 濃い子は居ますが……」

19さんとか。漣さんとか。挙げればキリがありません。

「ああ、まあ、うん。それは今まさに体感してるわ……」

……………ん？

「今、……つてええっ!? 青葉は濃くないですよー!」

失礼な!

「またまたあ」

「いやそんなご冗談をみたいに言わないで欲しいです!  
……………え、うそ、ホントですか？」

「自覚無かったのか……。安心しろ、俺も存在感は薄いがキャラは濃  
いらしいから」

「フォローがフォローの体を成してないですよ!」

何に安心すれば良いんですか!

「いきなり朝枕元に現れた拳句居酒屋に連れ込んで記者紛いの質問攻  
めをしないとフォローも何もあるかよ。しかもほぼ初対面だよ」

ガガン!!

そ、そう並べ立てられると言い訳出来ないです。

「あうっ、それは……………そんなっ、青葉が濃い側の艦娘だったなんて  
……………」

周囲が濃い中、自分はまともだと思っていた青葉は愕然として頭を  
抱えます。

「まあ何だ、周りが超ギタしか居なかったらギタギタの自分がまともだと思っても仕方ないしな、元気だせよ。冷めたコーヒーいるか？」

司令官がわけの分からないことを言いながらスツと手元のコーヒーを渡してきます。

「それ司令官の飲みかけじゃないですかあ！」

「というか殆ど残ってますが！」

「いやほら、苦くて」

「砂糖三つも入れたのに!？」

舌大丈夫なんですかこの人！

「だから砂糖5つは欲しかったんだが……」

「そんなに入れたら溶けきらずにジャリジャリしそうです……」

「その最後のジャリジャリを飲むのが甘党のジャステイスだろ」

だろ、と言われても知りませんが。

「もういいです砂糖でも食べてて下さいよ」

「辛辣に諦められた……」

全く、虫歯になっても知りませんからね？

青葉ノート、そのふおーとなう

真面目な空気が霧散してしまったので、一旦追加で紅茶を二つ注文（司令官はシレッとコーヒーをやめました）し、気を取り直して質問再開です。

「司令官的に一緒に仕事ができなかった艦娘は誰か居ますか？」

まだひと月ですがそれでも色々なタイプの艦娘が秘書艦になりました。これの回答により司令官の好みがわかるかもしれません。

この質問に対し司令官はふむと少し考え、

「——仕事ができるのは曙、霞、さつき出てきた加賀と……あと能代とか？」

とか？ と聞かれても知りませんが、しかしこのラインナップは……。

「司令官、まさかドMなんですか……？」

先程も思ったM疑惑。それを自ら補強していくスタイル。

能代さん以外どう考えても初心者に優しくない方々なのですが……。

「ば、バカちげえよ！ ……曙とか霞は、罵倒を気にしなければ普通に仕事しやすい相手だぞ？ 他人に厳しい自分にも厳しいから仕事がスムーズに進む。定時最高」

ああなるほどそういう理由ですか。

確かにその二人はそういう性格してますが……。

「罵倒、無視できますかね？」

我々艦娘の中でも結構苛烈なお二人ですよ？

他所の鎮守府ではその罵倒に心折られてしまう方もいるとかいないとか。

Mでもなければ厳しいのではないのでしょうか。

そう思ったのですが、司令官はそんな青葉の言葉を鼻で笑いしました。

「はん、自慢じゃないがあの人程度の罵倒なら俺にとっちゃそよ風みたいなもんだ」

「ちよつとメンタル強すぎじゃないですかね!？」

あの二人がそよ風って!

「長いこと罵倒に一家言持つてるやつと一緒にいたからな」

「罵倒に一家言!？」

「1の言葉に10の罵倒で返してくる奴が居てな。最初こそ嫌な奴だと思つてたが慣れると語彙力も高いし一周回ってやり取りが面白かつたまである。まあ知らんけど」

それむしろMになつた原因のエピソードにしか聞こえません……? 口ぶりから察するにそれなりに仲のいい相手だったっぽいので、あの写真の中の誰かでしょうか。

あと最後の照れ隠しは遅すぎると思います。

わざわざ突つ込むと喋らなくなりそうなのでスルーしますけど。

「は、ははあなるほど。では加賀さんは?」

彼女は初見だとよく『何を考えているか分からない』と言われがちな艦娘なのですが。

「俺自身あんまり喋るタイプじゃないから、最低限の会話しか無くても気まずそうにしないのはありがたい。振れる話題とかないし」

理由が斜め下……。その癖表情とかは見てるんですよこの司令官は。

「そのコミュ力でよく加賀さんの表情見分けられましたね?」

「逆だ。ぼっちは普段会話しないせいで少ない情報から相手のタイプを判断出来ないと命取りになるんだよ」

苦手な相手を一目で見分けられないと距離を置くのが遅れるだろ、と司令官は言いますが……。

「ええ……、それはもう普通に高度な技術なのでは?」

要は初見で敵が味方か分かるということでしょうか?

「取得理由が悲しすぎるけどな。それと敵を見分けることは得意だが、味方を見分けるのは苦手だから実は高度でもない」

「? 敵がわかれば味方も分かるでしょうか?」

「その時敵じゃないだけで味方とは言えないだろ」

うわあ、一気に微妙な感じに!

「それもうただの疑心暗鬼では!?!」

青葉が思わず叫んでも、

「まあな」

フツと笑いながら司令官はいつぞ誇らしげです。

「いやなんでちよつとドヤ顔なんですか」

妙に腹立たしいので止めて欲しいです。

にしても、先程から「今のところは」と前置きしているのはそういうことだったんですね。……あれ、今測ってるのこちら側ですよね? なんだかこつちが見定められている気がしてきました。いや見てくれるのは嬉しいんですけどね。

「何でもかんでもすぐ信じられる程ガキでもお人好しでもないだけだ。お前だって俺が提督に相応しいか見るためにこんな尋問してんだろ?」

ギクウ!

「いやあ、あつははー!」

痛いところを突かれ思わず笑って誤魔化してしまいました。まあバレてますよね!

「誤魔化し方雑すぎだろ……」

そんな青葉に司令官が呆れるような視線を向けてきます。目論

見がほぼバレたと言っている青葉はたははと苦笑いです。

「そうは言ってもあまりそういう意図が透けてしまうと身構えられると思っていましてからねえ。今では司令官がこういう時正直に答えしてくれるタイプなのが分かってきました」

むしろ正直すぎるくらいですよ。

普通はこういう時印象を良くしようとするものです。

しかしこの司令官、見栄を張らないというか……自分をよく見せようとするどころか、むしろダメな所を前面に押し出してくると言いますか。そも最初の自己紹介から「ぼっちだ」でしたし……。

「変に期待されるのは嫌だからな。ハードルは下げるに限る。幸い俺が正直になると評価は大抵下がっていく」

もしくはハードルを上げまくって潜るしかないな、なんて阿呆なこ

とを。

とはいえ司令官の目論みは失敗しているんですけどね。現状青葉からの評価は低くありませんので。

隠さないこと、嘘をつかないことはなんであれ好印象です（勿論秘密を一切許さないわけじゃありませんよ！）。艦娘全員に好かれる、ということは無いかもしれませんが、逆に先程の望月さんのようにドンピシャでハマる方も少なくないでしょう。

「そんなことを幸いと言えるのは司令官だけです。それで送り返されたらどうするんですか？」

妹さんにお二トちゃんって呼ばれちゃうんでしょう？

「正直送り返されたら本気でやべえ（就職的な意味で）。でもな、愛想笑いか出来ないし、場の空気とか読みたくないし、恩師曰く性格も捻くれている、要は社会不適合者だ。それを自覚した上でこの性格を変える気がないのは、ただの俺のワガママだ。そんなワガママに艦娘が無理して付き合う必要は無いだろ。片方が我慢しなきゃ成り立たない関係なんて、俺は願い下げだしな」

兵器である艦娘に対して対等の関係を望む様な発言。やはり、変わったお方です。

「ご自分に対して随分厳しくないですか？」

要するに嫌だと思っただけならすぐに司令官変更を要請しろってことですよ？

「いいや？　むしろ激甘だぞ？　自分大好き」

青葉は司令官の目をじつと見つめます。今の発言には嘘を感じました。これまでの発言から考えても説得力が無さすぎです。

「な、なんだよ」

「なーんでもありません」

まあ今日追求することでもないでしょう。それこそ時間が必要そうですね。

しかし適当に誤魔化す青葉に司令官は渋い顔。

「なんだそれ腹立つな」

「大丈夫です。司令官のドヤ顔もなかなか腹立つ感じでしたから！」

「何が大丈夫なのそれ」

サムズアップして言い放つ青葉に司令官はげんなりした顔。

多分何も大丈夫じゃないですが話は逸れましたね。逸れた話から逸れました。

閑話休題です。

「ええと、話を戻しましょうか。仕事がしやすい艦娘に霞さんや加賀さんが入っている理由は分かりましたが、能代さんはなんでですかね？」

タイプのには先程の二人と真逆と言っていると思いますが。

「あいつか。いや、明るいし優しいし社交的だし、俺の苦手なタイプのはずなんだが、……なんつーの？　良い意味で普通の奴だったからかね」

「明るくて優しくして社交的な方が苦手って凄いこと言いますね司令官！　……って、普通ですか？」

「おう。まあ確かにタイプで見れば苦手ではあるが、例えば19みたいに引っ付いてこないし、時津風のように喧しくもない。今後上手くやれるかは知らないが、仕事はしやすいタイプだったな」

ああ、時津風さんも秘書艦をやっていましたね。確か司令官への評価は高かったはずだ。

そう考えると、艦娘から司令官への評価と司令官から艦娘の評価が反比例する傾向にありますね。

押しが強い艦娘が苦手な癖に押しに弱いのでそりやそうなりますが……なんなんでしょう。もしかして妹さんの影響でしょうか？　年下に弱そうな感じがしますし。

それで言うのと押しの強い艦娘と弱い艦娘の、丁度中間地点ギリギリが能代さん、といったところでしょうか。

「青葉はいま司令官の特殊さを改めて噛み締めていますよ……」

「いいじゃねえか特殊。英語で言えばスペシャルだ、なんか優れてるっぼいだろ？　ってなんか既視感……」

「あれ意外とポジティブですね!？」

でも基本は後ろ向きっぼいですし、司令官がポジティブなのかネガ



タイプなのか分からなくなってきました。

「いや、後ろ向きに前向きなだけだから結局ネガティブだぞ」

ぐぬぬ、後ろ向きであることに誇りすら持つてそうな顔を……。

「それ回れ右出来ませんか？」

「無理」

「ですよー」

極めて端的な二文字の返答。

性格は簡単に変わりませんし、何より変える気が無いと明言してますからね。

なんて、色々言いましたが青葉的にも、司令官に性格を変えて欲しいとは思ってなかったり。今のままでも問題ないでしょう。この性格なら艦娘に無理に迫ることも無いでしょうから。……まあ同意があれば良いんですが、むしろ司令官が拒否しそうな勢いですねこれ。さて、では最後の質問に行きますかね。

「では次ですが、出来れば思ったままを正直に答えて欲しいです」

この人には不要なお願いかもしれませんがそう前置いて。

「なんかこええな……」

青葉の雰囲気が変わったことを察知し、本気の質問だと理解したのか司令官も居住まいを正します。

「別に怖がるものでもありませんが……、いえ、既に怖がられているかもしれませんがね。——ご存知の通り、ここ艦娘鎮守府の艦娘は非常に強いです」

たった一カ月ですが、演習や実戦をほんの少しでも見れば、嫌でも理解できる我々の異常なまでの強さ。

「あーまあ、そうだな。お前らが戦ってるのを初めて見たとき、深海棲艦が気の毒になるレベルだったし」

蹂躪。対深海棲艦においては、まさにその表現が当て嵌まるでしょう。現在、鬼級だろうと姫級だろうと青葉達であれば誇張無しに鎧袖一触です。

「そうです。問題なのは数くらいで、現状において我々の脅威となる深海棲艦の個体は存在しないと言えるでしょう」

説明する青葉に司令官が続きを促します。

「おう。それで？」

さてここからが本題。

——ああ、こればかりは聞くのに勇気がいりませんね。

「その………し、……司令官は我々が怖くはありませんか？ 他の鎮守府では苦戦するような相手を片手間に撃破するような、そんな我々のような化け物をいきなり相手にする羽目になって、恐怖や後悔はありませんか？」

色々質問しましたが、結局はこれが聞きたかっただけなのです。先程の『艦娘をどう思うか』という質問が、艦娘という存在を知ったことについての質問なら、これは我々の異常な強さに関しての問いです。

我々艦娘にとって司令官とは、無くてはならない存在です。司令官の居ない艦娘は徐々に弱体化し、最後には消えてしまいます。勿論強くなることに否やはありません。ですがその結果として、司令官に恐れられることだけは耐えられない。他の誰にどう思われても、これと決めた司令官だけには恐れられたくないのです。

そんな青葉の真剣な気持ちを察したのか、司令官はゆっくりと話し始めます。

「そうだな……。さつきも言ったが俺は他所の、所謂一般的な艦娘を見たことがない。その上で答えるなら——当然怖い、だ」

青葉の心が深い落胆に包まれます。

「そ、そうですか……」

やはりここまで強くなってしまうては、分かり合えないのでしょうか。いえ当然ですよ、いくら外見が人間に似ていてもその正体は兵器です。むしろ人間に似ているからこそ違和感を強く感じてしまうかもしれません。不気味の谷現象……、とは少し違いますか。と、一人で落ち込んでいると。

「なんせ、うっかりセクハラ紛いの事故でも起こそうものなら速攻で簀巻きにされて送り返されるだろうことが想像に難くないからな」

「……………へ？」

気分がどん底に落ちていた青葉は、一瞬司令官が何を言ったのか分かりませんでした。

「この女所帯だ、どんな事故があってもおかしくないし。いやマジで注意しねーとな」

うんうんと一人で頷く司令官に青葉は付いていけておりません。

この人全然察してませんでした！

「い、いやいやいや、強さについては!？」

化け物じみた強さが怖くないかという質問なのですが!!

「ああん？ 強さに関して言えば、俺からしたらもつと強くなっても良いんじゃないの、とか思うくらいだぞ」

更にこちらの不安なぞ知らんと言わんばかりに、耳を疑うようなことを言いました。

「もつとですか!？」

現状でも古参が二人も居れば連合艦隊を蹴散らせるんですが!!

そう思い司令官の目を見ますが、そこには嘘が含まれていません。本当に、セクハラで送り返されること『のみ』を恐れています！

「おう、もつとだ。なんでかつつーと……………その、なんだ、轟沈つて要するに死ぬと同義なんだろ?」

話題に出すのも申し訳なさそうな表情で轟沈について聞いてくる司令官。青葉もいつの間にか乗り出していた身を戻します。

「え、ええまあ」

艦娘にとつての轟沈は、仰るとおり人間で言うところの死を意味します。ごく稀に轟沈した艦娘がドロップ艦として帰ってくることはありますが…………、それは極めて稀な事例です。植物状態になった人間が奇跡的に眼を覚ますくらいに稀です。

「仮にも軍属が情け無いことを言うとな、……………俺にはまだ覚悟が出来ていないんだよ。見知った奴が死んで帰ってこないかもしれない、なんてことに対する覚悟がな」

「それは…………」

甘い、そう言われてもおかしくないことを言いますが一方で、彼は一般からスカウトされてきた人間ですから仕方ないところでもあり

ます。

「甘いと言われればそれまでだ。俺だっていずれ覚悟を決める時が来るだろうことは理解している」

今の司令官の眼は真剣そのもので、腐っているだなんてまかり間違っても言えません。

「だがまだ、まだ覚悟なんて出来てない。むしろ来たばかりで、お前らの命の重さをわかった気になるなんてそれこそ戦っている奴に対する冒瀆だ」

「司令官……」

後から思えば、その言葉を聞いた時だったのでしよう。青葉がこの司令官なら大丈夫だと、本当の意味で感じる事ができたのは。

だって、知ろうとしてくれるのです。わかった気になって満足するのではなく、かと言って理解することを諦めるわけでもなく。随分と不器用ですけど、真剣に向き合おうとしてくれてる。それだけでも、それが分かっただけでも、この場を設けて正解でした。

「だからこそお前達がやたら強いことに俺は安心したくらいだ。慢心じゃなく『ああこいつらは大丈夫だ』と、納得せざるを得ない程の強さだったからな」

恐がるどころか、安心ですか。

青葉達が深海棲艦を倒す様を見て、そう言ってしまうこの方は中々だと思えます。殆どの人は、やり過ぎだと言うでしょうから。

「安心したなら、何故もつと強くなって欲しいと?」

正直、強くなり過ぎて自分で自分が怖いのですが。

「まあ、なんつーの? 出る杭は打たれるからな。俺にはリスクが深海棲艦だけとは思えんし」

恐らく、大本営から見た我々の立場のことを仰っているのでしょう。

「それならより一層力を抑えた方が良いのでは?」

「今のままならな。だが出てるのが杭じゃなくてビルなら、流石に打とうとも考えないんじゃないか。それに甘かろうがなんだろうが、こちらに被害が出ないに越したことはない。ここの艦娘一人一人がい

かに強くても、数だけはどうしようもないだろうからな」

確かに数の少なさは問題点の一つです……。我々が鍛えれば、一般的な艦娘でも我々レベルまで上がってることが不可能ではありませんが、それは我々を脅威に感じている大本営が許さないでしょう。だからこそ既にある戦力を更に強化するというわけですか。

「それにお前らがいい奴なのを知っちゃった今、沈まれると後味が悪すぎる。……………ハツ、結局これも自分が辛い思いをしたくないだけの自己中で、お前らのことなんて考えてないのかもしれないがな」

そう言つて自嘲ぎみに笑う司令官のその顔には、本気の自己嫌悪が見て取れます。

……………ですが。

「大丈夫です。本当に自己中心的なら、そもそもそんな言葉が出てきません。そういう方は他人がどうなろうと気にしないはずなので。から。そんな発言が出てくる時点で司令官は優しいのだと青葉は思っています」

そう伝えると、司令官は居心地が悪そうに顔を顰め、

「優しくはねえんだけどな……………まあ、あれだ。とにかく沈むなよ？ 戦力が足りなくなったら困るからな。千葉が」

と話を終わらせようと今更すぎる小悪党アピールを始めました。ある意味これは一周回ってテレですね。というか心配するのは千葉だけですか！

「ふふふつ、勿論そう簡単に沈む気はありませんよ！」

「ええ……………なんで今ので笑顔になるの？」

「いえいえ。ただ司令官とならこれから上手くやっていけそうだなと思っただけですよ。司令官は嘘が下手みたいなので！」

司令官が本気になったらどうかは、まだわかりませんが。

「うへえ、理由が悲しすぎる。——つて嘘とかつ、ついてねーし？ 本当に俺が心配してんのは千葉だけだ。より言えば小町」

「ふむ。ダウトダウトちよつと本当、ですかね」

嘘付いてないから数えて。

「おい精度高すぎるだろ……………何、嘘発見機か何か？」

「や、今のは流石に誰でもわかりますよ?」

「はははまさか。……………マジかよ」

奇しくも先ほどの青葉のような反応をする司令官。

「目が泳いでましたし」

指摘すると司令官は両手で目を覆いました。

「俺嘘を上手くつけるように頑張るわ」

「何面白いこと言ってるんですか……………」

まあ流石に冗談でしょうけど。

と、質問にも一区切りが付き。ふと壁に掛かっている時計を確認すると、なかなか良い時間になっていました。

「さて、質問はこんなところですかね。青葉の我儘にお付き合いいただきありがとうございますございました!」

「おう。あー疲れた、今日はマジ頑張ったわ。お疲れー」

そう言っただけで席を立とうとする司令官を青葉は慌てて止めます。帰るとなると動きが速い!

「つてちよつと! これからお仕事ですよ!!」

そう指摘すれば、司令官は顔全体で絶望感を露わにします。すごい! 目が死んでいます!

「チツ、駄目か……………今の問答でもう大分疲れたんだけど、これから仕事ってマジ?」

ここにきて1時間半ほど経ちますが、問答だけなら30分も話してないですよ? あとは食事中の雑談です。

「まあまあ。今日はそんなに忙しくないですし、青葉も頑張りますから!」

そう言うと、司令官は渋々、本当に渋々ですが仕事に向かってくれる気になったようです。面倒そうな態度とため息を隠しませんが。

「はあ、しゃーねえか……………。そういや、今日の質問の回答ってどうすんの?」

メモってたけど、と司令官。

「わかりやすく纏めてから新聞に載せますよ? 艦娘専用の新聞なの

で司令官は読めませんが」

まあどうしても読みたいと言われれば渡すのも吝かではないですが、司令官は艦娘専用の新聞の内容にはさほど興味がないようです。もちよつと興味持っていないんですよ？ よ？ とチラチラ視線を送りましたがガン無視されました。

「ほー、そんなのがあるのか。正直目立ちたくないから載りたくないが今回に関してはそういう訳にもいかんだろうし……そうだな、『仕事苦手な提督なので是非執務を手伝ってあげましょう！』とでも書いてくれ」

「いやいやダメですー！」

それとなく自分の仕事を減らす気満々じゃないですか！

青葉は両手をバツにしてダメアピール。

「嘘は書きませんよ！ とうか大和さんが認めてる時点で執務能力が高いのはバレてますー！」

全く、隙あらば仕事を減らそうとしますねこのお方は。

「大和め、余計なことを」

「いや褒められてるんですよ?!」

「仕事が増えるなら嬉しくねえな……もつとゆっくりやるか。いやそうすると休憩時間減るしなー……」

声、声が漏れてます。

「あの本気でサボる方法を検討するのやめて貰って良いですかね」

「あつ、いや冗談だ」

絶対嘘です。目が泳いでますもん。

「とにかく、これから一緒にお仕事へ向かいますよ！」

言いつつ、青葉も席を立ちます。

望月さん並みに仕事嫌いなようですので、逃げないように腕を掴みます。

「お、おい、そんなことしなくても逃げねえよ」

途端に挙動不審になる司令官。相変わらず接触に弱い模様。

「お気になさらずー」

「いやなさる、なさるよ。……ねえ聞いている?」

司令官の言葉をスルーしながらお店を出ます。

あ、勿論鳳翔さんに朝食のお礼を言うのは忘れません。

「今日も美味しかったですよ！」

「ありがとうございます。提督はどうでしょう？ お口に合ったなら良かったのですが……」

訊かれた司令官は、

「いや美味かったよ。超美味かった。あれが口に合わないとか言う奴が居たらそいつはただの味音痴だ。なんなら毎日でも食べたいね。ごちそうさまです」

ものすつごいべた褒めでした。

鳳翔さんも、「まあ、ありがとうございます」なんて言って嬉しそうにしており、青葉も我がことのように嬉しく思いうんうんと頷いてました。

——因みに余談ですがこの司令官がここまで素直に、しかも本人を前にノリノリで褒めたのは後にも先にもこの時くらいで、実はかなりレアな場面を目撃していたわけですが、残念ながらこの時の青葉は知る由もありません。鳳翔さんの料理、おそるべし。

さてその後は、予定通り執務室で業務を開始し、司令官の予想以上の書類処理能力の高さに驚いたり（休憩時間を伸ばす為に爆速で処理するんですよこの人）、なんだかんだ言いながら不測の事態が起これば残業してくれることに驚いたり、まあ色々ありましたが悪無く、本日のお仕事を終えることが出来ました。

そして——

〔現在〕

青葉は先程撮影した司令官の写真の現像を終え、自室で一息つきつつこれまでのことを思い返していました。

あの時のインタビューで感じた通り、彼は色々言いながらも青葉達の司令官をやってくれています。仕事は早く、戦術に関してもなんだかんだ少しずつ覚えてくれますし、司令官の表面上のやる気のな



さとは裏腹に結構真面目（社畜）で驚いたくらいです。勿論艦娘に手を出したりもしていません。

そう。一年一緒に居て、司令官の良さを知った艦娘は少なからず居ますが、そうした者達がそれとなく好意を示そうと、割と素直に好意を伝えようと、なんならP O l aさんのように酔って全裸であろうと、凄まじい理性により絶対に手を出しません。

それとなく、同意であれば良いんですよ的なことを大和さんが伝えただけですが、返ってきたのは『ほーん、まあ俺には関係ないな。俺にそういう場面が来たとしたら艦娘に手を出さないかどうか試されるだけだろ』だそうです。他人不信、というか普通に女性不信すぎます……。過去に何があればそんなことに……。

しかしまさか、『艦娘に手を出さない』という項目で艦娘が困ることになるとは……。

司令官のガードが固すぎて一部艦娘のモヤモヤがやばいです。

青葉？ 青葉は――

せいぜいケツコンできたらなと思う程度ですよ！

## 守るべくはサンマー

今日は待ちに待ったオフである。

もちろん本来であれば週一は休日があるのだが、ここ最近前線付近で細かな小競り合いが頻発していたため、俺も艦娘もあまり休めていない状態が続いていた。うちの艦娘からしたら雑魚（姫級だけ）でも、出たからには倒さないわけにはいかないからな。

しかしそんな状況もつい昨日大型拠点を潰したことで解決し、ようやく通常運行に戻った。それにより俺は休めていなかった分の休みを一気に頂いたわけだ。4連休最高！

そんな訳で俺は今、休日を満喫すべく島の堤防で釣りをしている。  
……………。

まあ待てわかるよ？俺が休日だというのにゴロゴロせずアウトドアな趣味を楽しんでいることには大きな違和感を感じることもだろう。俺もそう思う。

だが勘違いしないで頂きたい。俺は釣りが趣味になつたわけではない。

釣り上げた魚を鳳翔さんに調理してもらいたくて釣りをしているのだ。

出不精な俺がわざわざ外に出て釣りをしたくなるほどには、鳳翔さんの作る魚料理は美味かった。

そして。  
「ていと……クソ提督、これは食べられる魚じゃないから海に返して  
いて」

意外にも釣りが得意らしい曙も一緒である。釣り用ベストを着用したガチ装備の少女は、俺が一人で釣りをしていると不思議なことによく会うのである。もしかして毎日釣りしてんの？

曙は釣れた魚から針を抜きつつ食用に向かないものを俺に渡してきた。

「言い直しちゃうのね……。つかなんだこの魚、色合いやべーな。これも深海棲艦の影響か……？」

強力な深海棲艦が多く棲まう海は紅く染まり、艦娘にとっては居るだけで継続的に微小なダメージを受ける過酷な海域となる。

そんな海が魚などの海洋生物に害がないはずもなく、多くの魚は住処を追われることとなったらしい。中には突然変異することで環境に適応する種もいるが、そういう種は大抵不味い。なんというか、鉄臭い。この魚もそんな種の一つだろうか。

「そうよ。信じられないかもしれないけど、それ元は鯖だから」

「は？ サバ？ この黒とシヨツキングピンクのマダラ模様の魚が、サバあ!？」

曙から手渡されたゲテモノにしか見えない魚を見て思わず叫ぶ。

……いまだ元気にビチビチと跳ねるこいつを改めて見ると、確かにシルエツトだけならサバに見えなくもないような。でも明らかに牙とか増えてるし、凶暴性が増している……。

俺はなんとも言えない気持ちになりながら元サバを海に放り投げた。もう釣れないでくれと切に願う。

「深海棲艦が海に齎した影響地味にエグいよな……」

奴らが出没するようになってから、海路の使用が困難になったというのは勿論だが、海の生態系が大きく崩れたのも人間にとってかなりの打撃だった。原因不明の海温低下により、緯度的には南国と言って差し支えないこの島で本来見かけない魚も釣れてしまう程の変化といえ、この異常さが伝わるだろうか。

「そんなの今更でしょ。あ、これは食べられるからクーラーボックスに入れといて」

そう言いながら渡された魚は、さっきの元サバと比較しても劣らないほどにアバンギャルドな色合いをしていた。

「ええ……これ食べるの？ なんかもうデカイ熱帯魚みたいなんだけど」

黄色と黒の縞模様が鮮やかなその魚は、スキューバダイビングなんかで見かけたなら海中に美しい彩りを加えてくれる（戸塚を思い出した）素晴らしいアクセントになるだろうが、食欲を唆る色合いではない。断じてだ。

「そりゃあそうよ。そいつ元からこの辺りに棲んでた在来種だし。正直不味い魚だったんだけど、海温が低下したおかげか身が締まって美味しくなったのよねえ」

「はあん、なるほどそういう変化もあるのか。」

「相変わらずやたら詳しいな曙」

俺と釣りをする時は大体こんな感じでなんだかんだ言いながら説明してくれるぼのたんだ。

「クソ提督が無知なだけよ！ いちいち説明させられるこっちの身にもなつてよね全く」

「プンスコと怒りながら言う割には説明してる時楽しそうなんだけど。いや言わないけど。」

「別に説明を頼んでな……何でもないです。いやあ曙のおかげで魚に詳しくなつちやうなあ！」

「ふんっ、最初からそう言いなさいよクソ提督！ 素直じゃない」

「いや、そればかりはお前に言われたくないんだが……」

素直じゃない艦娘筆頭だろうが。

「は、はあ!?! あたしは素直に生きてるっての！ ——つてクソ提督！ 引いてる引いてる!!」

素直さ云々にこれ以上突っ込むと全部ブーメランになりそうだと考えていると曙が俺の持つ釣り竿を見て声をあげる。グググツとなかなかの強さで竿を引かれ、慌ててグリップをしっかりと握り直す。

「おっと、結構重いな。サビキ釣りだし何匹か一気に掛かったのかも、なつと！」

タイミングを見つつリールを回す。アジとか釣れないかねえ。鳳翔さんの作るアジフライは絶品なんだ。

「クソ提督、逃したら承知しないからね！」

いやそんな素人に言われても。

「んじゃあ釣れなかったら間宮券をやろう」

「魚ども釣れるな!!」

「手のひら！」

そんなに間宮さんのアイスが好きかよ！

俺も好きです。間宮アイスは艦娘専用かと思っていたら人間用も作れるとか女神かな？

曙の手のひら返しに驚きつつ、堅実にリールを巻いていく。竿から伸びる糸の先が徐々にこちらに近づいてきて、ついに。

「おお、釣れた……ってすげえ釣れてんな」

引き上げたサビキの仕掛けには5匹ほどの魚がかかっている、うち1匹は腹立たしいことに先ほども見たゲテモノ鯖。帰ってくんなんて言っただろ！

で、残りのうち1匹がアジ。願ってはいたがまさか釣れるとは思っていないかった。これは嬉しい。

「て、提督。その魚って……まさか……」

釣れた魚のうち残りを指差してわなわなと震える曙。

めっずらしい表情してまあ。

「どうしたクソつけ忘れてんぞ……ん？」

残りの三匹。その姿は俺にも見覚えのあるものだった。

美しい銀色の鱗、尖った口、細長い体。

そう、サバやアジと同じく日本では一般家庭の食卓によく並ぶ魚。

サンマだ。

とはいえ曙は少々驚きすぎな気がする。

「んで曙。ここでサンマが釣れるのがそんなに珍しいのか？」

そう聞くと曙は露骨にため息を付き、しかし嬉しそうに俺を詰る。

この子俺を罵倒してる時が一番キラキラしてない？

「つはあー全くクソ提督で無知提督ね！ サンマはね、元々太平洋北部とかの冷たい海に多く棲む魚なの。海温が下がったくらいじゃ、わざわざここまで南下してくる理由が無いわけ。そんなくらい考えればわかるでしょ」

そもそも冷たい海が平気ってことだからね、と曙。

いや、普通そこまでのサンマの知識がまず無えよ？

「ほーん。んじゃあここでこいつらが釣れるのはおかしいわけだ」

「そ。多少は釣れてもおかしくないけど、少なくともあたしがここで

釣りをしてて釣れたことは無いわ。つまり——」

そこで曙は言葉を区切る。

「太平洋北部に何かあった、ってことか」

「そう考えるのが妥当ね」

なるほどねえ。

「それなら俺らがどうこうする問題じゃねえな。本土の管轄だし、艦娘を擁してるのは何も日本だけじゃない。各々の国でその内対処されんだろ」

元より太平洋北部はうちの管轄外で、その理由もそこまで強い深海棲艦が出没しないから、というものである。

深海棲艦が出ない訳ではないが、それらは戦闘経験の浅い艦娘でも対処できる程度の強さだったはずだ。

「ま、そもそもサンマが釣れたことから推測しただけだから杞憂かもしれないけど。……クソ提督ってこういう時、太平洋北部が心配だから様子を調べようとか言わないわよね」

曙がふと気になったように言う。

「言う訳ないだろ。なんでわざわざ仕事を増やさにやららん。つーかうちの艦娘が異常に強いから成り立ってるだけで、普通の鎮守府だったらブラックもブラックだぞ。太平洋中部以下を艦娘鎮守府だけでカバーするとか」

まあ実際は大きな敵拠点が出来る度に潰してるだけだから、言葉のイメージほど忙しく哨戒して、敵を見つけ次第撃滅して、という感じではない。拠点のボス個体を倒し、妖精の作るビーコンを置けばその海域はしばらく安全になるのだ。

とはいえ範囲が範囲だからな。流石に今以上の海域を管理するとは艦娘の数の上で不可能だ。

「ほんと、そういうところは引くほどドライねクソ提督」

言いつつ何故か少し嬉しそうな曙。

「ドライか？俺が薄情なだけだろ。あとめんどい」

千葉に危険が迫ったら一も二もなく駆けつけるがな！ 職権濫用？ 知らんなあ！ まあうちの艦娘が駆けつけたら千葉どころか日

本全域が安全になるんだろうけど。

「はん、むしろそれで良いのよ。何も考えず手助けに行こうなんて言おうものなら引つ叩いてたわ！ ……まあ、クソ提督がそういう浅い正義感とか持ち出さないのは知ってたけどね。そこはあんたで良かった」

「さよけ」

……………。

ん、あれ、これ曙デレたの？

いやでも曙の表情普通だな。気のせいか。

その後。

小一時間ほど釣りを続けた俺たちはアホほどサンマを釣り上げることとなり。

太平洋北部の異常がいよいよ現実味を帯びてきて曙と目を見合わせたのだった。

## 守るべくはサンマ2

予定通り釣り上げたサンマは鳳翔さんに渡して調理してもらおう。

そうして頼んだサンマの塩焼き定食は、ミシユランに星を付けさせたら間違いないく三つ星であろうことが確定している逸品であり、この職場で良かったと思うことの最上位。

俺にとつて食事なぞ好物であるラーメン（あと小町の料理）を除けば、食べられて腹に溜まれば良いぐらいの物だったが、思わずその認識を改めたもんね。胃袋の捕まれ方がやばい（マスターボール級）。言っておくが雪ノ下で上手い料理にある程度耐性がある俺でこれだからな。

店内を見ればどこからサンマの話聞きつけたのかいつの間にかやら満席となっており、皆鳳翔さんのサンマ料理に舌鼓を打っていた。時刻は18時を回った頃だが、早くも酒盛りを始めている艦娘まで居る。近寄ると巻き込まれるので触らぬ神になんとやらである。いや酒持つてこつち見るなP o l a。そのワイン何本目？

そしてカウンター席に座る俺の右に曙、左に伊58。……いつの間に座ったんだらう。58は相変わらずどこからともなく現れるやつである。

「提督と曙ちゃん、サンマありがとうでち！　こんなに沢山釣るなんてすごいよね！」

サンマの蒲焼きを美味しそうに食べる58がお礼を言う。鳳翔さん何品作ったのだらうか……。

「ま、まああたしにかかればこんなもんよ！」

褒められ慣れていないからか曙は挙動不審になっている。

「正直こんなに釣れるとは全く思ってたんだけどな……」

俺も曙もここまで大漁なのは想定外もいとこだった。

釣れすぎて在籍する艦娘全員に振る舞えるレベルの釣果とか初体験である。

「クソ提督は全然釣れてなかったでしょ。釣ったサンマの8割あたしのじゃないの！」



「バカお前3割は釣ったから。舐めんじやねえよ」

「3割で威張るなクソ提督！」

「け、経験の差を自覚してるだけだし？」

「みみっちい争いしないほしいでち……」

「流石の58も呆れ顔である。」

「ふんっ。ま、今回は頑張ったほうと言えなくもないわね」

鼻を鳴らしてそっぽ向いてはいるが、流石の俺でも褒められているとわかった。ありがとうございます。そしてそこに追い打ちをかける58。

「……曙ちゃんて提督に結構素直だよな？」

「なっ!? あたしはいつも誰にでも素直よ！」

「これでち」

「これって何よ!?!」

ギャーギャー憤慨する曙を余所に、はあやれやれみたいに手のひらを上に向け肩を竦める58。何それ腹立つ。そして俺の方を見て、ニヤリと笑う。え、嫌な予感。

「素直っていうのはこういうことを言うでち。……こほん。提督、だーい好き!!」

わざわざ咳払いをしてから俺の左腕に大げさに抱きついてくる58、つて——

「やめろ抱きつくな離れるあざとい食べにくい！」

あと大変柔らかいです。

「それと簡単に大好きなんて言うもんじゃありません。男が勘違いしたらどうするの」

慎重に腕を振って58を振り払い注意すると、意外と素直に離れてくれて一安心。だけど何故かげんなりした顔をしてらっしやる。w h y?

「こっちもこっちでこれでちた……」

そういやこっちも素直じゃなかったわみたいな顔をされてしまったが、今のを喜んで受け入れたら変態の誹りは免れないと思うしこれは罠だな。

そして一連の流れを見た曙がなぜか勝ち誇った様な顔をしながら言う。

「クソ提督にそういうのは効かないわよ」

「いやーうっかりでち……。というか提督たまにお父さんみたいなこと言うよね。——パパ?」

「やめろ、その格好でパパはマジで止めろ」

ゾクリと冷たい物が背筋に走るから（逮捕的な意味で）。

「えっ、本気で嫌そう!? お、お父さんの方が良かったでちか?」

俺の反応が予想外だったのか慌てる58。

「違う、そうじゃない」

スク水セーラーでパパとか如何わしすぎるんだよ!! パパ（意味深）になつちやうだろうが!

「いいじゃない、お父さん?」

曙は弱点見つけたみたいで嬉々として呼ぶんじゃねえ。ニヤニヤしやがって!

「お前それ外で絶対やんなよ!」

思わず声を荒げる程度には、この環境でパパはまずい。ここなら百歩譲ってまだいいがうっかり本土でポロつと言われたら俺の人生が終了しかねない。どう見てもパパの年齢じゃないし。

「流石にわかってるわよ」

まあ曙は口こそ悪いが分類的には真面目側なので心配はしていない。……だ、大丈夫だよな? まだニヤついてるんですけど……。

俺が怯えていると、背後から気の抜けた声をかけられる。

「ああ、いたいたあ。司令かーん、サンマさんきゅー」

声の方に振り返れば、そこには我らがサボリの同sもとい伝道師、望月さんが立っていた。

「望月か。お前もサンマ食ったのか?」

わざわざ店にやって来るほどサンマ好きだっただろうか。いや普通の艦娘なら来るけどこいつはなあ?

「ここで寝てたらなんか騒がしくなってきたさー、起きたらこれじゃん? ラッキーだったよなえ」

「ああ、最初からここに居たのね……」

「そういえば初めてこいつ見たときもここで寝てたな……。なに、ここに住んでんの？」

「そーゆーこと。あー、食べ疲れー」

「言いつつ俺の肩に寄りかかって、否のし掛かってくる。」

「同じ接触でも先程の58と違いそこには可愛げと言うものがカケラもなく、楽をする為に体重を預けてきているから普通に重い。ただただ重い。」

「いや重いから。まだ椅子あるじゃん、曙の隣に。そっち行けよ」

「俺は曙の隣を指差す。」

「カウンター席って背もたれ無いんだよねえ」

「丸椅子だからな。ってそんな理由で俺は今重い目に遭ってるの？」

「曙に乗しかかれ」

「勝手なこと言うなクソ提督」

「もっちーこんばんわ！」

「58はよくこのタイミングで挨拶出来たね？」

「おお、ゴージャバンわー」

「こいつら全然話聞かないね？」

「暖簾に腕押し感が凄いんだが。」

「さっすが鳳翔さんだよねえ。なめろう超うまかったー」

「なめろう、そういうのもあるのか……。」

「望月の話を聞いた曙も同じことを思ったのかやや思案顔になる。」

「うーん、なめろうか。あたしも頼もうかな」

「あつ、もう望月の体勢については話が終わったことになりましたね……。被害が自分に来ないように流す気だ。」

「しかしなんとかこの荷物（望月）を誰かに押し付けたい所。」

「俺はちらりと58の方を見てから、」

「58、望月をあげよう」

「直球勝負を仕掛けてみる。」

「いらないでちー！」

「ダメかー。笑顔でキツパリ、当然の如く断られてしまった。」

まあ伝説ポ○モンに初手モンスターボ○を投げるぐらい雑な振りではあつた。

「だつてさ？ やっぱあたしの脱力心を受け止められるのは司令官だけだあ。これが信頼つてやつだよねえ」

「いやそんな信頼はいらん。速やかに降りて床で寝ろ」

「ううかなんだ脱力心つて。適当な造語を作るな。」

「あーひどーい」

「クソ提督サイテー」

「曙はそこで便乗してくんな！」

詰なじるところを見落とさない奴だな。

「提督もいい加減諦めるでち」

「おかしい、驚くほどに味方がいねえ。」

「そうだぞー諦めろー」

「え、これ俺が悪いの？ 嘘だろ？」

しかも当の望月はこの流れに然程興味無いっぽいのがより腹立たしかつた。もう半分寝てるし脳死で喋つてんだろこいつ……。

——で最終的にどうなったかといえば。俺の席のすぐ後ろにもう一つ椅子を持つてきて、背中合わせでお互いを背もたれにするように座る形で落ち着いた。何この構図……。

「とういか望月は食べ終わったんだろ？ さつさと寮に帰れよ」

「なんでわざわざこっち来たのか。」

「食べたすぐ後つて動きたくなくねー？」

「ぬう」

くつ、それはちよつとわかる。俺も昔よく小町に牛になると注意されながらもダラけたものである。

「えっ、なんで今クソ提督押し黙つちやつたのよ？」

今の論破される所じゃなくない？ と曙。

「ダラけたい気持ち理解出来ちゃう提督にもつちーを追い払うのは一生無理という話でち」

「何それバカなの？」

「うるさいぞ外野」

悔しいので次の面倒な作戦とかに望月をねじ込むケツイを漲らせる俺であった。

さてそんなこんなで、アホな雑談をしつつ食事を楽しむ。パーソナルスペースの狭い艦娘達にヒヤヒヤさせられることは多々あれど、概ね穏やかな夕食だったと言えるだろう。もつともこんな感想少し前ならあり得ないが、艦娘は距離感云々言っても聞かない奴が多すぎだなあ……幾ら俺でも流石に慣れる。一人が気楽なのは変わらないがな。

しかしながら穏やかな時間というものは唐突に終わってしまうものであり、俺のこのサンマタイムも、一本の電話によって強制終了させられたのである。

俺が鳳翔さんの作ったサンマの塩焼き定食を食べ、余りの美味さに感動——イメージ映像では服が弾け飛んでいる——していると、ポケットの端末が震え始めた。

「つと、ちよつと電話だ」

隣で食べていた曙と58に一言告げてから席を外す。脱力していた望月はそのまま俺の抜けた席にベシヤッと倒れこんでいた。怠惰。

☒

店の外に出つつ電話に出る。

太陽が沈んだ空には、まばらに浮かぶ雲の隙間から月が見え隠れしていた。

「もしもし?」

ディスプレイに映し出された通話相手の名前から面倒ごとの予感  
はプンプン漂ってきていたが、出ない訳にもいかない。

『おお、繋がってよかった。久しぶりだな比企谷少佐』

「と言っても2ヶ月ぶりくらいでしょう。——安仁屋大将」

案の定、俺を提督にした大将——安仁屋大将であった。前回の定期報告以来だったかな。

『そうだったか? まあいい。緊急の要件がある』

「はあ、なんででしょうか」

『実は太平洋北部の辺りに妙な動きをする深海棲艦が現れてな。その撃滅を頼まれて欲しい。今のところ自発的に攻め入ってくる様子はないが、かと言ってその海域は重要な補給路があるから放置する訳にもいかん』

太平洋北部という単語を聞いてサンマはフラグだったのかよと思いながら、淡い期待を込めて質問する。

「一応聞きますがそっちの艦娘でなんとか出来なかったんですか？」  
まあ出来るならこんな電話かけて来ないだろうが。

『それが妙に手強い為こちらの艦娘では押し返すのが精一杯のようだな。その上軽く戦闘を行うとすぐ撤退していく為こちらとしても扱いが難しい。相手の底が見えない状態で深追いするのも危険だ。勿論時間をかければこちらだけでの対処も無理ではないだろうが……』  
場所が場所なだけに急ぐ必要がある、と。なるほどねえ。

ちなみに大将の言うこちらの艦娘とは、本土にある複数の鎮守府全体の戦力を指す。一般的な、逸脱しない強さの艦娘達で構成されている。

『そしてここからが最初に言った妙な動き、という話に繋がるのだが……』

そこで一旦言葉を区切り、

『偵察によるとその海域の深海棲艦は、高頻度で仲間割れの様な行動をしているようだ』

と、繋げた。

仲間割れか。行動原理が人間艦娘憎い沈めえ！ な深海棲艦同士ですら確執やらがあるのだとすれば、世の中本当に面倒臭く出来ているな。

「はあ、なるほど。深海棲艦も一枚岩じゃないとかですかね」

というか深海棲艦がその海域でドンパチ仲間割れしてるからサンマが南に逃げたのでは……？ やべえ繋がっちゃったよ。

『かもしれん。とにかく、本土の艦娘だけでは対処出来ないから比企谷少佐の艦娘に任せるとするのがこちらの決定だ。本来太平洋中部以下を担当する君達に頼むのは忍びないのだが……』

底の知れない相手を放置するのは気が気じやないだろうし仕方ない。

「仕事ならやりますよ。ただこっちは幾ら強くても人数がカツカツなんで、多少は前線を押し返されると思つて下さい」

具体的にはうちの艦娘一人当たり排他的経済水域1.5個分くらい押し返される。やだ一人のカバー範囲広すぎ。

『それは分かっているとも。何人出せる?』

「まあ詳細な資料を送ってもらわないと何とも言いがたいですが、そちらの艦娘で押し返せる程度なら……えー3、4人くらいじゃないですかね」

少なくとも感じるだろうが、慢心無しのオーバーキル編成だ。何せこちらで普段組む艦隊の編成艦数と同じなのだし。

『……それで事足りると言うのだから、相変わらず君達の練度は凄まじいな。一応大本営に送る報告には12名と記載しておきたまえ』

大将からいきなり書類のねつ造を指示された、のだがこれには深い訳があつた。

こういう時、異常な強さを隠す為に人数や工数を盛ることを予め大将と決めてあるのだ。理由は大まかに二つあり、現在の強さが正確に理解されてしまうとこちらの仕事が増えてしまうからというのが一つ、うちの鎮守府で特攻かけて深海棲艦を全滅させるとか言われないうえというのが一つだ（言われても無理だし）。

大将曰く、大本営が想定していた以上にこちらの艦娘は強いらしい。現実離れた戦力を目の当たりにした大本営がトチ狂わないとも限らない。

故に戦力にサバを読むことで実力を誤認させているわけだ。

さらに言えばその齟齬を敢えて訂正しないことで今後の手札に繋げるとかなんとか……大将も大将で暗躍しているようだ。

とはいえ複数の鎮守府が連合艦隊を多数組んでやつと追い返すレベルを、ただの1連合艦隊でなんとかする、と言うのだから、なんなら盛り足りないまである。

「うす。まあ強いのは艦娘の功績で俺はなんもしてませんがね」

本当なーんであんなにモリモリもりもり強くなるのか。サイヤ人かな？ いやあいつらピンチにならねえけど。

『そうかね？ 君が入った当初と比較してもかなり強くなっていると思うが』

「だとしても艦娘が勝手に頑張ってるんでしようよ」

いやマジで。あいつら休日にも訓練してるから。

娯楽届いてから少しは休む様になったけどさ……。

『はっはっは！ そういうことにしておこうか』

ただの事実なんだが。

『ではすぐに詳しい資料を端末に送る。よろしく頼むぞ』

そう言つて大将は通話を切った。

さてこれから送る艦娘を考えるわけだが、最近俺の仕事増えてない？ ちよつと前までは遠征以外の編成なんかは大和あたりが決めてたのに……。

一度『艦娘の言うことに口を出さない』に抵触するだろと突っ込んでみたが、艦娘の判断でお願いしてるので大丈夫です（意識：文句言わずやれ）と言われてしまった。くそう。

……お、データが端末に届いた。

届いた資料を見ながら概要を把握していく。資料には期日や敵艦の情報、海域の特徴や周囲の島など地理的情報がそれぞれ写真付きで記載されていた。マメだな、とか思いつつ資料を読み進める。

うわあ、化け物然とした駆逐艦とか久しぶりに見た。こつちじゃ大体が姫級鬼級（最低でも人型）だからな。俺はむしろこつちのが怖く見える。サイズもでかいし。

他には空母に戦艦——あとは姫級が2体報告に上がってるのか。とはいえこの程度なら古参一人（一隻？）で何とかかなりそうなのがある。艦娘のバグってるどころ。四人もいらねえな……。あいや、妙に強いんだっけ？ なら良いか。

通話を切った場である食事処鳳翔の前で顎に手を当て思案する。深海棲艦の挙動が怪しいのは事実だし、割と容赦無しで行くのが無難



か。慢心して怪我させるのもバカらしいし、俺はまだ見たことないがもし突然変異種とやらならマズい。

そういえば、明日あたり長期遠征からあいつが帰ってくるんだっただか。気分的には憂鬱だが、タイミング的にはありがたい。帰ってきて早々で悪いが今回の任務に突っ込もう。

って俺今日オフのはずなのに仕事してない？ おかしくね？ 悔しいので今日の秘書官（俺がオフでも一応居る）の龍田にも事の次第を話して巻き込んで愚痴ってやる（ただの報連相とも言う）。

明日遠征から帰ってくる苦手な艦娘、天龍についての相談もしたいしな。うん。